

ぞ、と、並據イ木

鯖をうる翁杖をもちて鯖をになふ。其鯖の數八十。則變じて八十花嚴經となる。件の杖の木大佛殿の内東回廊の前につきたつ。忽に枝葉をなす。これ白榛の木也。今伽藍のさかへ衰へんとするにまたがひて。此木さかへ枯といふ。かの會の講師この比までも中間に高座よりありて。後戸よりかひけつやうにしていづる事これをなまぶ之。彼鯖の枝の木三十四年がさきまでは。葉は青くてさかへたり。その後なを枯木にてたてりしが。此たび平家の炎上にやけおはりぬ。世の末ぞかしと口惜かりけり。

獵師佛を射事。

昔。あたごの山に久しくおこなふ聖ありけり。年比行て坊をいづる事なし。西のかたに獵師あり。此聖をたうとみてつねにはまうて、物たてまつりなどしけり。ひさしくまいらざりければ。餌袋に干飯など入てまうてたり。聖悦て日比のおぼつかなさなどの給ふ。その中に入るよりての給やうは。この程いみじくたうとき事あり。此年來陀念なく經をたもち奉りてあるるしやらん。この夜比普賢并象にのりてみえ給。こよひとままりておがみ給へといひければ。この獵師よにたうとき事にこそ候なれ。さらばとまりておがみ奉らんとてとままりぬ。さて聖のつかふ童のあるにとふ。聖のたまふやうはいかなる事ぞや。をのれも此佛をばおがみまいらせたりやとへば。童は五六度ぞ見たてまつりて候といふに。獵師我もみたてまつる事もやあると

て。聖のうしろにいねもせずしておきるたり。九月廿日の事なれば夜もながい。いまやいまやと待に夜半過ぬらんと思ふほどに。東の山の嶺より月の出るやうにみえて。嶺の嵐も冷しきに。この坊の内光さし入たるやうにてわかくなりぬ。みれば普賢并白象に乗てやう／＼おはして坊の前に立給へり。聖なく／＼おがみていかにぬし殿はおがみ奉るやといひければ。いかゞはこの童もおがみ奉る。をひ／＼いみじうたうとして。獵師思やう。聖は年比經をもたもち讀給へばこそその日はかりにみえ給はめ。此童我身などは經のむきたるかたもまらぬにみえ給へるは。心をられぬ事と心のうちにおもひて。此事心みてん。これ罪うべき事にあらずとおもひて。とがり矢を弓につがひて。聖のおがみ入たるうへよりさしこして。弓をつよく引てひやうと射たりければ。御胸のほどにあたるやうにて火をうちけつごとくにて光もうせぬ。谷へといろめきて逃行をとす。聖これはいかにし給へるぞといひてなきまどふ事限なし。男申けるは。聖の目にこそみえ給はめ。わがつみふかきもの、目に見え給へば心み奉らんとて射つるなり。まことの佛ならばよも矢はたち給はじ。さればあやしき物なりけりといひけり。夜あけて血をとめて行てみければ。一町ばかり行て谷のそこに。大なる狸胸よりとがりやを射とをされて死てふせりけり。聖なれど無智なればかやうにばかされけるなり。獵師なれども慮ありければ狸を射害。そ

のばけをあらはしける也。

千手院僧正仙人にあふ事。

むかし。山の西塔千手院に住給ける。静観僧正と申ける座主。夜深く尊勝陀羅尼をよもすがらみてあかして年比になり給ぬ。きく人もいみじくたうとみけり。陽勝仙人と申仙人そらを飛てこの坊のうへを過けるが。この陀羅尼のこゑをきいて。ありて高欄のほこ木のうへに居給ぬ。僧正あやしとおもひてとひ給ひければ。蚊のこゑのやうなる聲して。やうせう仙人にて候なり。空を過候つるが。尊勝陀羅尼の聲をうけたまはりてまいりて侍なりとのたまひければ。戸をあけて請せられければ。とび入て前に居給ぬ。とし比の物語して。今はまかりなんとてたちけるが。人げにをされてえたゝざりければ。香爐の煙をちかくよせ給へとの給ければ。僧正香呂をちかくさしよせ給ける。そのけぶりにのりて空へのぼりにけり。此僧正は年をへて香呂をさしあげてけぶりをたてゝぞおはしける。この仙人はもとつかひ給ける僧のおこなひしてうせにけるを。年比あやしとおぼしけるに。かくまてまいりたりければ。おはれおはれとおぼしてぞつねになきたまひける。

静観、釋家官班
配云増命延曆寺
座主證誠靜觀知
證弟子延曆十六
年四月五日任
(守時座主)
二、原作と、據イ
本改

宇治拾遺物語卷第九

瀧口道則術をならふ事。

むかし。陽成院位にておはしましける時。瀧口道則宣旨を承。陸奥へくだるあひだ信濃國ひくうといふところにやどりぬ。郡の司にやどをとれり。まうけしてもてなして後。あるじの郡司は郎等引具して出ぬ。いもねられざりければやはらおきてたゝずみありくに。みれば屏風をたてまはしてたゝみなどきよげに志き。火ともしてよろづめやすきやうに志つらひたり。そらだき物するやらんとかうばしき香まけり。いよいよ心にくゝおぼえて。まくのぞきてみれば。年廿七八ばかりなる女一人ありけり。みめことがらすがたありさまことにいみじかりけるが。たゝひとりふしたり。みるまゝにたゝあるべき心ちせず。あたりにも人もなし。火は几帳の外にともしてあれどわかあり。さてこの道則おもふやう。よにくゝねんごろにもてなして心ざし有つる郡司の妻を。うしろめたなき心つかはん事いとあしけれど。この人のありさまをみるに。たゝあらんことかなはじと思て。よりてかたはらにふすに。けにくゝもあどろかず。口おほひをしてわらひふしたり。いはんかたなくうれしく覺ければ。長月十日比なれば。衣もあまたきず一かさねばかり男も女もきたり。かうばしきことかざりなし。我きぬをばぬぎて女のふところへ入に。志ばしはひきふたぐやうに志け

れども。あながちにけにくからずふところに入ぬ。男のまへのかゆきやうなりければ。さぐりてみるに物なし。おどろきあやしみてよくくさぐれども。あとがひのひげをさぐるやうにてすべてあとかたなし。大きにおどろきて。この女のめてたげなるもあすられぬ。この男さぐりてあやしみくるめくに。女すこしほうゑみて有ければ。いよく心えずおぼえて。やはらおきてわがね所へかへりてさぐるにさらになし。あさましくなりてちかくつかふ郎等をよびて。かゝるとはいはて。こゝにめてたき女あり。我も行たりつるなりといへば。よろこびてこの男いぬれば。まばしありてよにくあさましげにてこの男いできたれば。これもさるなめりと思て。またこと男をすゝめてやりつ。これもまたしばしありて出きぬ。空をあふぎてよに心えぬけしきにてかへりてけり。かくのごとく七八人まで郎等をやるに。おなじけしきにみゆ。かくするほどに夜もふけぬれば。道則思ふやう。よひにあるじのいみじうもてなしつるをうれしと思つれども。かく心えずあさましき事のおれば。とくいでんと思て。いまだ明はてざるにこそぎて出れば。七八町ゆくほどに。うしろよりよばひて馬を馳てくるものあり。はしりつきてまろき紙につゝみたる物をさしあげてもてくる。馬をひかへてまてばありつるやどにかよひしつる郎等なり。これは何ぞとへば。これ郡司のまいらせよと候物にて候。かゝるものをばいかですてはあはし候

ども、古本作
とりにく

ぞ。かたのごとく御まうけして候へども。御いそぎにこれをさへおとさせ給てけり。さればひろひあつめてまいらせ候といへば。いでなにぞととりてみれば。松茸をつゝみあつめたるやうにてある物九あり。あさましくおぼえて八人の郎等どもあやしみをなしてみるに。まことに九の物あり。一度にさつとうせぬ。さてつかひはやがて馬を馳てかへりぬ。そのあり我身よりはじめて。郎等どもみなありくといひけり。さて奥州にて金うけとりてかへるとき。又信濃の有し郡司のもとへゆきてやどりぬ。さて郡司に金馬驚羽などおほくとらす。郡司よにくよろこびて。これはいかにおぼしてかくはま給ぞといひければ。ちかくよりていふやう。かたはらいたき申事なれども。はじめこれにまいりて候しとき。あやしき事の候しはいかなる事にかといふに。郡司物をおほくえてありければ。さがりがたくおもひてありのまゝにいふ。それはわか候しときこの國のおくの郡に候し郡司の年よりて候しが妻の。わかく候しに志のびてまかりよりて候しかば。かくのごとくうしなひてありしにあやししく思ひて。その郡司にねん比に心ざしをつくしてならひて候なり。もしならはんとおぼしめさば。このたびは大やけの御使なり。すみやかにのぼり給て。またわざと下給てならひ給へといひければ。その契をなしてのぼりて。金などまいらせて又いとまを申てくだりぬ。郡司にさるべき物などもちてくだりてとらすれば。郡司大に

河、古本作水

よろこびて。心のをよばんかぎりはをしへんとおもひて。これはおぼろげの心にて
 ならふことにては候はず。七日水をあみ精進をして習事なりといふ。そのまゝに清
 まはりて。その日になりてたいふたりつれてふかき山に入ぬ。大なる河のながるゝ
 ほとりに行て。さまゝの事どもをえもいはず罪ふかき誓言どもたてさせけり。その
 郡司は水上へいりぬ。その河上よりながれん物を。いかにもく鬼にてもあれな
 にしてもあれいだけといひてゆきぬ。まばしばかりありて。水上の方より雨ふり風
 吹てくらくなり水まさる。まばしありて川上よりかしら一いだけばかりなる大蛇
 の。目はかなまりを入たるやうにて。せなかは青く紺青をぬりたるやうに。くびのま
 たは紅のやうにてみゆるに。先こん物をいだけといひつれども。せんかたなくおそ
 ろしくて草の中にふしぬ。まばしありて郡司きたりて。いかにとり給つやといひけ
 れば。かうくおぼえつればとらぬなりといひければ。かくくちおしきことかな。さ
 てはこの事はえならひ給はじといひて。今一度心みんといひて又いりぬ。まばしば
 かりありてやをばかりなる猪のまゝのいできて。石をはらくくだけば。火きら
 きらといづ。毛をいらくかして走てかゝる。せんかたなくおそろしけれども。是をさ
 へとおもひきりてはしりよりていできてみれば。朽木の三尺ばかりあるをいだけた
 り。ねたくくやしき事限なし。はじめのまかゝる物にてこそありけれ。などかいだか

やを、古本作や
ま、古本作
いら、古本作
いから

ざりけんとおもふほどに郡司きたりぬ。いかにとへばかうくといひければ。ま
 へのものうしなひ給事はえならひ給はずなりぬ。さてこと事のはかなき物をものに
 なす事はならひぬめり。さればそれををしへむとて。をしへられて歸のぼりぬ。口お
 しき事かぎりなし。大内にまいりて瀧口どものはきたる沓どもをあらがひをきて。
 みな犬子になしてはしらせ。古き藁沓を三尺ばかりなる鯉になして。藁盤のうへに
 おどらすることなどをしけり。御門このよしをきこしめして。黒戸のかたにめして
 ならはせ給けり。御几帳のうへより賀茂まつりなどわたし給けり。

寶志和尚影の事。

むかし。もろこしに寶志和尚といふ聖あり。いみじくたうとくおはしければ。御門か
 の聖の姿を影にかきとめんとて。繪師三人をつかはして。もし一人してはかきた
 がゆるともありとて。三人志て面くうつすべきよし仰ふくめられてつかはさせ
 給に。三人の繪師聖のもとへまいりて。かく宣旨を蒙てまうでたるよし申ければ。ま
 ばしといひて法服の装束志て出合給へるを。三人の繪師をのくかくべき絹をひろ
 げて。三人ならびて筆をくださんとするに。聖志はらく我まことの影あり。それをみ
 にかきうつすべしとありければ。繪師左右なくかゝらずして聖の御影をみれば。大指
 の爪にてひたひの皮をさしきりて。皮を左右へ引のけてあるより。金色の菩薩のか

ほをさし出たり。一人の繪師は十一面観音とみる。一人の繪師は聖観音とちがみ奉りける。をのくみるまにうつしたてまつりてもちてまいりたりければ。御門おどろき給て。別の使を給てとはせ給ふに。かいけつやうにしてうせたまひぬ。それよりぞたい人にてはおはせざりけりと申あへりける。

越前敦賀女観音たすけ給事。

越前の國につるがといふ所にすみける人ありけり。とかくして身ひとつばりわびしからですぐしけり。女ひとりより外にまた子もなかりければ。このむすめをぞまたなき物にかなしくしける。この女をわがあらんありたのもしくみをかんとて。あとこあはせけれど男もたまらざりければ。これやくと四五人まではあはせけれどもなをたまらざりければ。まわびてのちにはあはせざりけり。あたる家のうしろに堂をたてし。この女たすけ給へとて観音をすへ奉りける。供養し奉りなどしていくばくもへぬほどに父うせにけり。それだに思ひなげくに。引つらくやうに母もうせにければ。なきかなしめどもいふかひもなし。まる所などもなくて。かまへて世をすぐしければ。やもめなる女ひとりあらんには。いかにしてかはかくしきことあらん。おやの物すこし有けるほどは。つかはるゝ物四五人ありけれども。物うせはてしければ。つかはるゝものひとりもなかりけり。物くふ事かたくなりなどして。をのづか

い、或當作く

らもとめいでたるありは。手づからいふばかりにしてくひては。我おやの思しかひありてたすけ給へと観音にむかひ奉て。なくく申るたるほどに。夢にみるやう。このうしろの堂より老たる僧の來て。いみじういとあしければ。男あはせんと思てよびにやりたれば。あすぞこゝにきつかんずる。それがいはんにまたがひてあるべきことの給とみてさめぬ。この佛のたすけ給べきなめりと思ひて。水うちあみてまゐりてなくく申て。夢をたのみてその人を待とて。うちはきなどしてゐたり。家は大きにつくりたりければ。親うせてのちはすみつきあるべかしき事なけれど。やばかりはおほきなりければ。かたすみにぞゐたりける。まくべきむしろだになかりけり。かゝるほどにその日の夕がたになりて。馬のあしをとどもしてあまた入くるに。人どものぞきなどするをみれば。旅人のやどかるなりけり。すみやかにるよといへば。みな入きてこゝにかりけり。いゑひろしいかにぞやなど。物いふべきあるじもなく。我まゝにもやどりのるかなといひあひたり。のぞきてみれば。あるじは三十ばかりなるおとこのいとよげなるなり。郎等二三十人ばかりある。下すなどとりて七八十人ばかりあらんとぞみゆる。たゝるにるに薙たゝみをとらせばやと思へども。はづかしと思ていたるに。皮子薙をこひて皮にかさねてまきて。幕引まはしてゐぬ。そいめくほどに日も暮ぬれども。物くふともみえぬは物のなきにやあらんと

ぞみゆる。物あらばとらせてましとおもひるたるほどに。夜うちふけてこの旅人の
けはひにて。此おはします人よらせ給へ物申さんといへば。なに事にか侍らんとて
いざりよりたるを。なにのさはりもなければふといりきてひかへつ。こはいかにと
いへどいはすべくもなきにあはせて。夢にみしともありしかば。とかくおもひいふ
べきにもあらず。この男は美濃國に猛將ありけり。それがひとり子にてその親うせ
にければ。よろづの物うけつたへておやにもおとらぬものにてありけるが。思ける
妻におくれてやもめにて有けるを。これかれ聲にとらん妻にならんといふものあま
たありけれども。ありしつまににたらん人をおもてやもめにすすぐしけるが。若狭
にさたすべき事ありて行なりけり。ひるやどりのるほどに。かたずみにるたる所も
なにのかくれもなかりければ。いかなるものゝるたるぞとのぞきてみるに。たゞあ
りし妻のありけると覺えければ。目もくれ心もさはきて。いつしかとく暮よかし。近
からんけしきも心みんとて入きたるなりけり。物うちいひたるよりはじめ。露たが
ふところなかりければ。あさましくかゝりける事もありけり。わかさへとおも
ひたゞざらましかば。この人をみましやはとうれしき旅にぞ行ける。わかさにも十
日ばかりあるべかりけれども。この人のこゝろめたさに。あけば行て又の日かへる
べきぞと返々ちざりをきて。さむげなりければ衣もきせをき。郎等四五人ばかり。そ

ありけりとして、
此下多有脱文、
宜参考今昔物語

れが従者などとりぐして。廿人ばかりの人のあるに。ものくはすべきやうもなく。馬
に草くはすべきやうもなかりければ。いかにせましと思なげきけるほどに。おやの
みづし所につかひける女のむすめのありとばかりはきしけれども。きかよふことも
なくて。よきおとこしてことかなひてありとばかりはきしわたりけるが。おもひも
かけぬにきたりけるが。誰にかあらんと思て。いかなる人のきたるぞととひければ。
おな心うや御覽じまれぬは我身のとがにこそさぶらへ。をのれは故うへのおはしま
ししあり。みづし所仕候しものゝむすめに候。年比いかでまいらんなど思てすぎ候
を。けふはよろづをすて、まいり候つるなり。かく便なくおはしますとならば。あや
しくともめて候所にもおはしましがよひて。四五日づもおはしませかし。心ざし
は思たてまつれども。よそながらは明くれとぶらひたてまつらん事も。あろかなる
やうにおもはれ奉りぬべければなど。こまぐとかたらひて。このさぶらふ人々
はいかなる人ぞととへば。こゝにやどりたる人のわかさへとていぬるが。あすこゝ
へ歸つかんずれば。その程とてこのあるものどもをとめをきていぬるに。これに
もくふべき物はぐせざりけり。こゝにもくはすべき物もなきに。日はたかくなれば
いとあしとおもへども。すべきやうもなくてゐたるなりといへば。まりあつかひ奉
るべき人にやおはしますらんといへば。わざとさは思はねど。こゝにやどりたらん

人の物くはでるたらんを。みずぐさんもうたてあるべう。又おもひはなつべきやうもなき人にてある也といへば。さていとやすき事なり。けふしもかしこくまいり候にけり。さらばまかりてさるべきさまにてまいらんとてたちていぬ。いとをしかりつる事を。おもひがけぬ人のきてたのもしげにいひていぬるは。とかくたゞ観音のみちびかせ給なめりと思て。いと手すりて念じ奉るほどに。則物どももたせてきたりければ。くひ物どもなどおほかり。馬の草までこしらへもちてきたり。いふかざりなくうれしとおぼゆ。この人々もてきやうようし物くはせ酒のませはて入きたれば。こはいかに我ちやのいきかへりおはしたるなめり。とにかくにあさましくてすべきかたなくいとをしかりつる恥を。かくし給へることいひて悦なきければ。女もうちなきていふやう。年比もいかてかおはしますらんと思給へながら。世中すぐしざぶらふ人は心とたがふやうにてすぎ候つるを。けふかゝるありにまいりあひて。いかてかをろかにはおもひまいらせん。わかさへこえ給ひにけん人は。いつか歸りつき給はんど。御とも人はいくらはかり候とといへば。いさまことにやあらんあすの夕さりこゝにくべかななる。ともにはこのある物どもぐして。七八十人ばかりぞありしといへば。さてはその御まうけこそつかまつるべかなれといへば。これだにおもひがけずうれしきに。さまではいかにあらんといふ。いかなることなりと

も今よりはいかでかつかまつらであらんずるとて。たのもしくいひをきていぬ。この人々のゆふさりつとめてのくひ物まできたしをきたり。おぼえなくあさましきまゝには。たゞ観音を念じ奉るほどに。その日もくれぬ。又の日になりて。このあるものどもけふは殿おはしまさんずらんかしとまぢたるに。さるの時ばかりにぞつきたる。つきたるやをそきと此女。物どもおほくもたせてきて申のまれば物たのもし。この男いつしか入きておぼつかなかりつる事などいひふしたり。曉はやがてぐして行べきよしなどいふ。いかなるべき事にかなどおもへども。佛のたゞまかせられてあれと。夢にみえさせ給しをたのみて。ともかくもいふに志たがひてあり。この女曉たゞんまうけなども志にやりて。いろぎくるめくがいともしければ。なにがなとらせんとおもへどもとらすべき物なし。をのづから入事もやあるとて。くれなるなるすいしのはかまぞ一あるを。これをとらせてんとおもひて。われはおとこのぬぎたるすいしのはかまをきて。この女をよびよせて。とし比はさる人あらんとだにまらざりつるに。おもひもかけぬありしもきあひて。恥がましかりぬべかりつることをかかきつる事の。この世ならずうれしきも。なににつけてか志らせんとおもへば。こゝろざしばかりにこれをととらすれば。あな心うや。あやまりて人のみ奉らせ給に。御さまなども心うく侍れば奉らんとこそおもひ給ふるに。こはなにしにか

給はらんとてとらぬを。このとし比もさそふ水あらばとおもひわたりつるに。思も
かけずぐしていなんとこの人のいへば。あすはまらねどもまたがひなんずれば。か
たみともま給へとてなをとらすれば。御こころざしのほどはかへすくもをろかに
は思給まじけれども。かたみなどおほせらるゝがかたじけなければとてとりなんと
するをも。ほどなきところなればこのおとこきふしたり。鳥なきぬればいそぎた
ちて此女の志をきたる物くひなどして。馬にくらをき引いだしてのせんとするほ
どに。人のいのちまらねばまたちがみ奉らぬやうもぞあるとて。旅装束ながら手
おらひてうしろの堂にまいりて観音をおがみたてまつらんとてみ奉るに。観音の御
かたにおかき物かゝりたり。あやしと思ひてみれば。この女にとらせし袴なりけり。
こはいかに。この女と思ひつるは。さはこの観音のせさせ給なりけりと思ふに。涙の
雨まづくふりて。志のぶとすれどふしまろびなくけしきを。男きつつけてあやし
とおもひてはしりきて。なに事ぞと思ふになくさまおほろげならず。いかなること
のあるぞとてみまはずに。観音の御肩に赤き袴かゝりたり。是をみるにいかなる事
にかあらんとてありさまをとへば。この女のおもひもかけずきてまつるありさまを
こまかにかたりて。それにとらすと思つるはかまの。此観音の御かたにかゝりたる
ぞと。いひもやらすこゑをたてなれば。をのこも空ねしてきしに。女にとらせつ

るはかまにこそあんなれとおもふがかなしくておなじやうになく。郎等共も物の心
まりたるは手をすりなきけり。かくてたておさめ奉て美濃へこえにけり。そのうち
おもひかはしてまたよこめする事なくてすみければ。子どもうみつゝけなど志て。
このつるがにもつねにきかよひて観音に返々つかうまつりけり。ありし女はさる物
やあるとて。ちかくとをくたづねさせけれどもさらさらなる女なかりけり。それより
のちまたをとづるゝ事もなかりければ。ひとへにこの観音のせさせ給へるなりけ
り。この男女たがひに七八十になるまでさかへて。をのこゝ女ごうみなどして。死の
わかれにぞわかれにける。

くうすけが佛供養の事。

くうすけといひて兵だつる法師ありき。またしかりし僧のもとにぞありし。その法
師の佛をつくり供養し奉らばやといひわたりければ。うちきく人佛師にもとらせ
てつくりたてまつらんずるにこそとおもひて。佛しを家によびたれば。三尺の佛造
奉らんとするなり。たてまつらんずる物どもはこれなりとて。とりいでみせけれ
ば。佛しよきこととおもひて。とりていなんとするにいふやう。佛師に物たてまつり
てをそく造たてまつれば。我身もはらだまきおもふともいて。せめいはれ給佛
師もむづかしうなれば。功德つくるもかひなくおほゆるに。このものどもはいとよ

き物どもなり。ふうつけてこゝにをき給て。やがて佛をもこゝにてつくり給へ。つくりいだし奉り給へらん日。みなながらとりておはすべきなりといひければ。佛師うるさき事かなとは思けれど。物おほくとらせたりければ。いふまゝに佛つくり奉るほどに。佛師のもとにてつくりたてまつらましかば。そこにてこそは物はまいらましか。こゝにいましてものかはんとやはの給はまじとて。物もくはせざりければ。さる事なりとてわが家にてものうちくひては。つとめてきて一日作たてまつりて。よさりはかへりつゝ日比へてつくりたてまつりて。このえんずる物をつのりて人に物を借てうるしぬらせ奉り。薄かひなどまてえもいはずつくり奉らんとす。かく人に物を借よりは染のあたひのほどはまづえて。薄もきせうるまぬりにもとらせんといひけれども。などかくの給ぞ。はじめみな申したゝめたることにはあらずや。物はむれちかにかえたるこそよけれ。細々にえんとの給わるき事なりといひてとらせねば。人に物をば借たりけり。かくて造はてたてまつりて。ほとけの御眼など入たてまつりて。物をてかへらんとといひければ。いかにせましと思まはして。小女子どもの二人有けるをばけふだにこの佛師に物してまいらせん。なにもとりてことていだしやりつ。我も又物とりてこんずるやうにて。太刀ひきはきていでにけり。たゞ妻ひとり佛師にむかはせてをきたりけり。ぶつしほとけの御眼入はてゝ。おとこの借かへりき

たらば物とく食て。封付てをきたりし物どもみて家にもて行て。その物はかのことにつかはん。かのものはそのことにつかはんとまたくしおもひける程に。法しこそこそとまて入くるまゝに。目をいからかして人の妻まく物あり。やうくをうくといひて。太刀をぬきて佛師をきらんとてはしりかゝりければ。佛師かしらうちわられぬと思て。たちはしりにげゝるを。追つきてきりはづしくつゝ追にがしていふやうは。ねたきやつをにがしつる。まや頭うちわらんとまつる物を。佛師はかならず人の妻やまきける。をのれの中にあはざらんやはとて。ねめかけてかへりにければ。佛師にげのきていきつきたちておもふやう。かしこく頭をうちわられず成ぬる。のちに逢ざらんやはとねめずばこそ。はらのたつほどかくまつるかとも思はめ。みえわはゞ又頭わらんともこそいへ。千萬の物命にます物なしと思て。物のぐをだにとらずふかくかくれにけり。薄染のれうに物かりたりし人。つかひをつけてせめければ。佛師とかくして返しけり。かくてくらすけかしこきほとけを造奉りたる。いかで供養し奉らんなどいひてければ。この事を聞たる人々、わらふもあり。にくむも有けるに。よき日とりて佛供養し奉らんとて。主にもこひ。しりたる人にも物こひとりて。講師の前。人にあつらへさせなどまて。その日になりて講師よひければ來にけり。おりに入にこの法しいてむかひて。出るをはきてゐたり。こはいかにし給ことぞ

ぶ、古本作び

まへ、或當作膳

といへば。いかてかく仕らではさぶらはんとて。名簿を書てとらせたりければ。講師はちもひがけぬことなりといへば。けふよりのちは仕まつらんとすればまいらせ候なりとて。よき馬を引出して。こと物は候はねばこの馬を御布施には奉り候はんずるなりといふ。又にぶ色なるきぬのいとよきをつゝみてとりいだして。これは女の奉る御ふせなりとて見すれば。講師をみまけてよしと思たり。まへの物まうけてすへたり。講師くはんとするにいふやう。まづほとけを供養してのち物をめすべきなりといひければ。さることなりとて高座にのぼりぬ。ふせよきものどもなりとて。講師心に入てまければ。きく人もたうとがり。この法師もはらくとなきけり。講はて、かねうちて高座よりちりて物くはんとするに。法師よりきていふやう。手をすりていみじく候つる物かな。けふよりはながくたのみまいらせんずるなり。つかまつり人となりたれば。御さがりに候人は御さがりたべ候なんとて。はしをだにたてさせずしてとりてもちていぬ。これをだにあやしとおもふほどに。馬を引いだしてこの馬はしのりに給はり候はんとて。引返していぬ。きぬをとりてくれば。さり共是はえさせんずらんと思ふほどに。冬ふづに給はり候はんとてとりて。さらばかへらせ給へといひければ。夢にとびしたる覽心ちしていていけり。こと所によふありけれど。これはよき馬などふせにとらせんとすかねてきければ。人のよぶとこ

候、一イ本元

ろにはいかずしてこゝに來けるとぞきし。かゝりともすこしの功德はえてんや。いかゝあるべからん。

つねまさが郎等佛くやうの事。

むかし。ひやうどうたいふつねまさといふものありき。それはちくせんの國やまがの庄といひし所にすみし。またそこにあからさまにゐたる人ありけり。つねまさが郎等にまさゆきとてありしをこの。佛つくり奉りて供養し奉らんとすととき、わたりて。つねまさがるたるかたにもくひさけのみのゝるを。こはなにごとするぞといはすれば。まさ行といふもの、佛供養し奉らんとてまうのものにかうつかまつりたるを。かたへの郎等どものたへのゝしるなり。けふ百膳ばかりぞつかまつる。あすその御まへの御れうにはつねまさがやがてぐしてまいるべくさぶらふなるといへば。佛供養し奉る人はかならずかくやはする。あの中のものは佛くやうしたてまつらんとて。かねて四五日よりかゝるとどもをまたてまつる也。昨日一昨日はものがわたくしに里隣私のものどもよびあつめてさぶらひつるといへば。おかしかりつることかなといひて。あすをまつべきなめりといひてやみぬ。あけぬればいつしかとまぢるたるほどに。つねまさがいできにたり。さなめりとおもふほどに。いづらこれまいらせよといふ。さればよと思ふにさる事はなけれど。たかく大きにもりたる物

どももてきつゝすゆめり。さぶらひのれうとてあしくもあらぬ禊一二せんばかりすへつ。雑色女どものれうにいたるまで。かずおほくもてきたり。講師の御心みとてこだいなるものすへたり。講師にはこのたびなる人のぐしたる僧をせんとしけるなりけり。かくて物くひ酒のみなどするほどに。この講師に請せられんずる僧のいふやうは。あすの講師とはうけ給れどもその佛をくやうせんずるぞとこそえうけたまはらね。なに佛をくやうしたてまつるにかあらん。ほとけはあまたおはしますなり。うけ給て説經をもせばやといへば。つねまさ聞てさることなりとて。まさ行や候といへば。このほとけくやうし奉らんとするをのこなるべし。たけたかくおせくみたるもの。あかひげにてとし五十ばかりなる。太刀はきもぬきはきていてきたり。こなたへまいれといへば。庭中にまいりてゐたるに。つねまさかのまうどはなにほとけをくやうし奉らんずるぞといへば。いかでかまりたてまつらんずるといふ。こはいかにたがふるべきぞ。もしこと人のくやうしたてまつるを。たゞ供養の事のかぎりをするかとへば。さも候はず。まさゆきまろがくやうし奉るなりといふ。さてはいかてかなに佛とはまりたてまつらぬぞといへば。佛師こそはまりて候らめといふ。あやしげれどげにさもあるらむ。この男佛の御名をわすれたるならんとおもひて。その佛師はいづくにかあるとへば。ふいめいぢにさぶらふといへば。さては近か

しよ、古本作さ

んなりよべといへば。この男かへり入てよびてきたり。ひらづらなる法しのふとりたるが。六十ばかりなるにてあり。物に心えたるらんかしとみえたり。いできてまさゆきにならびてゐたるに。此僧は佛師かといへば。さて候といふ。まさゆきが佛やつくりたるとへば。つくり奉りたりといふ。いくかしら造たてまつりたるぞといへば。五頭つくりたてまつれりといふ。さてそれはなに佛を作り奉りたるぞといへば。えまり候はずとこたふ。こはいかに。まさゆきまらずといふ。佛師まらずばたがまらんぞといへば。佛師はいかてかまり候はん。佛しのまるとは候はずといへば。さてたがふるべきぞといへば。講師の御房こそまらせ給はめといふ。こはいかにとてあつまりてわらひのまれば。佛師ははらだちて。物のやうだいもまらせ給はざりけりとてたちぬ。こはいかなる事ぞとてたづねれば。はやうたゞ佛つくり奉れといへば。たゞまろがまらにて齋の神の冠もなきやうなる物を五かしらきざみたて。供養し奉らん講師志て。その佛かのほとけと名をつけたてまつるなりけり。それをとひきしておかしかりし中にも。おなじ功德にもなればときし。あやしものどもこそ。かく希有の事どもをし侍ける也。

歌よみて被免罪事。

いまはむかし。大隅守なる人國の政を志たしめおこなひ給あひだ。郡司の志どけな

かりければ。召にやりていま志めんといひて。先々の様に志どけなきことありけるには。罪にまかせてをもく軽くいましむる事有ければ。一度にあらざ度々志どけなきことあれば。をもくいましめんとてめすなりけり。こゝにめしてゐてまいりたりと人の申ければ。さきくするやうに志ふせて。まりがしらのほりゐたる人。志もとをまうけて打べき人まうけて。さきに人ふたりひきはりて出きたるをみれば。頭は黒髪もまじらずいとまろく年老たり。みるに打せんこといとおしくおぼえければ。なにごとにつけてかこれをゆるさんとおもふに。事つくべきことなし。あやまちどもをかたはしよりとふに。たゞ老をかうけにいらへある。いかにしてこれをゆるさんと。をのれはいみじき盗人かな。哥はよみてんやといへば。はかくしからず候どもよみ候なんと申ければ。さらばつかまつれといはれて。ほどもなくわななき聲にてうちいす。

(拾遺集)

としをへてかしらの雪はつもれども志もとみるにぞ身はひえにける。

といひければ。いみじうおはれがりて。感じてゆるしけり。人はいかにもなさけはあるべし。

大安寺別當女に嫁する男夢見事。

今はむかし。奈良の大安寺の別當なりける僧の女のもとに。藏人なりける人の志のひてかよふほどに。せめて思はしかりければ。ときくは盡もとまりけり。あるときひるねしたりける夢に。俄にこの家のうち上下の人どよみてなきあひけるを。いかなることやらんと。あやしければ立出てみれば。まうとの僧妻の尼公よりはじめて。ありとある人みな大なる土器をさへげてなきけり。いかなればこのかはらけをさへげてなくやらんとおもひてよくくみれば。あかいねのゆを土器ごとにもれり。打りて鬼の飲せんにだにもむべくもなき湯を。心となくくむなりけり。からく志てのみはてつれば。またこひそへてのむものもあり。下らうにいたるまでものまぬものなし。我かたはらにふしたる君を女房きてよぶ。あきていぬるをおぼつかなさにまたみれば。この女も大なる銀の土器に銅のゆを一土器いれて女房とらすれば。この女とりてほろくらうたげなることをさしあげてなくくむ。目はなよりけぶりくゆりいづ。あさましとみてたてるほどに。又まら人にまいらせよといひて。かはらけをだいにすへて女房もてきたり。我もかゝるものをのまんずるかとおもふに。あさましくてまどふとおもふほどに夢さめぬ。おどろきてみれば女房くひ物をもてきたり。しうとのかたにも物くふをとしてのゝまる。寺の物をくふにこそあるらめ。それがかくはみゆるなりとゆゑ。さく心うくおぼえてむすめの思はしさもうせぬ。さて心ちあしきよしをいひて物もくはずしていでぬ。そのうちはつるに

まどふ以下十
字一本元

かしこへゆかずなりにけり。

博打聲入の事。

昔。ばくちの子の年わかきが目はな一所にとりよせたるやうにて世の人にもにぬわりけり。ふたりのおやこれいかにきて世にあらせんずると思てありける所に。長者の家にかしづく女のありけるに。かほよからん聲とらんと母のもめけるをつたへきして。あめのまたのかほよしといふ聲にならんと給といひければ。長者よろこびて。むこにとらんとて日をとりて契てけり。ろのよになりて装束など人にかりて。月はあかりけれどかほみえぬやうにもてなして。ばくちどもあつまりてありければ。人々しくおぼえて心にくくおもふ。さてよるくいくに盡ぬるべきほどになりぬ。いかせんと思めぐらして。ばくち一人長者の家の天井にのぼりて。ふたりねたるうへの天井をひしくとふみならして。いかめしくおそろしげなることにて。あめのまたのかほよしとよぶ。家のうちのものどもいかなる事ぞときまどふ。聲いみじくおきて。をのれをころ世の人天のまたのかほよしといふときけ。いかなる事ならんといふに。三度までよべばいらつ。これはいかにいらつるぞといへば。心にもあらでいらつるなりといふ。鬼のいふやう。この家のむすめはわが領して三年になりぬるを。汝いかにおもひてかくはかよふぞといふ。さる御事ともまらて

かよひ候つるなり。たゞ御たすけ候へといへば。鬼いとくきことなり。一ことしてかへらん。汝命とかたちといづれかおしきといふ。聲いかにいらふべきといふに。まうとまうとめなにもその御かたちぞ。いのちだにおはせばたゞかたちをとの給へといへば。をしへのとくいふに。鬼さらばすくといふときに。聲顔をかへてあらあらといひてふしまるぶ。鬼はあよびかへりぬ。さてかほはいかになりたるらんとて指燭をさして人々みれば。目はなひとつ所にとりすへたるやう。聲はなきて。たゞ命とこそ申べかりけれ。かゝるかたちにて世中にありてはなにかせん。かからざりつるさきにかほを一たびみえ奉らで。大かたはかくおそろしき物にりやうせられたりける所にまいりけるあやまちなりとかこちければ。まうといとおしう思て。このかはりには我もちたる寶を奉らんといひて。めでたくかしづきければ。うれしくてぞありける。所のあしきかとして。べちによき家をつくりてすませければ。いみじくてぞありける。

宇治拾遺物語卷第十

伴大納言應天門をやく事。

今はむかし。水の尾の御門(無)の御ときに應天門やけぬ。人のつけたるになんありける。それを伴善男といふ大納言。これは信の大臣の志わざなりと大やけに申ければ。そのおとゝをつみせんとせさせ給ふけるに。忠仁公(無)世の政は御おとうとの西三條の右大臣(無)にゆづりて白川にこもり給へる時にて。この事をきゝあどろき給て。御烏帽子直垂ながら移の馬にのり給て。のりながら北の陣までおはして。御前にまいり給て。この事申人の譏言にも侍らん。大事になさせ給こといとことやうの事なり。かゝることは返々よくたゞしてまこと空ごとあらはしておこなはせ給べきなりとそうし給ければ。まことにもとおぼしめしてたゞさせ給に。一定もなき事なれば。ゆるし給よし仰よとある宣旨うけ給てぞおとゝはかへり給ける。左のおとゝはつゆ犯したる事もなきにかゝるよこざまの罪にあたるをおぼしなげきて。日の装束して庭にあらざるをまきていでて。天道にうたへ申給けるに。ゆるし給ふ御使に頭中將馬にのりながらはせまうでければ。いそぎ罪せらるゝ使ぞと心えて。ひと家なきのゝしるに。ゆるし給よしおほせかけてかへりぬれば。又よろこびなきおひたしかりけり。ゆるされ給にけれど。大やけにつかうまつりては。よこざまの罪いできぬ

つゆ犯し、原作すくし、今從イ本

べかりけりといひて。ことにもとのやうに宮づかへもし給はざりけり。この事は過にし焔の比右兵衛の舍人なるもの。東の七條に住けるが。つかさにまいりて夜深て家に歸とて。應天門のまへをとをりけるに。人のけはひしてさいめく。廊の腋にかくれたちてみれば。柱よりかゝぐりあるゝものあり。あやしくてみれば。伴大納言なり。次に子なる人ある。また次に雑色とよ清といふものある。なにわざしてあるゝにかあらんとつゆ心もえでみるに。この三人おりはつるまゝにはしることかざりなし。南の朱雀門さまに走ていぬれば。この舍人も家さまにゆくほどに。二條堀川のほど行に大内のかたに火ありとて大路のゝまゐる。みかへりてみれば内裏の方とみゆ。走かへりたれば應天門のなからばかりもえたるなりけり。このありつる人どもは。この火つくとてのぼりたりけるなりと心えてあれども。人のきはめたる大事なれば。あへて口よりほかにいささず。そのゝち左のおとゝの志給へることとて罪かうぶり給べしといひのゝしる。あはれしたる人のある物をいみじきことかなとおもへど。いひいだすべきことならねばいとおしと思ひありくに。おとゝゆるされぬときけば。つみなきことはつるにのがるゝものなりけりとなんおもひける。かくて九月ばかりになりぬ。かゝるほどに。伴大納言の出納の家のおさなき子と。舍人が小童といさかひをして。出納のゝまればいへとりさへむとするに。この出納おなじくい

舍人、イ本此上有との二字

お、イ本作が

で、みるに。よりてひきはなちてわが子をば家に入て。この舍人が子の髪を取てう
ちふせてまぬばかりふむ。舍人おもふやう。わが子も人の子もともに童部いさかひ
なり。たゞさてはあらで。我子をしもかくなさけなくふむはいとあしき事なりとは
らたふまうて。まうとはいかでなさけなくおさなきものをかくはするぞといへば。
出納いふやう。おれは何事いふぞ。とねりだつるおればかりのおほやけ人をわがう
ちたらんに。なにごとのあるべきぞ。わが君大納言殿のおはしませばいみじきあや
まちをまたりとも。なにごとのでいくべきぞ。志れ事いふかたのいかなといふに。舍
人おほきにはら立て。おれはなにごといふぞ。わがまうの大納言をかうけにおもふ
か。をのがまうは我口によりて人にてもおほするはまらぬか。わが口あけてはをの
がまうは人にてはありなんやといひければ。出納ははらだちさして家にはい入にけ
り。このいさかひをみると。里となりの人市をなしてきくければ。いかにいふこと
にかあらんと思て。あるは妻子にかたり。あるはつぎぐかたりちらまていひさは
ぎければ。世にひろごりておほやけまできこしめして。舍人をめしてとはれければ。
はじめはあらがひけれども。われも罪かうぶりぬべくといひければ。ありのくだけり
のことを申てけり。そのうち大納言もとはれなぞして。ことあらはれての後なん流
されける。應天門を焼てまことの大臣におほせて。かのおとををつみせさせて。一の

此條、宜參考東
齊隨筆音樂部
幸、原作違、據一
イ本改

候、一本此下有
を字

東齊隨筆音樂部
云、般若丸と名
を付て持たりけ
り云々
傳、原作侍、據一
本改

大納言なれば大臣にならんとかまへけること。かへりてわが身つみせられけん。
いかにくやしかりけん。

放應樂明暹に是季がならふ事。

これも今はむかし。放應樂といふ樂を明暹已講た一人ならひつたへたりけり。白
河院野行幸あさてといひけるに。山階寺の三面の僧坊にありけるが。こよひは門な
さしそ。たづぬる人あらんものかといひてまぢけるが。案のごとく入きたる人あり。
これをとふに是季なりといふ。放應樂ならひにかといひければ。まかなりとことなふ。
すなはち坊中にいれて件の樂をつたへけり。

堀川院明暹に笛ふかさ給事。

これもいまはむかし。堀川院の御とき奈良の僧どもをめして。大般若の御讀經おこ
なはれけるに。明暹この中にまいる。其時に主上御笛をおそばしけるが。やうく
調子をかへてふかせ給ひけるに。明暹調しごとこゑたがへずあげられけり。主上お
やしみ給てこの僧をめしければ。明暹ひさまづきて庭に候。おほせによりてのぼり
てすの子に候に。笛やふくと、はせおはしましければ。かたのごとくつかまつり候
と申ければ。さればこそとて御ふえたびてふかせられけるに。萬歳樂をえもいはず
ふきければ。御感ありてやがてその笛をたびてけり。件の笛傳りていま八幡別當幸

清がもとにありとか。件當幸清進上當
今、建保三年也。

淨藏が八坂坊に強盗入事。

これも今はむかし。天曆のころほひ淨藏が八坂の坊に強盗その數入みだれたり。まかるに火をともし太刀をぬきめをみはりて。をのくたちすくみてさらにする事となし。かくて數刻をふ。夜やうくあけんとする時。爰に淨藏本尊に啓白まて。はやくゆるしつかはすべしと申けり。そのときに盗人どもいたづらにてにげかへりけるとか。

はりまの守さだゆふが事。

今はむかし。播磨守きんゆきが子にさだゆふとて五條わたりにありしものは。この比あるあきむねといふものゝ父なり。そのさだゆふは阿波守さとなりがともに阿波へくだりけるに道にて死けり。そのさだゆふは河内前司といひし人のるいにてぞ有ける。その河内前司がもとにわめまだらなる牛ありけり。その牛を人の借て車かけて淀へやりけるに。ひづめの橋にて牛飼あしくやりて。片輪をはしよりおとしたりけるに。ひかれて車のはしよりまたにおちけるを。くるまのおつると心えて。うしのふみひろごりてたてりければ。むながひきされてくるまはおちてくだけけり。うしは一橋のうへにとまりてぞありける。人もらぬ車なりければ。そこなはるゝ人

もなかりけり。ふせ牛ならましければひかれておちて牛もそこなはれまし。いみじき牛の力かなとてそのへんの人いひほめける。かくてこのうしをいたはりかふほどに。この牛いかにしてうせたるといふことなくてうせにけり。こはいかなる事ぞともめさはげどなし。はなれていてたるかとてちかくより遠くまで尋もとめさすれどもなければ。いみじかりつるうしをうしなひつるとなげくほどに。河内前司が夢にみるやう。このさだゆふがきたりければ。これは海におち入て死けるときく人は。いかにきたるにかとおもひくいであひたりければ。さだゆふがいふやう。われはこのうしとらのすみにあり。それより日に一どひづめのはしのもとにまかりて苦をうけ侍るなり。それにをのれが罪のふかくて身のきはめておもく侍れば。乗物のたへずしてかちよりまかるがくるしきに。このあめまだらの御車牛のちからのつよくてのりて侍に。いみじくもとめさせ給へば。いま五日ありて六日と申さん巳の時ばかりには返し奉らん。いたくなもとめ給ひろとみてさめにけり。かゝる夢をこそみつれといひて過ぬ。その夢みつるより六日といふ巳の時ばかりに。さゝるにこの牛あゆみ入たりけるが。いみじく大事きたりげにて。くるしげに舌たれあせ水にてぞ入たりける。此ひづめのはしにて車おち入。牛はとまりたりけるありなんどに行あひて。ちからつよき牛かなとみて。かりてのりてありきけるにやありけんとおもひ

けるもおそろしかりけると。河内前司かたりし也。

吾婦人止生贖事。

いまはむかし。山陽道美作國に中さんかうやと申神おはします。かうやはくちなは。中ざむは猿丸にてなんおはする。ろの神年ごとの祭にかならずいけにを奉る。人のむすめのかたちよくかみななく。色まろく身なりおかしげにすがたらうたげなるをぞえらびもとめて奉りける。むかしよりいまにいたるまでそのまつりあこたけ侍らず。それにある人の女いげにふにさしあてられにけり。あやどもなきかなしむことかぎりなし。人のおや子となることはさきの世のちぎりなりければ。あやしきをだにをろかにやは思ふ。ましてよろづにめでたければ。身にもまさりてをろかならず思へども。さりとてのがるべからねばなげきながら月日を過すほどに。やうく命つゝまるを。おや子と逢みんこといまいくばくならずとおもふにつけて。日をかぞへて明暮はたねをのみなく。かゝるほどにあづまの人の狩といふことをのみやくとして。猪のまゝといふものはらだちまかりたるはいとおろろしきものなり。それをだになにも思たらず。心にまかせてころしとりくふことをやくとするもの。いみじう身のちからつよく心たけくむくつけきあら武者の。をのづからいできてそのわたりにたちめぐる程に。この女の父母のもとにきにけり。物がたりするつる

中さんかうや、
延喜式神名帳美
作國香東郡有高
野神社中山神社

でに女の父のいふやう。をのれがむすめのためひとり侍をなん。かうくのいけに系にさしあてられ侍れば。思くらしなげきあかしてなん月日を過し侍る。世にはかかることも侍けり。さきの世にいかなるつみをつくりてこの國にむまれてかゝるめをみ侍るらん。かの女ども心にもあらずあさましき死をし侍りなんずるかなと申。いとあはれにかなまう侍るなり。さるはをのれが女とも申さじいみじうつくしげに侍なりといへば。あづまの人さてその人はいまは死たまひなんずる人にこそはあはすれ。人は命にまさることなし。身のためにこそ神もおそろしけれ。このたびのいけにをみださずして。その女君をみづからにあづけたぶべし。死給はんもおなじこととこそおはすれ。いかでかたゝひとりもちたてまつり給へらん御女を。めのまへにいきながらなますにつくりきりひろげさせてはみ給はん。ゆゑしかるべき事なり。さるめみ給はんもおなじことなり。只ろの君を我にあづけ給へとねんごろにいひければ。げにまのまへにゆゑしきさまにてまなんをみんよりはとてとらせつ。かくてあづま人の女のもとに行てみれば。かたちすがたおかしげなり。あひぎやうめてたし。物思たるすがたにてよりふして手ならひをするに。なみだの袖のうへにかゝりてぬれたり。かゝるほどに人のけはひのすれば。髪をかほにふりかゝるをみれば。髪もぬれかほもなみだにあらはれて思いりたるさまなるに。人のきたれば。い

とつゝましげに思たるけはひして。すこしそばむきたる姿まことにらうたげなり。凡けだかくまなく、まうおかしげなること。あ中人の子といふべからず。あづま
 人これを見るに。かなしきこといはんかたなし。さればいかにも、我身なくな
 ばなれ。たゞこれにかはりなんと思て。此女の父母にいふやう。思かまふることこそ
 侍れ。もしこの君の御事によりてほろびなど志給はくるとやあほさるべきこと
 へば。このためにみづからいたづらにもならばなれ更にくるしからず。いきてもな
 にかはし侍らんずる。たゞおぼされんまゝにいかにも、志給へといらふれば。
 さらばこの御祭の御きよめするなりとて。四目引めぐらしていかにも、人なよせ
 給そ。またこれにみづから侍とな人にゆめ、まらせ給そといふ。さて日比こもり
 るて此女房とおもひすむこといみじ。かゝるほどにとしごろ山につかひならはした
 る犬のいみじきなかに。かしこきをふたつえりて。それにいきたる猿丸をとらへて
 明くれやく、「く」と食ころさせてならはす。さらぬだに猿丸と犬とはかたきなる
 に。いとかうのみならはせば。猿を見てはあどりかゝりてくひころすことかざりな
 し。さて明くればいらなき太刀をみぎ刀をとぎ劔をまうけつ。たゞこのめの君
 ととぐさにするやう。あはれさきの世にかななる契をして御命にかはりていたづら
 になり侍なんとすらん。されど御かはりと思へばいのちはさらにおしからず。たゞ

、當行

釋、原作押、據今
昔物語改、一本
作幣

まぬる、イ本一
イ本此下、有君の
二字

別きこえなんずとおもひ給ふるが。いと心ぼそくあはれなるなどいへば。女もまこ
 とにいかなる人のかくおはして思ものし給にかといひつゞけられて。かなしうあは
 れなることいみじ。さて過行ほどにその祭の日になりて。宮づかさよりはじめよろ
 づの人々こぞりあつまりて。迎にのゝまりきて。あたらしき長びつをこの女のゐた
 る所にさし入ていふやう。例のやうにこれに入てその生贄いだされよといへば。こ
 のあづま人たゞこのたびのとはみづからの申さんまゝに志給へとて。此ひつにみそ
 かに入ふして。左右のそばにこの犬どもをとりいれていふやう。をのれらこの日比
 いたはりかひつるかひありて。此たびのわが命にかはれをのれらよといひてかきな
 づれば。うちうめきてわきにかひそひてみなふしぬ。また日比とぎみがきつる太刀
 刀みなとりいれつ。さてひつのふたをおほひて。布きてゆひて封つけて。わがむすめ
 をいれたるやうにおもはせてさし出したれば。梓榊鈴鏡をふりあはせて。さきをひ
 のゝまりてもてまいるさまいといみじ。さて女これの聞にわれにかはりてこの男の
 かくまていぬることいとあはれなれとおもふに。又無爲にこといでこばわがやだ
 ちいかにあはせんとかたぐになげきるたり。されども父母のいふやうは。身のた
 めにこそ神も佛もおそろしけれ。まぬる・事なれば今はおそろしきともなし。おなじ
 とをかくてをなくなりなん。いまはほろびんもくるしからずといひるたり。かくて

いけに系を御社にもてまいり。神主の（原）といみじく申て。神のおまへの戸をあけてこの長櫃をさし入て。戸をもとのやうにさして。それより外のかたに宮づかさをはじめて次々の司ども次第にみなならびるたり。さるほどにこのひつを刀のさきしてみそかにあなをあけて。あづま人みければ。まことにえもいはず大なる猿のたけ七八尺ばかりなる。かほと志りとはあかくして。むしりわたをきたるやうにいらなく志ろきが。毛はおひわがりたるさまにてよこ座にあり。つぎの猿ども左右に二百ばかりなみりて。さまににかほをあかくなしまゆをあげこゑになきさけびのしる。いと大なるまないたにながやかなる包丁刀を具してをきたり。めぐりにはす酒志ほ入たる瓶どもなめりとみゆるあまたをきたり。さて志ばしばかりあるほどに。このよこ座にるたるをけ猿よりきて。長櫃のゆひをよときてふたをあけんとすれば。次々（原）の猿どもみなよらんとするほどに。この男犬どもくらへをのれといへば。二の犬おどりいで。中に大なる猿をくひてうちふせて。ひきはりて食ころさんとするほどに。此おとこ髪をみだりて櫃よりおどりいで。氷のやうなる刀をぬきて。そのさるをまな板のうへにひきふせて。くびにかたなをあていふやう。わをのれが人のいのちをたちその志むらを食などする物はかくぞある。をのづからうけ給はれ。たしかに志やくび切て犬にかひてんといへば。かほをあかくなして口

の、據一本補

をのづから、イ本作おのれら、イ恐是

を志ばたくきて。はをま志ろにくひ出して。めより血のなみだをながして。まことにあさましきかほつきして。手をすりかなしめどもさらゆるさず志て。をのれがそこばくのおほくの年比。人の子共をくひ人のたねをたつかけりに。志やくびきりてすてんことたゞ今にこそあめれ。をのれが身さらば我をころせ。更にくるしからずといひながら。さすがにくびをばとみにきりやらす。さるほどにこの二の犬どもにあはれて。おほくのさるどもみな木のうへに逆のぼりまどひさはぎさけびのしるに。山もひらきて地もかへりぬべし。かゝるほどに一人の神主に神つきていふやう。けふより後さらにくこのいけに系をせじ。ながくといめてん。人をころす事（原）こりともこりぬ。いのちをたつこといまよりながく志侍らじ。また我をかく志つとてこの男とかくし。またけふのいけに系にあたりつる人のゆかりをれうじわづらはすべからず。あやまりてその人の子孫のすえにいたるまで我まもりとならん。たゞとくく此たびのわがいのちをこひうけよ。いとかなしわれをたすけよとの給へば。宮司神主よりはじめて。おほくの人どもおどろきをなして。みな社のうちに入たちてさはぎあはてし手をすりて。ことほりをのづからさぞ侍る。たゞ御神にゆるし給へ。御神もよくぞおほせらるゝといへども。このあづま人さなすかされそ。人のいのちをたちころすものなれば。きやつにものゝわびしさ志らせんと思ふなり。我

事こりともこりぬ、と字或當作に、イ本一イ本に、イ本一イ本思はぬ

に、イ本元、恐是すかされ、原作ゆるされ、據一イ本改

元、イ本一イ本

身こそあなれ。たゞころされんくるしからずといひてさらにゆるさず。かゝるほどにこの猿のくびはきりはなたれぬとみゆれば。宮づかさも手まどひしてまことにすべきかたなければ。いみじきちかともをもたて、祈申て。今よりのちはかゝること更にくすべからずなど神もいへば。さらばよし。いまより後はかゝるとなせそといひふくめてゆるしつ。さてそれよりのちはすべて人をいけに系にせずなりにけり。さてその男家に歸て。いみじう男女あひおもひて。年比の妻夫になりてすぐしりけり。男はもとよりゆへありける人のすゑなりければ。くちおしからぬさまにて侍りけり。その後ほかの國に猪鹿をなんいけに系にしはべりけるとぞ。

豊前王の事。

王、原作主、據古本改

今はむかし。柏原の御門(武)の御子の五の御子にてとよさきの大ぎみといふありけり。四位にて司は刑部卿大和守にてなんありける。世のことをよく志り心ばへすなをにて。大やけの御政をもよきわしきよく志りて。除目のあらんととも。先國のあまたあきたるのぞむ人あるをも。國のほどにおてつ。その人はその國の守にぞなざるらん。その人は道理たて望ともえならじなど。國とにいひるたりける事を人きゝて。除目の朝にこの大君のをしはかりごとにいふ事はつゆたがはねば。この大君のをしはかり除目かしこしといひて。ぢもくのさきにはこのおほ君の家にいきつどひ

されば以下廿八字、當衍

てなん。なりぬべしといふ人は手をすりてよろこび。えならじといふをきゝつる人はなにごとといひあるふる大君ぞ。さえの神まつりてくるふにこそあめれなどつぶやきてなんかへりける。かくなるべしといふ人のならで。ふりよにこと人なりたるをばあしくなされたりとなん世にはそしりける。「さればおほやけもとよさきの大君はいかゝ除目をばそしりける」さればおほやけもとよさきの大君はいひけるとなん。またしく候人には行てとへとなんおほせられける。これは田村(武)水のお(無)などの御時になんありけるにや。

藏人願死の事。

院、據イ本補

大、原作ち、據イ本改

今はむかし。圓融院の御とき内裏焼にければ。後院になんおはしましける。殿上の臺盤に人々あまたきて物くひけるに。藏人ただか大ばんにひたいをあてしねぶりいりて。いびきをするなめりとちもふに。やゝまばしになればあやしと思ふ程に。臺盤にひたいをあてしのをくつくとくつめくやうにならせば。小野宮大臣殿(武)いまだ頭中將にておはしけるが。主殿司に其式部丞のねごまこそ心えね。それちせとの給ひければ。とのもりづかさよりておこすに。すぐみたるやうにてうごかず。あやしさにかいさぐりて。はや死給にたり。いみじきわざかなといふをきゝて。ありとある殿上人藏人もおほえす物もそろしかりければ。やがてむきたるかたさま

い、原作く、據一本改、或當據下文作き

こ、原作う、據古本改

にみな走ちる。頭中將さりとてあるべき事ならず。これ諸司の下部めしてかきいてよとおこなひ給。いづかたの陣よりかいたすべきと申せば。東の陣より出すべきとの給をきいて。内の人あるかぎり東の陣にかいいゆくをみるとつどひあつまもみずなりぬ。陣の口かきいづるほどに。父の三位きてむかへとりてさりぬ。かしこく人々に見あはずなりぬる物かなとなん人々いひける。さて廿日ばかりありて頭中將の夢に。ありしやうにていみじうなきてよりて物をいふ。きけばいとうれしくをのれが死のはぢをかくさせ給たることは。世々にわすれ申まじ。はかりぢちて西よりいださせ給はざらましかば。おほくの人をこそはみえて死のはぢにて候はましかとて。なくなく手をすりてよろこぶとなん夢にみえたりける。

小槻當平の事。

今はむかし。主計頭小槻當平といふ人ありけり。その子に算博士なるものあり。名は茂介となんいひける。主計頭忠臣が父。淡路守大夫史奉親が祖父なり。いきたらばやんごとなくなりぬべきものなれば。いかでなくも成なん。これが出たちなば。主計頭主税頭助太夫史にはこと人はきしろうべきやうもなかんめり。なりいたはりたる盛なるうへに才かしこく心ばへもうるせかりければ。六位ながら世のおぼえやうく

か、原作を、據古本改

そ、一本元〇へき一本作へし一本作へき也

きこえたかくなりもてゆけば。なくともありなんとおもふ人もあるに。此人の家にさとしをまつりければ。そのとき陰陽師に物をとふに。いみじくをもくつしむべき日もかきいてとらせたりければ。そのまゝに門をつよくさして。ものいみして居たるに。敵のひとかくれて陰陽師に死ぬべきわざどもをせさせければ。そのまじわざする陰陽師のいはく。物思してゐたるはつしむべき口にころあらめ。その日のろひおはせばぞあるしあるべき。さればをのれをぐしてその家におはきてよびいで給へ。門は物思ならばよもあけ。たゞこゑをだにきいてばかならずのろふあるしありなんといひければ。陰陽師をぐして。ろれが家にいきて門をおびたゝまいたしければ。げすいてきて。たゞ此かどたゝくはといひければ。それがしがとみの事にてまいるなり。いみじきかたき物いみなりともほそめにあけていれ給へ。大切の事なりといはすれば。この下す男かへり入てかくなんといへば。いとわりなきことなり。世にある人の身思はぬやはある。えいれたてまつらじ。更にふようなりとく歸り給ねといはすれば。またいふやう。さらば門をばあけ給はずともそのやり戸から顔をさし出給へ。みづからきこえんといへば。死ぬべき宿世にやありけん。何事ぞとてやり戸からかほをさしうたりければ。陰陽師その聲をきかほをみて。すべきかぎりのろひつ。このあはんといふ人はいみじき大事いはんといひつれど

も。いふべきこともおぼえねば。たゞ今いなかへまかれれば。そのよし申さむとおもひてまうてきつるなり。はや入給ねといへば。大事にもあらざりけることにより。かく人をよび出て物もおぼえぬ主かなといひて入ぬ。それよりやがてかしらいたくなりて。三日といふにまにけり。されば物忌には聲たかくよその人にはあふまじきなり。かやうにまじわざする人のためには。それにつけてかゝるわざをすれば。いとあそろしき事なり。さてそののろひごとをせさせし人も。いくほどなくて歿にあひてまにけりとぞ。身におひけるにや。あさましき事なりとなん人のかたりし。

海賊發心出家の事。

いまはむかし。攝津國にいみじく老たる入道のおこなひうちまて有けるが。人の海賊にあひたりといふ物語するつるでにいふやう。われはわかかりしありは。まことにたのもしくてありし身なり。きる物食物にあきみちてあけくれ海にうかびて世をば過しなり。淡路の六郎ついでくしとなんいひし。それに安藝の島にてこと舟もことになかりしに。船一そうちかく漕よす。みれば廿五六ばかりの男のきよげなるぞ主とおぼしくてある。さてはわかき男二三人ばかりにてわづかにみゆ。さては女どものよきなどあるべかし。をのづからすだれの隙よりみれば。かはごなどあまたみゆ。物はよくつみたるにはかくしき人もなくて。たゞこの我舟につきてありく。屋

物、原作お、據一
本、本改
い、原作あ、據一
本、古本改

形のうへにわかき僧一人あて經よみてあり。くだればおなじやうにくだり。島へよればおなじ様による。とまれば又とまりなどすれば。この舟をえみも志らぬなりけり。あやしと思て問てんとおもひて。こはいかなる人のかく此舟にのみぐしてはおはするぞ。いづくにおはする人にかとへば。周防の國よりいそぐことありてまかる。さるべきたのもしき人もぐせねばおそろしくて。この御ふねをたのみてかくつき申たるなりといへば。いとあこがましとおもひて。これは京にまかるにもあらず。爰に人待なり。待つてすはうのかたへくだらんずるは。いかでぐしてとはあるぞ。京にのぼらん舟にぐしてこそおはせめといへば。さらばあすこそはさもいかにせめ。こよひは猶御舟にぐしてあらんとて。島がくれなる所にぐしてとまりぬ。人々もたゞ今こそよきときなめれ。いざこの舟うつしてんとて此舟にみななる時に。物もおほえずあきれまどひたり。物のあるかぎりわが舟に取れつ。人どもはみな男女みな海にとり入間に。主人手をこそぐとすりて。水精のザいの緒きれたらんやうなる涙をはらくとこぼしてはいはく。よろづの物はみなとり給へ。たゞ我命のかぎりはたすけ給へ。京に老たる親のかぎりわづらひていま一度みんと申たれば。よるをひるにてつけにつかはしたれば。いそぎまかりのぼるなりともえいひやうて。我に目をみわはせて手をするさまいみじ。これかくないはせそ。れいのごとくとく

といふに。目をみわはせてなきまどふさまいとみじ。あはれにも無事うにおぼえ
 しかども。さいひていかせんと思なしてうみに入つ。屋形の上に甘計にてひはつ
 なる僧の經袋くびにかけて。よるひる經よみつるを取て海にうち入つ。ときに手ま
 どひして經袋をとりて水のうへにうかびながら。手をさへげてこの經をさへげてう
 き出くする時に。けうの法師の今までまなぬとて。舟のかいしてかしらをはたと
 うち。せなかをつきいれなどすれど。うき出くしつゝ此經をさへぐ。あやしとおも
 ひてよくみれば。此僧の水にうかびたるあとまくらに。うつくしげなる童のびづら
 ゆひたるが。まろきずばへをもちたる二三人計みゆ。僧のかしらに手をかけ。一人は
 經をさへげたるかいなをとらへたりとみゆ。かたへのもどもにわれみよこの僧に
 かにみゆ。この童部そひてあへて海にまづむとなしうかびてあり。あやしければみ
 んとおもひてこれにとりつきてことと棹をさしやりたれば。とりつきたるを引よせ
 たれば。人々などかくはするぞ。よしなしわざするといへど。さはれ此僧ひとり
 いけんとして舟にのせつ。ちかくなればこのわらははみえず。此僧に問。我は京の人
 かいづこへおはするぞとへば。いなかの人の候。法師になりて久しく受戒をえ仕
 らねば。いかで京にのぼりて受戒せんと申しかば。いざわれにぐして山にまりたる

あまつさへ、原
 作あやまりて
 一本改、イ本
 作あまりに

人のあるに申つけてせさせんと候しかば。まかりのぼりつることいふ。わ僧の頭や
 かいなにとり付たりつる見どもはたぞ何ぞとへば。いつかさるもの候つる。さら
 におぼえずといへば。さて經さへげたりつるかいなにも童そひたりつるは。そもく
 何とおもひて。たゞいままなんとするにこの經袋をばさへげつるぞとへば。死な
 んずるはおもひまうけたればいのちはあしくもあらず。われはまぬとも經をまばし
 が程もぬらし奉らじとおもひてさへげ奉りしに。かいなたゆくもあらず。あまつさ
 へかろくてかいなもながくなるやうにてたかくさへげられさぶらひつれば。御經の
 悉るしとこそまぬべき心ちにもおぼえ候つれ。いのちいけさせ給はんはうれしき事
 とてなくに。この婆羅門の様なる心にもあはれにたうとくおぼえて。これより國へ
 歸らんとや思ふ。また京にのぼりて受戒とげんと心の心あらばをくらんといへば。さ
 らに受戒の心も今は候はず。たゞ歸さぶらひなんといへば。これより返しやりてん
 とす。さてもうつくしかりつる童部はなにかかくみえつるとかたれば。この僧哀
 にたうとくおぼえてほろくなかる。七つより法花經よみ奉りて。日比もことく
 なく物のおそろしきまゝにもよみたてまつりたれば。十羅せつのおはしましけるに
 こぞといふに。この婆羅門のやうなるものゝ心に。さは佛經はめてたくたうとくお
 はしますものなりけりと思て。この僧にぐして山寺などへいなんと思心つきぬ。さ

て此僧と二人具して。かてすこしをぐして残りの者どもは志らず。みなこの人々
に預けてゆけば。人々ものにくるふかこはいかに。俄の道心世にあらじ。物のつきた
るかとしてせいしとむれどもきかて。弓箠大刀かたなもみなすて。此僧に具して
これが師の山寺なる所にいきて法師になりて。そこにて經一部よみまいらせておこ
なひありくなり。かゝるつみをのみつくりしがむさうにおぼえて。此男の手をすり
てはらくとなきまどひしを。海に入しより少道心おこりにき。それにいと此僧
に十羅せつのもひておはしましけると思に。法花經のめてたくよみ奉らまほしくお
ぼえて。にはかにかくなりてあるなりとかたり侍りけり。

宇治拾遺物語卷第十一

あをつねの事。

今はむかし。村上の御時古き宮の御子にて。左京大夫なる人おはしけり。長すこしほ
うだかにて。いみじうあてやかなるすがたはまたれども。やうだいなどもおこなり
けり。かたくなはしき様ぞまたりける。頭のおぶみがしらなりければ。ふいはせな
かにもつかずはなれてぞふられける。色は。はなをぬりたるやうにあをじろにて。まが

色は、イ本此下有露草の三字

かたなく、原作
らくほく、據一
本改

て、イ本作かば

殿上人、イ本作
兼通の大臣の中
將

あらがひ、イ本
作たはぶれ、此
上有中將二字、
すまひ、イ本此
下有給ひ二字

ふかたなくはなのあざやかにたかくあかし。くちびるうすくいていろもなく。えめば
齒がちなるもの。齒肉あかくてひげもあかくてながりけり。こゑははなごゑに
てたかくて。物いへば一うちひきて聞える。あゆめば身をふりかたをふりてぞ
ありきける。色のさめてあをかりければ。あをつねの君とぞ殿上の君達はつけてわ
らひける。わかき人だちのたちにつけて。やすからずわらひのしりければ。みか
どきこしめしあまりて。このをのこどものこれをかくわらふびんなき事なり。ち
の御子聞て。せいせずとて我をうらみざらんやなどおぼせられて。まめやかにさい
なみ給へば。殿上人のくゝまたなきをして。みなわらふまじきよしいひあへりけり。
さていひあへるやう。かくさいなめば今よりながく起請す。もしかくきまやうして
のち。あをつねの君とよびたらんものをば。さけくだ物など取いださせてあがひせ
んといひかためて。起請して後いくばくもなくで。堀河殿の。殿上人にておはしける
が。あふなく立てゆくうしろ手をみてわすれて。あのをつねまるはいづちゆくぞ
との給てけり。殿上人どもかく起請をやぶりつるはいとびんなきことなりとて。い
ひさだめたるやうに。すみやかに酒くだ物とりにやりて。この事あがへとあつまり
てせめのしりければ。あらがひてせじとすまひ。けれど。まめやかにくせめけれ
ば。さらばあさてばかりあをつねの君あがひせん。殿上人藏人その日あつまり給へ

といひて出給ひぬ。その日になりて堀川中將殿のあをつれの君のあがひすべしとてまいらぬ人なし。殿上人のならびて待ほどに。堀河中將直衣すがたにて。かたちはひかるやうなる人の。香はえもいはずかうばしく。あいぎやうこぼれにこぼれてまいり給へり。直衣のながやかにめてたきすそより。青き打たるいだし袖して。さしぬきも青いろのさしぬきをきたり。隨身三人に青き狩衣はかまきせて。ひとりにはあをくいろどりたるおしきに。あをぢのさらにくはをもりてさしげたり。いま一人は竹の枝に山鳩を四五ばかりつけてもたせたり。又ひとりにはあをぢのかめに酒を入て。青きうすやうにてくちをつゝみたり。殿上の前にもちつゝきて出たれば。殿上人どもみてもろごゑにわらひどよむとおびたいし。御門きかせ給て。なに事ぞ殿上におびたいしくきこゆるはとはせ給へば。女房兼通が青つねよびてさぶらへば。その事によりてをのこともにせめられて。其罪あがひ候をわらひ候なりと申ければ。いかやうにあがふぞとて。ひのおましにいでさせ給て。こじとみよりのぞかせ給ければ。我よりはじめてひた青なる装束にて。あをきくひ物どもをもたせてあがひければ。これを笑なりけりと御覽ぞ。え腹だゝせ給はていみじうわらはせ給ひけり。そのうちはまめやかにさいなむ人もなかりければ。いよくなんわらひあざけりける。

保輔盗人たる事。

今はむかし。丹後守保昌が弟に。兵衛尉にて冠たまはりて保輔といふもの有けり。盗人の長にてぞありける。家は姉小路の南高倉の東にありけり。家のおくに藏をつくりて。またをふかう井のやうにほりて。太刀鞍鎧かぶと絹布など。よろづのうり物をよび入て。いふまゝに買てあたいをとらせよといひて。おくの藏のかたへぐしてゆけといひければ。あたひ給はらんとて行たるを。藏の内へよび入つゝ。堀たるあなへつきいれくして。もてきたる物をばとりけり。この保輔に物もて入たるものゝかへりゆくなし。このを物うりあやまうおもへども。うづみころしぬれば。此事をいふものなかりけり。これならず京中をしありきてぬすみをしてすぎけり。この事おろくきこえたりけれども。いかなりけるにか。とらへからめらるゝこともなくてぞすぎにける。

晴明を心みる僧の事。付晴明殺蛙事。

むかし。晴明が土御門の家に。老まらみたる老僧きたりぬ。十歳ばかりなる童部二人ぐしたり。晴明なにぞの人にておはするぞととへば。はりまの國の者にて候。陰陽師をならはんころざしにて候。この道にことにすぐれておはしますよしを承て。せうくならひまいらせんとてまいりたるなりといへば。晴明が思ふやう。この法

師はかしこき物にこそあるめれ。我を心みんとてきたるものなり。それにわろくみえてはわろかるべし。この法師すこしひきまきぐらんと思て。ともなる童は式神をつかひてきたるなめりかし。志き神ならばめしかくせと心の中に念じて。袖の内にて印をむすびてひそかに咒をとなふ。さて法師にいふやう。とく歸給ね。のちによき日して習はんと給はん事共はをしへたてまつらんといへば。法師あらたうといひて。手をすりて額にあて、立はしりぬ。いまはいぬらんと思ふに。法師とまりてさるべき所へ、車宿などのぞきありきて。また前によりきていふやう。このとも候つる童の二人ながら失て候。それ給はりて歸らんといへば。晴明御坊は希有のといふ御房かな。晴明はなにのゆへに人のともならんものをばとらんずるぞといへり。法師のいふやう。さらにあが君おほきなることほり候。さりながらたいゆるし給はらんとわびければ。よし／＼御坊の人の心みんとて。式神つかひてくることやすからぬ事におぼえつるが。こと人をこそさやうには心み給はめ。晴明をばいかでさる事し給べきといひて。物よむやうにしてまばしばかりありければ。外の方より童二人ながら走入て法師のまへに出来ければ。そのおり法師の申やう。實に心み申つるなり。仕事はやすく候。人のつかひたるをかくすことは更にかなふべからず候。今よりはひとへに御弟子になりて候はんといひて。ふところより名簿ひきいて、とら

に、據イ本補
やすからぬ、原
作うらやまし
き、今從イ本

せけり。

此晴明あるとき。廣澤僧正の御坊にまいりて物申うけ給けるあひだ。若僧どものはれあきらにいふやう。式神をつかひ給なるは。たちまちに人をばころし給やといひければ。やすくはえころさじ。刀をいれてころしてんといふ。さて虫などをばすことしのことせんにもかならずころしつべし。さていくるやうをまらねば罪をえつべければ。さやうの事よしなしといふほどに。庭に蛙の出て。五六ばかりおどりて池のかたぎまへ行けるを。あれひとつさらばころし給へ。心みんと僧のいひければ。つみをつくり給御坊かな。されども心み給へばころしてみせたてまつらんとて。草のはをつみきりて。物をよむやうにして。かへるのかたへなげやりければ。その草の葉の蛙のうへにかゝりければ。かへるまひらにひじけて死たりけり。これをみて僧どもの色もかはりておそろしと思けり。家の中に人なきありはこの志き神をつかひけるにや。人もなきに葎をあげおろし。門をさしなど志けり。

河内守頼信平忠恒をせむる事。

むかし河内守頼信上野守にてありしとき。坂東に平忠恒といふ兵ありき。仰らるゝ事なきがごとくにする。うたんとておほくの軍おこして。かれがすみかの方へ行む

廣澤、即寛朝也

な、據一本補○
兵、原作云、據一
本改
題、原作思、據一
本改

かふに。入海のはるかにさし入たるむかひに家をつくりてゐたり。この入海をまいる物ならば七八日にめぐるべし。すぐにわたらばその日の中にせめつべければ。忠恒わたりの舟どもをみなとりかくしてけり。さればわたるべきやうもなし。濱ばたに打立てこの濱のまゝにめぐるべきにこそわなれと兵共思ひたるに。上野守のいふやう。この海のまゝに廻てよせば日比へなん。その間に備もし。また寄られぬかまへもせられなん。けふのうちによせて賣んこそ。あのやつは存外にまてあはてまどはんずれ。まかるに舟どもはみなとりかくしたる。いかゞはすべきと軍どもにとはれけるに。軍ども更に渡し給べきやうなし。廻てこそよせさせ給べく候と申ければ。此軍どもの中にさりともこの道しりたるものはあるらん。頼信は坂東方はこのたびこそはじめてみれ。されども我家のつたへにてきよをきたる事あり。この海の中には堤のやうにてひろさ一丈ばかりまて。すぐにわたたりたる道あるなり。深さは馬のふとばらにたつときく。この程にこそその道はあたりたるらめ。さりともこのおほくの軍どもの中に志りたるもあるらん。さらばさきにたちてわたせ。頼信つゝきてわたさんとて。馬をかきはやめてよりければ。志りたるものにやありけん。四五騎ばかり馬を海にうちおろして。たゞわたりにわたりければ。それにつぎて五六百騎計の軍共わたしけり。まことに馬のふと腹にたちてわたる。おほくの兵共の中にたゞ

三人ばかりぞこの道は志りたりける。残りも露も志らざりけり。きく事だにもなかりけり。然にこの守殿此國をばこれこそはじめにておはするに。我にはこれの重代ものどもにてあるに。聞だにもせず志らぬにかく志り給へるは。げに人にすぐれたる兵の道かなとみなさしやきおぢて。わたり給ほどに。忠恒はうみをまはりてぞよせ給はんずらん。舟はみな取かへしたればあさみちをば我ばかりこそ志りたれ。すぐにはえわたり給はじ。濱をまはり給はん間には。とかくもし逃も志てん。さうなくばえせめ給はじとおもひて。心まづかに軍そろへてゐたるに。家のめぐりなる郎等あはてはしりきていはく。上野殿はこの海の中に浅きみちの候けるより。おほくの軍を引具してすてにこゝへ來給ひぬ。いかいせさせ給はんと。わななき壁にわはていひければ。忠恒かねての志たぐにたがひて。我すてにせめられなんす。かやうにまたてたてまつらんと云て。たちまちにみやうぶをかきて。ふみはさみにはさみてさし上て。小船に郎等一人のせてもたせて。むかへてまいらせたりければ。守殿みて彼みやうぶをうけとらせていはく。かやうにみやうぶにおこたりぶみそへていだす。すてにきたれるなり。さればあながちにせむべきにあらすとて。この文をとりて馬を引かへしければ軍共みなかへりけり。そのうちよりいと守殿をば。ことにすぐれていみじき人におはしますといよくいはれ給けり。

白川法皇北面受領の下りのまねの事。

これもいまはむかし。白川法皇鳥羽殿におはしましけるとき。北面のものどもに受領の國へくだるまねせさせて御覽あるべしとて。玄蕃頭久孝といふものをして。衣冠にきぬいだして。ろの外の五位どもをば前駐せさせ。衛府どもをばやなぐひをひにして御覽あるべしとて。をのく錦唐綾をきておとらじとまけるに。左衛門尉源行遠心ことに出立て。人にかねてみえなばめなれぬべしとて。御前ちかゝりける人の家に入ると。従者をよびて。やうれ御前の邊にて見てことみせまいらせり。むでに見えざりければ。いかにかうはをそきにかと。たつの時とこそよほしはありしか。さがるといふ定午未の時にはわたらんずらんものをと思て待るたるに。門の方に聲してあはれゆしかりつるものかなくといへ共。たゞまいる物をいふらんと思ふほどに。玄蕃殿の國司姿こそあしかりつれといふ。藤左衛門殿は錦をき給ひつ。源兵衛殿はぬひ物をして金の文をつけてなどかたる。あやしうおぼえてやうれとよべは。此みてこととやりつる男ふみていてきて。大かたかばかりのみ物候はず。かも祭も物にても候はず。院の御棧敷のかたへわたしあひ給たりつるさまは。目もをよびさぶらはずといふ。さていかにといへば。はやうはて候ぬといふ。こはいかにきてはつげぬぞといへば。こはいかなることにかさぶらふらん。まゐりてみて

ことみせ、原作
うとみて、
本改、イ本作
といひて

ことおほせさぶらへば。目もたゝかずよくみてさぶらふぞかしといふ。大かたとかくいふばかりなし。さるほどに行遠は進奉不参返々奇怪なり。たしかにめしこめよとおほせくだされて。廿日あまり候ひけるほどに。このまだいをきこしめして。わらはせおはしましてぞめしこめはゆりてけるとか。

藏人得業猿澤池龍事。

これも今はむかし。ならに藏人得業惠印といふ僧あり。鼻おほきにてあかゝりければ。大鼻の藏人得業といひけるを。のちさまにはことながしとて鼻藏人とぞいひける。なをのちくには鼻藏くとのみいひけり。それがわかかりける時に。猿澤の池のはたに。其月のその日この池よりれうのぼらんずるといふ簡をたてけるを。往來の者わかき老たる。さるべき人くゆかしき事かなとさゝめきあひたり。この鼻藏人あかしきことかな。我志たる事を人々さはぎわひたり。あこの事かなと心中にあかしく思へども。すかしふせんとてそらまらずして過行ほどにその月になりぬ。大かた大和河内和泉攝津國のものまできつたへてつどひあひたり。惠印いかにかくはあつまる。なにかあらんやうのあるにころ。あやしきことかなと思へども。さりげなくてすぎゆくほどに。すでにろの日になりぬれば。みちもさりあへずひしめきあつまる。そのときになりてこの惠印思やう。たゞ事にもあらじ。我志たる事なれど

が、據イ本補

もやうのあるにこそと思ければ。この事さもあらんずらん行てみんと思て頭つゝみてゆく。大かたちかうよりつくべきにもあらず。興福寺の南大門の壇のうへのぼりたちて。いまや龍ののぼるかゝとまぢたれども。なにののぼらんぞ。日も入ぬ。くらゝになりて。さりとはかくてあるべきならねばかへりける道に。ひとつ橋に目くらがわたりあひたりけるを。この惠印あなあぶなの目くらやといひたりけるを。めくらとりもあへず。あらし鼻くらななりといひたりける。この惠印をはなくらいふともきらざりけれども。目くらといふにつけて。あらしはなくらななりといひたるが。鼻くらにいひあはせたるがあかしき事の一なりとか。

清水寺御帳給る女の事。

いまはむかし。たよりなかりける女の。清水にあながちにまいるありけり。年月つもりけれども。露ばかりそのまるとおぼえたることなく。いといたよりなく成まさりて。はてはとしごろありける所をも。そのこととなくわくがれてよりつく所もなかりけるまゝに。なくゝ観音をうらみ申て。いかなる先世のむくひなりとも。たいすこしのたより給候はんといりもみ申て。御前にうつぶしくたりけるよの夢に。御前よりとてかくあながちに申せば。いとあしくおぼしめせど。すこしにてもあるべきたよりのなければ。その事をあほしめしなげくなり。これを給れとて御帳のか

しく、イ本作ふ

み、原作し、據イ
本改、一本作幾
ある、原作なる、
據一本改

たひらをいとよくたゝみて。前にうちをかるとみて夢さめて。御あかしのひかりにみれば。夢のごとく御帳のかたひらたゝまれてまへにあるをみるに。さはこれよりほかにたぶべき物のなきにこそあんなれともふに。身のほどの思ふられてかなしくて申やう。これさらに給はらじ。すこしのたよりも候はんにしきをも御ちやうにはぬひてまいらせんとこそ思候に。此御帳計を給はりてまかり出べきやうも候はず。返しまいらせさぶらひなんと申て。犬ふせぎの内に入てをきぬ。またまどろみ入たる夢に。なごさかまはるぞ。たゞたばん物をば給はらて。かくかへしまいらするあやしきことなりとてまた給はるとみる。さてさめたるにまたあなじやうに前にあれば。なくゝ返しまいらせつ。かやうにまつゝみたび返したてまつるに。なをまたかへしたびて。はてのたびはこのたびかへしたてまつらんはむくいあるべきよしをいましめられければ。かゝるともまらざらん寺僧は。御帳のかたひらをぬすみたるとやうたがはんずらんと思ふもくるしければ。まだ夜ぶかくふところに入てまかり出にけり。これをいかにとすべきならんと思てひきひらげてみて。きるべき衣もなきに。さはこれをきぬにしてきんとおもふ心つきぬ。これを衣にしてきてのち。みとみるちとこにもわれ女にもわれ。あはれにいとあしきものに思はれて。そゝるなる人の手より物をあほくえてけり。大事なる人のうれへをも。そのきぬをきて

去らぬやんごとなき所にもまいりて申させければ。かならずなりけり。かやうに志つゝ人の手より物をえ。よき男にも思はれてたのしくてぞありける。さればその衣をばおさめて。かならずせんとぞもふことのありにぞとり出てきける。かならずかなひけり。

則光ぬす人をきる事。

いまはむかし。駿河前司橘季通が父に。陸奥前司のりみつといふ人有けり。兵家にはあらねども人に所をかれ力などぞいみじうつよかりける。世のおぼえなどありけり。わかくて衛府の藏人にぞありける時。殿居所より女のもとへ行とて。太刀ばかりをはきて小舎人童をたゞ一人ぐして。大宮をくだりにいきければ。大垣の内に入つたてのけしきのしければ。おそろしと思て過けるほどに。八九日のよふけて。月は西山にちかくなりたれば。西の大垣の内は影にて人のたてらんもみえぬに。大垣の方よりこゑばかりして。あのすぐる人まいりとまれ。公達のおはしますぞ。えすぎじといひければ。さればこそと思てすゝどくおゆみて過るを。おれはさてはまかりなやとて。走かゝりてものゝきければ。うつぶきてみるに。弓のかけはみえず。太刀のきら／＼としてみえければ。木にはあぢりけりとおもひてかいふして逆を追付てくれば。頭うちわれぬとおぼゆれば。にはかにかたはらさまにふとよりたれば。を

所、一本作こゝぞ、一本作て

つ、原作ん、據
一本改、一本作

ふ物のはしりはやまりてえとゝまりあへずさきに出たれば。すこしたてゝたちをぬきて打ければ。頭を中よりうちわりたりければ。うつぶしにはしりまるびぬ。ようまつともふほどに。あれはいかにまつるぞといひて。また物のはしりかゝりければ。太刀をもえさしあへず脇にはさみてにぐるを。けやけきやつかなといひてはしりかゝりて。くるものはじめのよりはしりのとくおぼえければ。これはよもありつるやうにははかられじと思て俄にゐたりければ。はしりはやまりたるものにて。我にけつまづきてうつぶしにたふれたりけるを。ちがひてたちかゝりておこしたてず。頭を又うちわりてけり。いまはかくとおもふほどに三人ありければ。今ひとりかさてはえやらじ。けやけくしていくやつかなとて。まうねくはしりかゝりてきければ。このたびはわれはあやまたれなんぞ。神佛たすけ給へと念じて。太刀をほこのやうに取なして。はしりはやまりたるものにはかにかふとたちむかひければ。はらはらとあはせてはしりあたりけり。やつもきりけれどもあまりにちかくはしりあたりてければ。きぬだにきれざりけり。ほこのやうにもちたりける太刀なりければ。うけられて中よりとをりたりけるを。太刀の束を返しければ。のけさまにたふれたりけるをきりてければ。太刀もちたるかいなをかたよりうちおとしてけり。さてはしりのきてまだ人やあるとき、けれども。人のおともせざりければ。はしりまひて中

御門の門より入て。はしらにかひそひてたちて。小舎人童はいかゞまつらんと待け
れば。童は大宮をのぼりになく／＼いきけるをよびければ。よろこびてはしりきに
けり。殿居所にやりてきがへとりよせてきかへて。もときたりけるうへのきぬさし
ぬきには血のつきたりければ。童してふかくかくさせて。童の口よくかためて。太刀
に血のつきたるおらひなどまためて。殿居所にさりげなく入てふしにけり。よ
もすがら我志たるなどきこえやあらんずらんと。むねうちさはぎておもふほどに。
よあけてのち物どもいひさはぐ。大宮大炊御門邊に大なる男三人。いくほどもへだ
てずきりふせたる。あさましくつかひたる太刀かな。かたみにきり合て死たるかと
みれば。おなじ太刀のつかひざまなり。敵の志たりけるにや。されどぬす人とおぼし
きまぞきたるなどいひのゝまるを。殿上人どもいざゆきてみてこんとて。さそひ
てゆけば。ゆかじばやと思へども。いかざらんもまた心えられぬさまなれば。まぶし
ぶにいぬ。車にのりこぼれてやりよせてみれば。いまだともかくもしなさてをきた
りけるに。年四十あまりばかりなる男のかつらひげなるが。無文の袴にこんのあら
ひざらしのあをき。山吹のきぬの衫よくさらされたるきたるが。猪のさかつらの志
りざやしたるたちはきて。申の皮のたびに沓きりはきなして。わきをかきおよびを
さして。とむきかうむき物いふ男たり。なに男にかとみるほどに。雑色のよりきて。

さかつら、原作
さやつら、據今
昔物語改

び、原作み、據
イ本改

あの男のぬす人かたきにあひてつかうまつりたると申といひければ。うれしくもい
ふなるおとこかなとおもふほどに。車のまへのりたる殿上人の。かのおとこめし
よせよ子さいとはんといへば。雑色はしりよりてめしもてきたり。みればたかつら
ひげにておとこがひそりはなさがりたり。あかひげなる男の血目にみなし。かたひざ
つきてたちのつかに手をかけてるたり。いかなりつることぞとへば。この夜中は
かりに物へまかるとて。こゝをまかり過つるほどに。物の三人おれはまさになん
んやとて。はしりつゝきてまうできつるを。ぬす人なめりと思給へて。あへくらべ
ふせて候なり。けさみればなにがしをびなしと思給ふべきやつばらにてさぶらひけ
れば。敵にて仕りたりけるなめりと思給れば。志や頭どもをきつてかくさぶらふな
りと。たちぬいぬをよびをさしなどかたりをれば。人々／＼さて／＼といひてとひき
けば。いと／＼るふやうにしてかたりをる。その時にぞ人にゆづりえて面ももたけ
られてみける。けしきやまるからんと人志れず思たりけれど。われとななるものゝ
いできたりければ。それにゆづりてやみにしと。ちもひてのちに子どもにぞかた
りける。

空入水したる僧の事。

これもいまはむかし。かつら川に身なげんずる聖とて。まづ祇陀林寺にして百日懺

法おこなひければ。ちかき遠きものども道もさりあへず。おがみにゆきちがふ女房車などひまなし。みれば舟あまりばかりなる僧のほそやかなる。目をも人にみおはせず。ねぶりめにて時々、あみだ佛を申。そのはざまはくちびるばかりはたらくは念佛なめりとみゆ。またとき々、そこにいきをはなつやうにきて。つどひたるもの共のかほをみわたせば。その目にみおはせんとつどひたるものども。こちをしあちをしひしめきあひたり。さてすでにその日のつとめては堂へ入て。さきにさし入たる僧どもおほくあゆみつゝきたり。まりに雑役車に。この僧は紙の衣袈裟などきてのりたり。なにといふにかくちびるはたらく。人にめもみおはせずして時々、大いきをぞはなつ。ゆく道にたちなみたる見物のものども。うちまきをあられのふるやうにまきちらす。聖いかにかく目はなににいたへがたし。心ざしあらばかみぶくろなどに入れて。我るたる所へをくれと時々、いふ。これを無下のものは手をすりておがむ。すこし物の心あるものは。などかうはこの聖はいふぞ。たゞいま水に入なんずるにぎんだりへやれ。日はなににいたりたへがたしなどいふこそ。あやしけれなどさざめくものもあり。さてやりもてゆきて。七條の末にやりいだしたれば。京よりはまさりて入水の聖おがまんとして。河原の石よりもおほく人つどひたり。河はたへ車やりよせてたてれば。聖たゞいまはなん時ぞといふ。ともなる僧ども申のくだりになり

まきちらす、原
作な、道す、據
一本改、イ本作
なく

候にたりといふ。往生の刻限にはまだしかんなるは。いまますこしくらせといふ。待かねてとをくよりきたるものは歸などして。河原人ずくなになりぬ。これをみかけてんと思たるものはなをたてり。それが中に僧のあるが。往生には刻限やはさだむべき。心えぬことかなといふ。とかくいふほどにこの聖たうさきにて西にむかひて。河にぶぶりと入ほどに。舟はたなるなはにあしをかけて。ぶぶりともしらてひしめくほどに。弟子の聖はづしたれば。さかさまにいたりてぶぶくとするを。男の川へおりくだりてよくみむとてたてるが。この聖の手をとりて引あげたれば。左右の手してかほはらひてく、みたる水をはきすて。この引上たる男にむかひて。手をすりて廣大の御恩義さぶらひぬ。この御恩は極樂にて申さぶらはんといひてくがへ走のぼるを。そこらあつまりたるものども。童部河原の石をとりてまきかぐるやうにうつ。はだかなる法師の川原くだりに走を。つどひたるものどもうけとり、打ければ。頭うちわられにけり。この法師にやありけん。大和より爪を人のもとへやりける女のうはがきに。さきの入水の上人とかきたりけるとか。

日藏上人吉野山にて鬼にあふ事。

むかし。吉野山の日藏のきみ。よしの、おくにおこなひありき給けるに。たけ七尺ばかりの鬼。身の色は紺青の色にて髪は火のごとくにあかく。くびほそくむね骨はこ

とにさし出ていらめき。はらぶくれて脛はほそく有けるが。このおこなひ人にあひて。手をつかねてなくことかぎりなし。これはなに事する鬼ぞととへば。この鬼涙にむせびながら申やう。われはこの四五百年をすぎてのむかし人にて候しが。人のためにうらみをのこしていまはかゝる鬼の身となりて候。さてそのかたきをば思のどとくにとりころしてき。それが子孫ひこやしは子にいたるまで。のこりなくとりころして。いまはころすべき物なくなりぬ。さればなをかれらがむまれかはりまかる後までもまりて。とりころさんとおもひ候に。つぎくのむまれ所露もまらねば。とりころすべきやうなし。瞋恚のほのほはおなじやうにもゆれども。敵の子孫はたえはてたり。我ひとりつきせぬ瞋恚のほのほにもえこがれて。せんかたなきくらしみをのみうけ侍り。かゝる心をおこさばらましければ。極樂天上にもむまれなまし。ことにうらみをとめてかゝる身となりて。無量億劫の苦をうけんとする事の。せんかたなくかなしく候。人のためにうらみをのこすはまかしながらわが身のためにようをまらましかば。かゝるうらみをばのこさざらましといひつゞけて。なみだをながしてなくことかぎりなし。ろのあひだにうへよりほのほやうくもえいでけり。さて山のおくさまへあゆみ入りけり。さて日藏のきみあはれとおもひて。それがた

めに。さまぐのつみほろぶべきことどもをし給けるとぞ。

丹後守保昌下向のとき致經父逢事。

これもいまはむかし。丹後守保昌國へくだりけるとき。奥佐の山に白髪の武士一騎あひたり。路のかたはらなる木の下にうち入て立たりけるを。國司の郎等ども。この翁など馬よりありざるぞ奇恠なり。とがめおろすべしといふ。爰に國司のいはく。一人當千の馬のたてやうなり。たゞにはあらぬ人ぞとがむべからずとせいしてうちするほどに。三町ばかり行て大矢の左衛門尉致經數多の兵をぐしてあへり。國司會尺する間。致經がいはく。爰に老老や一人逢奉りて候つらん。致經が父平五大夫(繼)に候。堅固の田舎人にて。子細をまらず無禮を現じ候つらんといふ。致經過てのち。さればこそとぞいひけるとか。

出家功德の事。

これもいまはむかし。つくしにたうさかのさへと申齋の神ぞまします。そのほこらに修行しける僧のやどりてねたりけるよ。夜中はかりにはなりぬらんと思ふほどに。馬のあしをとあまたまて。人のすぐるときくほどに。齋はましますかととふこゑす。このやどりたる僧あやしときくほどに。このほこらの内より侍りとこたふなり。またあさましときけば。明日武藏寺にやまいり給ふととふなれば。さも侍らず。なに

ぞ、原作も、據一本改

とふなれば、一本改

侍らざらん、
作侍べらん、
一本改 據原

ごとの侍ぞとこたふ。あす武蔵寺に新佛いで給へしとて。梵天帝尺諸天龍神あつまり給ふとはまり給はぬかといふなれば。さる事もえうけたまはらざりけり。うれしくつげ給へるかな。いかでかまいらては侍らざらん。かならずまいらんとすといへぬ。さらばあすの巳時ばかりのことなり。かならずまいり給へ。まち申さんとて過ぬ。この僧これをきいて。希有の事をききつるかな。あすは物へゆかんと思つれども。このことみてこそいづちもゆかめと思て。あくるやをろきとむさし寺にまいりてみれども。さるけしきもなし。れいよりは中くまづかに人も見えず。あるやうあらんと思て佛の御まへに候て。巳時をまちるたるほどに。今まばしあらば午時になりなんす。いかなることにかと思ひたるほどに。とし七十あまりばかりなる翁の。髪もはげてまろきともおろくある頭に。ふくろのゑぼしをひきいれて。もともちいさきがいとこしかいまりたるが。杖にすがりてあゆむ。まりに尼たてり。ちいさくくろき桶になにかあるらむ物いれてひきさげたり。御堂にまいりて。男はほとけの御まへにてぬか二三度計つきて。もくれんずの念珠の大きにながきをしもみて候へば。尼そのもたる小桶を翁のかたわらにをきて。御房よび奉らんとていぬ。まばしばかりあれば。六十ばかりなる僧まいりて佛あがみたてまつりて。なにせんによび給ぞといへば。けふあすともしらぬ身にまかりなりにたれば。このまらがるすこ

しのこりたるを剃て。御弟子にならんと思ふなりといへば。僧目をしすりこいとたうとき事かな。さらばとくくと。小桶なりつるは湯なりけり。そのゆにて頭あらひて剃て戒さづけつれば。また佛あがみ奉りてまかり出ぬ。そのちまたこと事なし。さはこの翁の法師になるを随喜して天衆もあつまり給て。新佛のいでさせ給ふとはあるにこそありけれ。出家随分のくどくとは今にはじめたる事にはあらね共。ましてわかくさかりならん人の。よく道心をこして随分にせんものゝ功德。これにていよくをしはかられたり。

宇治拾遺物語卷第十二

達磨見天竺僧行一事

むかし。天竺に一寺あり。住僧尤おほし。達磨和尚この寺に入て僧どもの行をうかひ見給に。或房には念佛し經をよみさまぐにおこなふ。或房を見給に入九十なる老僧の只二人あて圍碁を打。佛もなく經もみえず。たゞ圍碁をうつほかは他事なし。達磨件房を出て他の僧にとふに。答ていはく。此老僧二人若より圍碁の外はすることなし。すべて佛法の名をだにきかず。仍寺僧にくみいやしみて交會することなし。

補て、
據一本イ本

お、イ本元、悉行

むなしく僧供を受外道のごとく思へりと云々。和尚これをききて。さだめてやうお
らんと思て。この老僧がかたはらにるて園碁うつわり様をみれば。一人は立り一人
は居りとみるに忽然と志て失ぬ。あやしくおもふほどに。立る僧は歸るたりとみる
ほどに。また居るたる僧うせぬ。みればまた出きぬ。さればこそと思て園碁のほか
他事なしとうけ給るに。證果の上人にこそおはしけれ。そのゆへをとひ奉らんと
給に。老僧答いはく。年來このことよりほかは他事なし。但黒勝ときは我煩惱勝ぬと
かなしみ。白勝時は并勝ぬと悦。打に隨て煩惱の黒を失ひ。并の白のかたんとをおも
ふ。このくどくによりて證果の身となり侍なりといふ。和尚房をいで、他僧にかた
りたまひければ。年來にくみいやしみつる人々。後くはいしてみな貴みけりとなん。
提婆菩薩參龍樹菩薩許事。

昔。西天竺に龍樹井と申上人まします。智恵甚深也。又中天竺に提婆井と申上人龍樹
のちゑふかきよしを聞給て。西天竺に行向て門外にたちて案内を申さんとし給とこ
ろに。御弟子外より來給て。いかなる人にてましますぞとふ。提婆井こたへ給や
う。大師のちゑふかきましますよしうけたまはりて。嶮難を志のきて中天竺よりは
るくまいりたり。このよし申べきよしの給。御弟子龍樹に申ければ。小箱に水を入
て出さる。提婆こゝろを給て。衣の襟より針を一取いだして。この水に入てかへした

五祖集云、第十
見外道中一數因
樹深器之傳佛心
宗綱爲十五祖

尊者以針投鉢龍
樹深器之傳佛心
宗綱爲十五祖

てまつる。これをみてりうぢゆ大におどろきて。はやくいれたてまつれとて。房中を
掃きよめていれたてまつり給。御弟子あやしみ思やう。水をあたへ給ことは遠國よ
りはるくときたり給へば。疲給らん喉潤さんためと心えたれば。この人針を入れて
かへしたまふに。大師驚たまひてうやまひ給こと心えざることかなとおもひて。の
ちに大師にとひ申ければこたへ給やう。水をあたへつるは我智恵は小箱の内の水の
ごとし。志かるに汝萬里を志のきて來る。ちゑをうかべよとて水をあたへつるなり。
上人そらに御心をまりて。針を水にいれてかへすことは。我はりばかりの智恵を以
て。なんぢが大海の底を極んとなり。なんぢら年來隨逐すれども。このこゝろを志ら
ずしてこれをとふ。上人ははじめてきたれどもわがこゝろを志る。これちゑのある
となきとなり云々。すなはち瓶水をうつすごとく。法文をならひつたへたまひて。中
てんぢくにかへりたまひけりとなん。

慈惠僧正延引受戒之日事。

慈惠僧正良源永觀三年正月二日入滅。座主のとき。受戒行べき定日例のごとく催儲て。座
主の出仕を相待のところに。途中よりにはかにかへり給へば。其のものどもこはい
かにと心えがたく思けり。衆徒諸識人もこれほどの大事。日のさだまりたることを
いまとなりてさしたる障もなきに延引せしめ給こと志かるべからずと諍すること

かぎりなし。諸國の沙彌等までことごとく、くまいり集て。受戒すべきよし思ふたるところに。横川小綱を使にて。今日の受戒は延引なり。重たる催に随て行はるべきなりと仰下しければ。なにごとによりて留給ぞとふ。使またくろのゆへをまらず。たいはやく走向てこのよしを申せとばかりの給つるぞといふ。あつまれる人々をのこのころをえずあひひてみな退散しぬ。かゝるほどに未の時ばかりに。大風吹て南門にはかに倒れぬ。其とき人々この事あるべしとかねて悟りて。延引せられけると思ひ合せけり。受戒行はれましかば。皆うちころされなましと感のゝまりけり。

内記上人破法師陰陽師紙冠事。

内記上人寂心といふ人ありけり。道心堅固の人なり。堂を造り塔をたつる最上の善根なりとて勸進せられけり。材木をば播磨國に行てとられけり。こゝに法師陰陽師紙冠をきて被するを見つけて。あはて馬よりありてはしりよりて。なにわざし給御房ぞとへば。被し候なりといふ。なにしに紙冠をばまたるぞとへば。被戸の神達は法しをば思給へば。被するほどまばらくして侍なりといふに。上人こゑをあげて大になきて陰陽師に取かれば。陰陽師心えず仰天して。被をまきしてこれはいかにといふ。被せさする人もあきれてゐたり。上人冠をとりて引やぶりにてなくことかぎりなし。いかにまりて御房は佛弟子となりて被戸の神達にくみ給といひて。如

この事以下三十
七字據イ本

來の思事をやぶりにて。まばしも無間地獄の業をばつくり給そ。誠にかなしきことなり。たゞ寂心をころせといひて。とりつきてなくことあびたし。陰陽師のいはく。あほせらるゝ事尤道理なり。世の過がたければさりとてはとてかくのごとく仕なり。まからずばなにわざをしてかは妻子をばやしなひ。わがいのちをも續侍らむ。道心なければ上人にもならず。法師のかたちに侍れど俗人のとくなれば。後世のこといかいとかなしく侍れど。よのならひにて侍ればかやうに侍なりといふ。上人のいふやう。それけさもわれいかゞ三世如來の御首に冠をば着給。不幸にたへずしてかやうのことし給は。堂つくらん料に勸進しあつめたる物どもをなんぢになんたぶ。一人并に勸れば堂寺造に勝りたる功德なりといひて。弟子どもをつかはして。材木とらんとて勸進しあつめたる物をみなはこびよせて。この陰陽師にとらせつ。さてわが身は京に上給にけり。

持經者獻實効驗事。

むかし。開院大臣殿冬嗣。三位中將におはしけるとき。わらは病を重くわづらひ給けるが。神名といふ所に獻實といふ持經者なん。童病はよく行落し給と申人有ければ。この持經者に行せんとして行給に。荒見川のほどにてはやうあこり給ぬ。寺はちかく成ければこれよりかへるべきやうもなしとて。ねんじて神名におはして。房の簷に

行、イ本作祈、下

し、據一本補

車をよせてあんないをいひ入給に。近比蒜ひまを食侍りと申。志かれどもたゞ上人をみたてまつらん。只今まかりかへることかなひ侍らじとありければ。さらばはいりたまへとて。房の部下立たるを取て。あたらしきむしろまきて。入給へと申ければ入給ぬ。持經者沐浴志とばかりありて出合ぬ。長高き僧の瘦さらばひてみるに貴げなり。僧申やう。風をもく侍るに。醫師の申に志たがひて蒜を食て候なり。それにかやうに御座候へば。いかでかはとてまいりて候なり。法花經は淨不淨をきはぬ經にてましませばよみたてまつらん。何條事か候はんとて。念珠を押摺てそばへよりきたるほど心たのもし。御頭に手を入れて我ひぎをまくらにせさせ申て。壽量品を打出してよむこゑはいとたうとし。さばかり貴き事もありけりとおぼゆ。すこしはがれて高聲に誦こゑまことにあはれなり。持經者目より大なる涙をはらくととおとしてなくとかぎりなし。そのときさめて御心ちいとさはやかに残りなくよくなり給ぬ。返々後世まで契てかへり給ぬ。それよりぞ有驗の名はたかくひろまりけるとか。

空也上人臂觀音院僧正祈直事。

むかし。空也上人申べき事ありて。一條・大臣殿にまいりて藏人所に上てゐたり。餘慶僧正又參會し給。物がたりなどし給ほどに僧正の、給。その臂はいかにして打給へるぞと。上人のいはく。我母物妬して幼少の時片手を取て投待しほどに。打て侍

一條大臣、大臣上悉脫左字、大臣從一位實經公也即

とぞ聞侍し。幼ちのときのことなればおぼえ侍らず。かしこく左にて侍る。右手打侍らましかばといふ。僧正の給。そこは貴き上人にておはす。天皇の御子とこそ人は申せ。いとかたじけなし。御臂まことに祈直し申さんは如何。上人云。尤悦侍べし。實に貴く侍なん。この加持し給へとて近く寄れば。殿中の人々涙をこぼれをみる。そのとき僧正頂より黒けぶりをいだして加持し給に。まばらくありてまがれるひじはたとなりてのびぬ。則右の臂のごとくにのびたり。上人涙をおとして三度禮拜す。見人みなのもめき感じ或はなきけり。其日上人共にわかき聖三人具したり。一人は細をとりあつむる聖なり。道に落たるふるき繩をひろひて。壁つちにくはへて古堂のやぶれたる壁を塗事をす。一人は瓜の皮をとりあつめて水にあらひて獄衆にあたへけり。一人は反古の落散たるをひろひあつめて。紙にすきて經を書寫したてまつる。その反古の聖を。臂なをりたる布施に僧正に奉りければ。よろこびて弟子になして義觀となづけ給。ありがたかりけることなり。

増賀上人參三條宮振舞の事。

むかし。多武峯に増賀上人とて貴き聖おはしけり。きはめて心武うきびしくおはしけり。ひとへに名利をいとひて頗物ぐるはしくなんわざとふるまひ給けり。三條大ささいの宮(瑞)尼にならせ給はんとて。戒師のためにめしにつ。かはされければ。もつ

ともたうときとなり。増賀こそはまことになしたてまつらめとてまいりけり。弟子どもこの御つかひを噴て打たまひなんとやせんざらんとおもふに。おもひのほかにかゝるやすくまいりたまへば。ありがたきことにおもひあへり。かくて宮にまいりたるよし申ければ。よろこびてめし入給ひて尼になり給に。上達部僧どもおほくまいりあつまり。内裏より御つかひなどまいりたるに。この上人は目はおそろしげなるが。軀も貴げながらにわづらはしげになんおはしける。さて御まへにめしいれて。御き帳のもとにまいりて出家のさほうまで。めでたく長き御髪をかき出して。この上人にはさませらる。御簾中に女房達見てなくことかぎりなし。はさみはていでなんとするとき。上人高聲にいふやう。増賀をしもあながちにめすは何事ぞ。心えられ候はず。もしきたなき物を大なりときこしめしたるか。人のよりは大に候へども。いまはねりぎぬのやうにくたくとなりたるものをといふに。御簾の内ちかく候女房だち。ほかに公卿殿上人僧だち。これを聞にあさましく目くちはたかりておぼゆ。宮の御心ちもさらなり。貴さもみなうせてをのく身よりあせあへて。われにもあらぬ心ちす。さて上人まかり出なんとて袖かきわはせて。としまかりよりて風をもく成て。いまはたゞ痢病のみつかまつればまいるまじく候つるを。わざとめし候つれば相搦て候つる。堪がたくなりて候へば。いそぎまかり出候なりとて。いでま

に西臺のすのこについで。尻をかへげて椽の口より水をいだしやうにひりちらす。音高く鼙事かぎりなし。御前まできこゆ。わかき殿上人わらひのゝまる事おびただし。僧だちはかゝるものぐるひをめしたる事と誇申けり。かやうにことにふれてものぐるひにわざとふるまひけれど。それにつけても貴きおぼえはいよくまさりけり。

聖寶僧正渡一條大路事。

むかし。東大寺に上座法師のいみじくたのしきありけり。つゆばかりも人に物あたふる事をせず。慳貪につみふかくみえければ。その時聖寶僧正のわかき僧にておはしけるが。この上座のおしむ罪のあさましきにとて。わざとあらがひをせられけり。御房何事たらんに。大衆に僧供ひかんといひければ。上座思様。物あらがひしてもし負たらんに。僧供ひかんと由なし。さりながら衆中にてかくいふことをなにともこたへざらんもくちあしく思て。かれがえすまじきことをおもひめぐらしていふやう。加茂祭の日ま裸にてたうさきばかりをして干鯉太刀にはきて。やせたる女牛に乗て。一條大路を大宮より河原まで。われは東大寺の聖寶なりとたかく名のりてわたり給へ。まからばこの御寺の大衆より下部にいたるまで。大僧供ひかむといふ。心中にさりともよもせじと思ければかたくあらがふ。聖寶大衆みなもよほしあつめ

思、原作鬼、據一本改

て。大佛の御まへにて金うちて佛に申てさりぬ。その期ちかくなりて。一條宮小路に
棧敷うちて。聖寶がわたらん見むとて大衆みなあつまりぬ。上座もありけり。志ばら
くありて大路の見物のものどもおびたゞまくのゝしる。何事かわらんとて頭さ
し出きて西の方をみれば。牝牛にのりたる法師の裸なるが。干鯉を太刀にはきて
牛の尻をはたくと打て。尻に百千の童部つきて。東大寺の聖寶こそ上座とあらが
ひして渡れとたかくいひけり。そのとしの祭にはこれを詮にてぞありける。さて大
衆をのゝ寺にかへりて。上座に大僧供ひかせたりけり。この事御門きこしめして。
聖寶はわが身をすてゝ人をみちびくものにこそありけれ。いまの世にいかでかゝる
貴人ありけむとて。めし出して僧正までなしあげさせたまひけり。上の醍醐はこの
僧正の建立なり。

殺斷聖不實露顯事。

むかし。ひさしくをこなふ上人ありけり。五こくをたちて年來になりぬ。御門きこし
めして神泉にあがめすへてことに貴み給。木の葉をのみ食ける。物わらひする若公
達あつまりて。この聖の心みんとて行むかひてみるに。いとたうとげにみゆれば。殺
斷いく年計になり給ととはれければ。若よりたち侍れば。五十餘年にまかりなりぬ
といふを聞て。一人の殿上人のいはく。殺斷の屎はいかやうにかゝるらん。例の人に

此便宜参考文徳
實錄六齋衛元年
七月條

はかはりたるらん。いで行てみんといへば。二三人つれて行てみれば。殺屎をおほく
ひりをきたり。あやしと思て上人の出たるひまに。ゐたる志たをみんといひて。たゝ
みの下を引あけてみれば。土をすこしほりて布袋に米を入れてをきたり。公達みて手
をたゝきて。殺糞聖とよばゝりてのゝ志りわらひければにけさりにけり。その
のちはゆきがたもしらずながくうせにけりとなん。

季直少將歌の事。

今はむかし。季直少將といふ人ありけり。病つきてのちすこしをこたりて内にまい
りたりけり。公忠辨の掃部助にて藏人なりける比のことなり。みだり心ちまだよく
もをこたり侍らねども。心もとなくてまいり侍つる。後は志らねどかくまで侍れば
あさてばかりにまたまいり侍らん。よきに申させ給へとてまかり出ぬ。三日ばかり
ありて。少將のもとより。

(古今集卷四)

さてその日うせにけり。あはれなることのさまなり。

樵夫小童隱題哥讀事。

今はむかし。かくし題をいみじく興せさせ給ける御門の。ひちりきをよませられけ
るに。人々ゝわろくよみたりけるに。木こる童のあかつき山へ行とていひける。この

比ひちりきをよませさせ給なるを。人のえよみ給はざんなる。童部こそよみたれといひければ。ぐして行童部。あなほほけなることなりひそ。さまにもにぎいまくしといひければ。などかかならずさまににることかとして。

めぐりくるはるぐごとにさくらばなくたびちりき人にとはいや。といひたりける。さまにもにぎいまくし。

高忠侍哥讀事。

いまはむかし。たか忠といひける越前守の時に。いみじく不幸なりける侍の夜盡まめなるが。冬なれどかたびらをなんきたりける。雪のいみじくふる日。侍うたよめあかしうふる雪かなといへば。このさぶらひ何を題にて仕べきぞと申せば。はだかなるよしをよめといふに。ほどもなくふるふこそをさへけてよみあぐ。

はだかなるわが身にかゝるまらゆきはうちはらへどもきえせざりけり。

とよみければ。かみいみじくほめて。きたりけるきぬをぬぎてとらす。北方もあはれがりてうすいろの衣のいみじうかうばしきをとりせたりければ。二ながらとりてかいわぐみて。わきにはさみてたちさりぬ。侍に行たれば。るなみたる侍どもみておどろきあやしがりてとひけるに。かくときいてあさましがりけり。さてこの侍その後見えざりければ。あやしがりてかみたづねさせければ。北やまにたうとき聖ありけ

り。そこへ行てこのえたる衣を二ながらとらせていひけるやう。年まかり老ぬる身の不幸としをひてまざる。この生の事はやくもなき身に候めり。後生をだにいかでかおぼえて。法師にまかりならんと思侍れど。戒の師に奉るべき物の候はねばいまにすごし候つるに。かく思かけぬものを給たれば。かぎりなくうれしく思給て。これを布施にまいらするなりとて。法師になさせ給へとなみだにむせかへりてなくいひければ。聖いみじうたうとがりて法師になしてけり。さてそこよりゆくかたもなくてうせにけり。あり所もまらず成にけるとか。

つらゆきうたの事。

いまはむかし。貫之が土左守になりてくだりて有けるほどに。住はての年。七八ばかりの子のえもいはずあかしげなるを。かぎりなくかなしうまけるが。とかくわづらひてうせにければ。なきまどひてやまひつくばかりおもひこがるほどに。月比になりぬれば。かくてのみあるべきことかは。のぼりなんとおもふに。ちごのこゝにてなにとありしはやなどおもひ出られて。いみまうかなしかりければ。柱にかきつけける。

みやこへともふにつけてかなしきはかへらぬ人のあればなりけり。とかきつけたりける哥なんいまして有ける。

り、イ本作る、恐
是〇かな、原作
ぞ、據イ本改

あづま人哥の事。

いまはむかし。わづまうどのうたいみじうこのみよみけるが。ほたるをみて。

あなてりやむしの去や尻に火のつきてこ人玉ともみえわたるかな。

あづま人のやうによまんとて。實はつらゆきがよみたりけるとぞ。

河原院に融公靈住事。

今はむかし。河原院は融の左大臣の家なり。みちのくの志ほがまのかたをつくりて。うしほをくみよせてまほをやかせなど。さまぐのちかききことをつくしてすみ給ける。あとうせてのちうだ院にはたてまつりたるなり。延喜御門たびく行幸有けり。まだ院すませたまひけるありに。夜中ばかりに西對の塗籠をあけて。そよめきて人のまいるやうにおぼされれば見させ給へば。ひの装束うるはしく志たる人の。たちはき笏とりて二間ばかりのきてかしまりてゐたり。あれはたどとはせ給へばこのぬしに候翁なりと申。融のあともかとはせ給へば。志かに候と申す。さはなんぞと仰らるれば。家なればすみ候に。おはしますがかたじけなく所せく候なり。いかゞ仕べからんと申せば。それはいとくことやうの事なり。故おとの子孫のわれにとらせれば住にこそあれ。わがをしとりてゐたらばこそあらめ。禮もまらずいかにかくはうらむるぞとたかやかに仰られければ。かいけつやうにうせ

は、原作か、今從
イ本

ぬ。そのありの人々を御かどははたことにおはしますものなり。たゞの人はそのおとに逢て。さやうにすくよかにはいひてんやとぞいひける。

八歳童孔子問答の事。

今はむかし。もろこしに孔子みちを行たまふに八ばかりなる童あひぬ。孔子にとひ申やう。日の入所と洛陽といづれかとをきと。孔子いらへ給ふやう。日のいるところはとをし洛陽はちかし。童の中やう。日の出入ところはみゆ洛陽はまだみず。されば日のいづるところはちかし。洛陽はとをしと思ふと申ければ。孔子かしくき童なりとかんじ給ひける。孔子にはかく物とひかくる人もなきに。かくとひかくる人もなきに。かくとひけるはたゞのものにはあらぬなりけりとぞ人いひける。

鄭大尉の事。

いまはむかし。親に孝するものありけり。朝夕に木をうりておやをやしなふ。孝養の心空にまられぬ。かぢもなき船にのりてむかひの島にゆくに。朝にはみなみのかせふきて北の島にふきつけつ。夕にはまた舟に木をこりて入てゐたれば。きたのかせふきて家にふきつけつ。かくのごとくするほどにとし比になりて。大やけにきこしめして。大臣になしてめしつかはる。その者を鄭大尉とぞいひける。

貧俗觀佛性富事。

以下十二
字、重複行文

いまはむかし。もろこしのべんぎうに一人のおとこあり。家貧しくして貧なし。妻子をやしなふにちからなし。もとむれどもうるごとなし。かくて年月をふ。おもひわびてある僧にあひて。たからをうべきことをいふ。智慧ある僧にてこたふるやう。汝たからをえんと思はれたるまことの心をあこすべし。さらば寶もゆたかに後世はよきところに生まれなんといふ。このひとまことのころとはいかゞといへば。僧のいはく。まことの心をあこすといふはたのことにあらず。佛法を信するなりといふに。またとひていはく。それはいかに慥にうけたまはりて。心をえてたのみ思て二なく信をなしたのみ申さん。うけたまはるべしといへば。僧の曰。わがころはこれ佛なり。我心をはなれては佛なしと。然ば我心の故に佛はいますなりといへば。手をすりてなくくおがみて。それよりこのことを心にかけてよるひる思ければ。梵尺諸天きたりてまもり給ければ。はからざるに寶出て家のうちゆたかになりぬ。命をはるにいよく心佛を念じ入て。淨土にすみやかにまいりてけり。このことを聞みる人たうとみあはれみけるとなん。

宗行郎等射虎事。

いまはむかし。壹岐守家行が郎等を。はかなきことによりて主のころさんとしければ。小舟にのりてにげて新羅國へわたりて。かくれてるたりけるほどに。新羅のきん

かいといふところのいみぎうの、まりさはぐ。なにごとぞとへば。とらのころ註に入て人をくらふ也といふ。この男とふ。虎はいくつばかりあるぞと。たゞ一あるがにはかにいできて人をくらひて。逃ていきくするなりといふをきして。この男のいふやう。あの虎に合て一矢を射てまなばや。とらかしこくばともこそまなめ。たゞむなしうはいかてかくらはれむ。此國の人は兵の道わるきころはあれといひけるを。人きして國の守にかうくの事をこそ。此日本人申せといひければ。かしこき事かなよべといへば。人きてめしありといへばまいりぬ。まことにやこのとらの人くふをやすく射んとは申なりとはれければ。まか申候ぬとこたふ。守いかでかゝることをば申ぞとへば。この男の申やう。この國の人は我身をばまたくして敵を害せんと思たれば。おぼろげにてかやうのたけき獸などには。わが身の損せられぬべければ。まかりおはぬにこそ候めれ。日本の人はいかに我身をばなきになしてまかりあへばよきことも候めり。弓矢にたづさはらん物。なにしかは我身を思はんこととは候はんと申ければ。守さてとらをはかならず射ころしてんやといひければ。我身のいきいかずはまらず。かならずかれをば射とり侍なんと申せば。いといみじうかしこき事かな。さらばかならずかまへて射よ。いみじきよろこびせんといへば。おのこ申やう。さてもいづくに候ぞ。人をばいかやうにてくひ侍るぞと申せば。守のい

はく。いかなるおりにかあるらん。こうの中に入きて人ひとり頭をくらひてかたにうちかけて去なりと。この男申やう。さてもいかにしてかくひ候とへば。人のいふやう。とらはまづ人をくはんとては。ねこのねずみをうかいふやうにひれふして。志ばしばかりありて大口をあきてとびかゝり。頭をくひてかたにうちかけてはしりさるといふ。とてもかくても。さばれ一矢射てこそはくらはれ侍らめ。そのとらのありどころををしへよといへば。これより西に卅四町のきてをの島あり。それになんふすなり。人おぢてあへてそのわたりにゆかずといふ。をのれたいま侍らずとも。そなたをさしてまからんといひて調度をひていぬ。新羅の人々日本の人ははかなし。とらにくはれなんとあつまりて云けり。かくてこの男はとらのありどころきゝて行てみれば。まことに島はるくとおひわたりたり。をのたけ四尺ばかりなり。その中をわけ行てみればまことにとらふしたり。とがり矢をはげてかたひざをたてゝゐたり。とら人の香をかぎて。ついひらがりてねこのねずみうかいふやうにてあるを。をのこ矢をはげてをとめせてゐたれば。とら大口をあきておどりてをのこのうへにかゝるを。おのこ月をつよくひきて。うへにかゝるおりにやがて矢をはなちたれば。をとがひのまたよりうなじに七八寸ばかりとがり矢を射出しつ。とらさかさまにふしてたをれてあかくを。かりまたをつがひ二たひ腹をいる。二度な

云けり、原作
れ、據一本改

を、據一本補

がら土に射付て。つるにころして矢をもぬかて。國府にかへりて守にかうく射ころしつるよしいふに。守かんじのゝゑりて。おほくの人をぐしてとらのもとへ行てみれば。まことに箭三ながら射とをされたり。見るにいとみじ。まことに百千のとらおこりてかゝるとも日本の人十人ばかり馬にておしむかひて射ばとらなにわざをかせん。この國の人は一尺ばかりの矢にきりのやうなる矢をすけて。それに毒をぬりていれば。つるにはそのどくのゆへにまぬれども。たちまちにその庭に射ふすことはえせず。日本人は我命死なんをも露おします。大なる矢にていればその庭にいころしつ。なを兵の道は日本の人にはあたるべくもあらず。さればいよくいみぢうおそろしくおぼゆる國なりとおぢけり。さてこのをのこをばなをおしむといめていたはりけれど。妻子をこひてつくしにかへりて。宗行がもとに行てそのよしをかたりければ。日本のおもておこしたるものなりとて勘當もゆるしてけり。おほくのものども縁にえたりけるを宗行にもとらず。おほくの商人ども新羅の人のいふをきゝてかたりければ。つくしにもこの國の人の兵はいみじきものにぞしけるとか。

遣唐使子被食虎事。

いまはむかし。遣唐使にてもろこしにわたりける人の。十ばかりなる子をえみてあ

此條宜参考日本
紀欽明天皇六年
十一月條

かへりのをそか
り、原作をそか
改へり、據一本

るまじかりければぐしてわたりぬ。さてすぐしけるほどに。雪のいとたかくふりたりける日。ありきもせでるたりけるに。このちごのあそびに出ていぬるがかへりのあそかりければ。あやしとおもひていへみれば。あしがたうしろのかたからふみで行たるにそひて。大なる犬の足がたありて。それより此ちごのあしがたみえず。山ざまにゆきたるをみて。これは虎のくひていきけるなめりと思に。せんかたなくかなしくて。太刀をぬきて足がたをたづねて山のかたに行てみれば。岩屋のくちにこのちごを食ころして腹をねぶりてふせり。太刀をもちてはしりよれば。えにげてもいかてかひかしまりてゐたるを太刀にて頭をうてば。鯉のかしらをわるやうにわれぬ。つぎにまたそばざまにくはんとてはしりよるせなかをうてば。せぼねをうちきりてくだぐとなしつ。さて子をば死たれども。わきにかひはさみて家にかへりたれば。その國の人々みてあぢあぢむことかぎりなし。もろこしの人は虎にあひて逃る事だにかたきに。かくとらをばうちころして子をとりかへしてきたれば。もろこしの人はいみじき事にいひて。なほ日本の國には兵のかたはならびなき國なりとめてたけれど。子死ければなにかはせん。

或上達部中將之時逢召人事。

今はむかし。上達部のまだ中將と申ける内へまいり給ふ道に。法師をとらへてゐて

とて、録イ本補

いきけるを。こはなに法師ぞとはせければ。とし比つかはれて候主をころして候ものなりといひければ。まことに罪をもきわざたたるものにこそ。心うきわざしけるものかなと。なにとなくうちいひてすぎ給けるに。この法師あかきまなこなる目のゆゑ、まじあしげなるして。にらみあげたりければ。よしなきことをもいひてけるかなと。けうとく思召て過給ひけるに。また男をからめていきけるに。こはなにと志たる物ぞとこりずまにとひければ。人の家に入られて候つる。おとこはにげて罷りぬれば。是を捕へてまかることいひければ。別のともなきものにこそとて。そのとらへたる人をみしりたればこひゆるしてやり給。大かたこの心さま志て人のかなしきめをみるに志たがひてたすけ給ひける人にて。はじめの法師もことよろしくばゆるさんとてとひ給けるに。つみのことのほかにもおもければさの給けるを。法しはやすからずおもひける。さてほどなく大赦のあつければ法しもゆりにけり。さて月あかりける夜。みな人はまかであるはねいりなどしけるを。この中將月にめてたゝずみ給ひけるほどに。ものゝつるぢをこえておひけるとみ給ほどに。うしろよりかきすくひてとぶやうにして出ぬ。あきれまどひていかにもおぼしわかぬほどに。あそろしげなるものきつどひて。はるかなる山のけはしくあそろしきところへるて行て。柴のあみたるやうなる物をたかくつくりたるにさしをきて。さかちら

も、原作は、據一本改

する人はかくぞする。やすき事もひとへにつみをもくいひなしてかなしき目をみせしかば。そのたうにあぶりころさむずるごとて。火を山のごとくたきければ。夢などをみるこゝち志て。わかきびはなるほどにてはあり物おぼえ給はず。あつさはただあつに成て。たうかた時に志ぬべくおぼえ給けるに。山のうへよりゆしきかぶら矢を射をせせければ。あるものどもこはいかにときはぎけるほどに。雨のふるやうにいければ。これら志ばしこの方よりも射けれど。あなたには人のかずおほくえいあふべくもなかりけるにや。火のゆくゑも志らず射ちらされてにげていにけり。そのあり男ひとりいできて。いかにおそろしくおぼしめしつらん。をのれはその月のその日からめられてまかりしを。御とくにゆるされて世にうれしく。御恩むくひまいらせばやと思候つるに。法師のことはあしく仰られたりとて。日比何まいらせつるを見て候ほどに。つげまいらせばやと思ひながら。我身かくて候へばとおもひつるほどに。あからさまに「は」きとたちはなれまいらせ候はず。かく候つればつるぢをこえて出候つるにあひまいらせ候つれども。そこにてとりまいらせ候は。殿も御疵などもや候はんずらんとおもひて。爰にてかくいはらひてとりまいらせ候つるなりとて。それより馬にかきのせ申て。たしかにもとのところへをくり申てんけり。ほのくくとあくるほどにぞかへり給ひける。年おとなになり給てかゝることこそ

は、據一本補候は、す、原作候一本改

あひたりしかと。人にかたり給けるなり。四條大納言(時)のと申はまことやらん。陽成院妖物の事。

今はむかし。陽成院ありあさせ給ての御所は。大宮よりは北。西洞院よりはにし。あぶらの小路よりは東にてなんありける。大なる池のありける釣殿に番のものねたりければ。夜中ばかりにほそくとある手にて。このあそこがかほをそとくなてけり。けむづかしとおもひて。太刀をぬきてかた手にてつかみたりければ。淺黄の上下きたる叟の。とのほかにものわびしげなるがいふやう。われはこれむかし住しぬしなり。うら島が子が弟なり。いにしへよりこのところにすみて千二百餘年になるなり。ねがはくはゆるし給へ。こゝに社をたていひ給へ。さらばいかにまもりたてまつらんといひけるを。わが心ひとつにてはかなはじ。このよしを院へ申てこそはといひければ。にくき男のいひごとかなとて。三度上さまへけあげくまで。なへなへくたくとなして。あつる所を口をあきてくひたりけり。なべての人ほどなる男とみるほどに。おびたゝまゝく大きになりて。此おとこを一くちにくひてけり。

水無瀬殿むさゝびの事。

後鳥羽院御時。水無瀬殿によるく山よりからかさほどの物ひかりて。御堂へとび入事侍りけり。西おもて北おもてのものども。めんくこれを見あらはして高名

大なる池、イ本此上有そこは靈ありむ所にてなんありける十五字

しぶとげ、或當
作けうとげ

せんと心にかけて用心し侍りけれ共。むなしくてのみ過けるに。ある夜景がたたひひとり中島にねて待けるに。例のひかり物やまより池のうへをとびけるに。おきんも心もとなくてあふのきにながらよく引て射たりければ。手ごたへして池へおち入物ありけり。そのうち人々につけて火をともしてめんくみければ。ゆゑまゝ大なるむさゝびの。年ふり毛などもはげ。まぶとげなるにてぞ侍りける。

一條棧敷屋鬼の事。

いまはむかし。一條棧敷屋にある男。とまりてけいせいとふしたりけるに。夜中ばかりに風吹雨ふりてすさまじかりけるに。大路に諸行無常と詠じて過るものあり。なにものならんと思ひて。まとみを少をしわけてみければ。長は軒とひとしくて馬のかしらなる鬼なりけり。おそろしさにまとみをかけておくのかたへ入たれば。此鬼格子をわけてかほをさし入て。よく御覽じつるなくと申ければ。たちをぬきていらばきらんとかまへて。女をばそばにきて待けるに。よく御らんせよといひていにけり。百鬼夜行にてあるやらんとおそろしかりける。それより一條の棧敷には又もとまらざりけるとなん。

緒、イ本作綬

宇治拾遺物語卷第十三

上緒主得金事。

今はむかし。兵衛佐なる人ありけり。冠のあげをのながしければ。世の人あげをのぬしとなんつけたりける。西の八條と京極との島の中にあやしの小家あり。そのまへを行ほどに夕だちのまたれば。この家に馬よりおりていりぬ。みれば女ひとりあり。馬を引入て夕立をすすとて。ひらなる小辛積のやうなる石のあるに尻をうちかけてゐたり。小石をもちてこの石を手まさぐりにたゞきゐたれば。うたれてくぼみたるところをみれば金色になりぬ。希有のことかなとおもひて。はげたるところに土をぬりかくして女にとふやう。この石はなぞの石ぞ。女のいふやう。何の石にか侍らん。むかしよりかくて侍るなり。昔長者の家なむ侍りける。この家は倉どものおとにて候なりと。誠にみれば大なる石への石どもあり。さてその尻かけさせ給へる石は。その倉のあとをはたけにつくるとてうねほる間に。土のまたより掘出されて侍なり。それがかくやのうちに侍れば。かきのけんと思侍れど女はちからよはし。かきのくべきやうもなければ。にくむかくてをきて侍るなりといひければ。われこのいしとりてん。後に目ぐせあるものもぞみつくとおもひて。女にいふやう。この石我とりてんよといひければ。よき事に侍りといひければ。そのへんにまりた

る下人のむな車をかりにやりてつみていんとするほどに。綿絹をぬぎて。たゞにとらんがつみえがましければこの女にとらせつ。心もえてさはぎまどふ。この石は女どもこそよしなし物と思ひたれども。我家にもていきてつかふべきやうのあるなり。さればたゞにとらんがつみえがましければ。かく衣をとらすなりといふ。おもひのけぬことなり。ふよしの石のかはりに。いみじきたからのをんぞのわたのいみじき給らん物とはあなとおそろしといひて。さほのあるにかけておがむ。さて車にかきのせて家にかへりて。うちかぎくうりて物どもをかふに。米錢絹綾などあまたにうりえて。おびたゞしき徳人になりぬれば。にしの四條よりは北。皇嘉門よりは西。人もすまぬうきのゆふくとしたる一町ばかりなるうきあり。そこは買ともあつたひもせじとおもひてたゞすこしにかひつ。ぬしはふよしのうきなれば。島にもつくらるまじ家もえたつまじ。やくなき所と思ふに。あたすこしにてもかはんといふ人を。いみじきすきものとおもひてうりつ。あげをのぬしこのうきをかひとりと津の國に行ぬ。船四五さうばかりぐして難波わたりにいぬ。酒粥などおほくまうけて。鎌又おほうまうけたり。行かふ人をまねきあつめて。この酒粥まいれといひて。そのかはりにこのあしかりてすこしづゝをさせよといひければ。よろこびてあつまりて。四五束十束二三十束などかりてとらす。かくのごとく三四口からすれば。山のご

た、原作い、據一本改

借、イ本作かし

定、原作員、今從イ本

とくかりつ。舟十艘ばかりにつみ京へのぼる。酒おほくまうけたれば。のぼるまゝにこの下人どもにたゞにかむよりは。このつなでひけといひければ。この酒をのみつゝ綱手を引て。いとく賀茂河尻に引つけつ。それより車借に物をとらせつ。そのあしにてこのうきにしきて下人どもをやとひて。其うへにつちはねかけて。家をおもふまゝにつくりてけり。南の町は大納言源定といひける人の家。北の町は此あげをのぬし定のうめてつくりける家なり。それを此さだの大納言のかひとりとて。二町にはなしたる也けり。それはゆる此比の西宮なり。かくいふ女の家なりける金の石をとりて。それを本たいとして作りたりける也。

元輔落馬の事。

今はむかし。哥よみの元輔。くらのすけに成てかも祭の使しけるに。一條大路わたりけるほどに。殿上人の車おほくならべたて、物みける前わたるほどに。おいらかにてはわたらで。人み給にとおもひて馬をいたくあをりければ。馬くるひておちぬ。年老たるもの、頭をさかさまにておちぬ。公達あないみじとみるほどに。いとくおきぬればかぶりぬげにけり。もとよりつゆなし。たゞほとぎをかつぎたるやうにてなんありける。馬ぞひ手まどひをしてかぶりをとりてきせさせすれど。うしろさまにかきて。あなさはがしまばしまて。公達にきこゆべき事ありとて。殿上人どもの

車の前にあゆみよる。日のさしたるに頭きら／＼としていみじうみぐるし。大路の
もの市をなしてわらひのゝ志ることかぎりなし。車さじきのものどもわらひのゝし
るに。一の車のかたさまにあゆみよりていふやう。公達この馬よりあちてかぶりお
としたるをば。おこなりとやおもひ給ふ。しか思ひ給まじ。そのゆへは心ばせある人
だにも物につまづきたをるゝことはつねのことなり。まして馬は心あるものにあ
ず。この大路はいみぢう石たかし。馬はくちをはりたればあゆまんとおもふだにあ
ゆまれず。とひきかう引くるめかせばたをれんとす。馬をあしとおもふべきにあ
ず。から鞍はさらなるあぶみのかくうべくもあらず。それに馬はいたくつまづけは
あぢぬ。それわろからず。またかぶりのあつることは物していふものにあらず。かみ
をよくかき入たるにとらへらるゝものなり。それにびんはうせわたればひたぶるに
なし。さればあちんことかぶりうらむべきやうなし。又例なきにあらず。何のおとい
は大嘗會の御禊にあつ。なにの中納言はそのときの行幸にあつ。かくのごとく例
もかんがへやるべからず。志かれれば案内もまり給はぬこのごろのわかき君達わらひ
たまふべきにあらず。わらひたまはゝあこなるべしとて。くるまごととに手をおりつ
つかぞへていひきかす。かくのごとくいひはてゝかぶりもてこといひてなん。とり
てさし入ける。その時にどよみてわらひのゝしることかぎりなし。かぶりせさすと

わらはする、恐
當作わらへする

日も、據イ本補

人、イ本此上有
供字、恐是

きつ、原作まへ、
今從イ本

てよりて馬ぞひのいはく。おち給すなはちかぶりをたてまつらて。などかくよしな
しごととは仰らるゝごととひければ。志れごとないひそ。かく道理をいひきかせたら
ばこそ此公達は後／＼にもわらはざらめ。さらすばくちさがなき君達は。ながくわ
らひなんものをやとぞいひける。人わらはすることやくにするなりけり。

俊宣迷神にあふ事。

いまはむかし。三條院の八幡の行幸に。左京屬にてくはのとしのぶといふものゝ供奉
したりけるに。長岡に寺戸といふところのほどいきけるに。人どものこの邊にはま
よひ神あんなる邊ぞかしといひつゝわたるほどに。としのぶもさきくはといひて行
程に。過もやらて日もやう／＼さがれば。今は山さきのわたりには行つきぬべき
に。あやしう同じ長岡の邊をすぎて。あとくに河のつらをすぐと思へば又寺戸のき
しをのぼる。てら戸過てまたゆきもてゆきて。あとくにがはのつらにきてわたるぞ
とおもへば。又すこしかつら河をわたる。やう／＼日もくれがたになりぬ。まりさき
みれば。人ひとりもみえずなりぬ。まりさきにはるかにうちつゝきたる人もみえず。
よの更ぬれば寺戸のにしかたなる板屋の軒にありて。よをあかしてつとめておも
へば。われは左京の官人なり。九條にてとまるべきに。かうまできつらんきはまりて
よしなし。それにおなじところをよ一よめぐりありきけるは。九條の程よりまよは

かし神のつきて。いでくるをまらてかうしてけるなめりとおもひてなん。西京の家にはかへり來りける。としのぶがまさしうかたりしことなり。

加めを買てはなつ事。

むかし。天竺の人たからをかはんために。錢五十貫を子にもたせてやる。大なる河のはたをゆくに。舟にのりたる人あり。舟のかたをみやれば舟よりかめくびをさしいだしたり。錢もちたる人たちとまりて。この龜をば何のれうぞとへば。ころして物にせんずるといふ。そのかめかはんといへば。この舟の人はく。いみじきたいせつの事ありてまうけたるかめなれば。いみじきあたひなり共うるまじきよしをいへば。なをあながちに手をすりて。この五十貫の錢にてかめをかひとりてはなちつ。心にあもふやう。親のたから買にとなりの國へやりつる錢をかめにかへてやみぬれば。あやいかにはらだち給はんずらむ。さりてまたあやのもといかてあるべきにあらねば。親のもとへかへり行に。道に人のゐていふやう。こゝにかめうりつる人は。この志ものわたりにて舟うちかへしてとかたるを聞て。あやの家にかへりゆきて。錢はかめにかへつるよしかたらんと思ほどに。あやのいふやう。何とて此錢をばかへしあこせたるぞとへば。子の云。さることなし。その錢にてはまかへかめにかへてゆるしつれば。ろのよしを申さむとてまいりつるなりといへば。親のいふや

と、據一本補

ひきのまき人、
營作まきびのまき
備也、即吉備眞吉
右大臣、至正二位
年號

う。くろき衣きたる人おなじやうなるが五人。をのく十貫づもちてきたりつる。これを成とてみせければ。この錢いまだぬれながらあり。はやかひてはなしつるかめの。その錢河に落入をみて。とりもちて親のもとに子の歸らぬさきにやりけるなり。

夢買人の事。

むかし備中國に郡司ありけり。それが子にひきのまき人といふ有けり。わかき男にてありけるとき夢をみたりければ。あはせさせんとて夢ときの女のもとに行て。夢あはせてのち物語してゐたるほどに。人々あまたこゑしてくなり。國守の御子の太郎君のおはするなりけり。年は十七八ばかりの男にておはしけり。心ばへはまらさかたちはきよげなり。人四五人はかりぐしたり。これや夢ときの女のもととへば。御ともの侍これにて候といひてくれば。まき人は上の方の内に入て部屋のあるに入て。あなよりのぞきてみれば。この君入給て夢をまかへ見つるなり。いかなるぞとてかたりきかす。女きよてよにいみじき夢なり。かならず大臣までなりあがり給べきなり。返々めでたく御覽じて候。あなかしこく人にかたり給なと申ければ。この君うれしがりて衣をぬぎて女にとらせてかへりぬ。そのおりまき人部屋より出て女にいふやう。夢はとるといふ事のあるなり。この君の御夢われらにとらせたまへ。國

守は四年過ぬればかへりのほりぬ。われはくに人なればいつもながらへてあらんずるうへに。郡司の子にてあれば我をこそ大事に思はめといへば。女のためはんまゝに侍べし。さらばおはしつる君のごとくにして入給て。そのかたられつる夢をつゆもたがはずかたりたまへといへば。まき人よろこびてかの君のありつるやうにいりきて夢がたりをしたれば。女おなじやうにいふ。まき人いとうれしく思て衣をぬぎてとらせてさりぬ。そのうち文をならひよみたれば。たゞとをりにとをりて才ある人になりぬ。大やけきこしめして心みらるゝに。まことに才ふかくありければ。もろこしへ物よくくならへとてつかはして。久しくもろこしにありて。さまぐの事どもならひつたへて歸りたりければ。御門かしこきものにおぼしめして。次第になしあげ給て大臣までになされにけり。されば夢とることにはげにかしこき事なり。かの夢とられたりし備中守子は司もなきものにてやみにけり。夢をとられざらましければ大臣までも成なまし。さればゆめを人にきかすまじきなりといひつたへけり。

大井光遠妹強力の事。

いまはむかし。甲斐國の相撲大井光遠はひきふとにいかめしく。ちからつよく足はやく。みめことがらよりはじめていみじかりし相撲なり。それが妹に年廿六七ばかりなる女のみめことがらけはひもよく。すがたもほそやかなるありけり。それは

のきたる家にすみけるに。それが門に人にをはれたる男の刀をぬきてはしり入て。この女をまぢにとりて腹に刀をさしあてゝ居ぬ。人はしり行て。せうとの光遠に姫君は質にとられ給ぬとつげければ。光遠がいふやう。そのおもとは薩廣の氏長ばかりこそはまぢにとらめといひて。なにとなくてゐたれば。つげつるおのこあやしとおもひて。たちかへりて物よりのぞけば。九月ばかりの事なれば。薄色の衣一重に紅葉の袴をきで口おほひしてゐたり。男は大なるおのこのおそろしげなるが大の刀をさかてにとりて。腹にさしあてゝあしをもてうしろよりいだきてゐたり。この姫君左の手してはかほをふたぎてなく。右の手しては前に矢のゝあらづくりたるが二三十ばかりあるをとりて。手ずさみに節のもとを指にて板敷にをしあてゝにじれば。朽木のやはらかなるをしくたくやうにくだくるを。このぬす人目をつけてみるにあさましくなりぬ。いみじからんせうとのぬしかな。槌をもちて打くたくともかくはあらし。ゆゝしかりけるちからかな。このやうにてはたいいまのまにわれはとりくだかれぬべし。むやくなりにげなんと思て。人めをはかりてとびいでゝにげはしる。時にすゑに人どもはしりあひてとらへつ。まばりて光遠がもとへぐして行ぬ。光遠いかにおもひて逃つるぞとへば。申やう。大なる矢筈の節を朽木なんどのやうにをしくだき給つるを。あさましと思ておそろしさににげ候つる也と申せば。光遠

うちわらひて。いかなりともその御もとほよもつかれし。つかんとせん手をとりにて。かひねぢてかみさまへつかば。かたのほねはかみさまへいで、ねぢられなまし。かしくをのれがかいなぬかれまし。宿世ありて御もとほねぢりけるなり。光遠だにもおれをばてごろしにころしてん。かいなをばねぢて腹むねをふまむにをのれはいきてんや。それにかの御もとのちからは光遠二人ばかりあはせたるちからにておはする物を。さこそほそやかに女めかしくおはすれど。光遠が手たはぶれするにとらへたるうでをとらへられぬれば。手ひろごりてゆるしつべき物を。あはれをのこゝにておらましかば。あふかたきなくてぞあままし。くちあしく女にてあるといふをきくに。このぬす人志ぬべきこゝちす。女とおもひていみじき志ちをとりたると思ひてあれども其儀はなし。をれをば殺すべけれども。御もとのしぬべくばこそ殺さめ。おれ志ぬべかりけるにかしこうとくに。げてのきたるよ。大なる鹿の角を膝にあてて。ちいさき唐木のほそきなどを折やうにある物をとて追放てやりける。

或唐人女のひつじにうまれたるを不知して殺事。

今はむかし。唐になにとかやいふ司になりて下らんとする物侍き。名をばけいそくといふ。それがむすめ一人ありけり。ならびなくあかしげなりし。十餘歳にしてうせにけり。父母なきかなしむことかぎりなし。さて二年ばかりありてる中にくだりて。

殺すべけれども、原作まけれども、據イ本改

またしき一家の類はらからあつめて。國へくだるべきよしをいひ侍らんとするに。市より羊を買とりて。この人々にくはせんとするに。その母が夢にみるやう。うせにしむすめ青き衣をきて。白きさいでしてかしらをつゝみて。髪に玉のかんざし一よそひをさしてきたり。いきたりしおりにかはらず。母にいふやう。我いきて侍しときに。父母われをかなしう志給て。よろづをまかせ給へりしかば。親に申さて物をとりつかひ。又人にもとらせ侍き。ぬすみにはあらねど申さてせし罪によりて。いま羊の身をうけたり。きたりてそのほうをつくし侍らんとす。あすまさにくび志ろき羊になりてころされんとす。ねがはくは我命をゆるし給へといふとみつ。おどろきてつとめて食物する所をみれば。まことに青きひつじのくび志ろきあり。はぎせなかまろくて頭にふたつのまだらあり。つねの人のかんざしさを所なり。母これを見てまばしこの羊なころしそ。殿歸おはしての後にあんない申てゆるさんずるぞといふに。守殿物より歸て。など人々參物はちそきとてむづかる。されば此羊をてうま侍てよそはんとするに。うへの御前まばしなころしそ。殿に申てゆるさんとてといめ給へばなどいへば。腹立てひが事なせそとて。ころさんとてつりつけたるに。此まらう人どもきてみれば。いとあかしげにてかほよき女子の十餘歳ばかりなるを。かみになはつけてつりつけたり。この女子のいふやう。わらははこの守の女にて侍し

が羊になりて侍也。けふの命を御まへだちたすけ給へといふに。この人くゝあなかしこくゆめくゝころすな。申てこんとてゆくほどに。このくひ物する人は例の羊とみゆ。さだめてをそしと腹立なんとてうちころしつ。その羊のなく聲此ころすものゝみゝにはたゞつねの羊のなくこゑなり。さてひつじをころしていりやき。さまさまにきたりけれど。このまらう人どもは物もくはでかへりにけり。あやしがりて人くゝにとへば。まかゝなりとはじめよりかたりければ。かなしみてまどひけるほどに。病になりてまにへければ。る中にもくだり侍らずなりにけり。

出雲寺別當の鯨に成たるをしりながらころして食事。

今はむかし。王城の北かみつ上いづも寺といふ寺たてゝより後年久しくなりて。御堂もかたぶきてはかゝりまう修理する人もなし。このちかう別當侍き。その名をば上かくとなんいひける。これぞさきの別當の子に侍ける。あひつぎつゝ妻子もたる法師ぞあり侍ける。いよく寺はこぼれてあれ侍ける。さるは傳教大師のもろこしにて天台宗たてん所をえらび給けるに。この寺の所をば繪にかきてつかはしける。高雄比叡山かむつ寺と三つの中にいづれかよかるべきとあれば。此寺のちは人にすぐれてめでたけれど。僧なんらうがはしかるべきとありければ。それによりてといめたる所なり。いとやんどなき所なれど。いかなるにか。さなりはてゝわろく侍なり。

り。それ以上かくが夢にみるやう。我ちゝの前別當いみぢう老て杖つきていできていふやう。あさて未時に大風ふきてこの寺たをれなんとす。まかるに我この寺の瓦の下に三尺ばかりの鯨にてなん。行方なく水もすくなくせばくらくらきところありて。あさましうくるしき目をなんみる。寺たうればこぼれて庭にはひありかば。童部打ころまてんとす。その時なんぢがまへにゆかんとす。童部にうたせずして賀茂河にはなちてよ。さらばひろきめもみん。大水に行てたのもしくなんあるべきといふ。夢さめてかゝる夢をこそみつれとかたれば。いかなる事にかといひて日暮ぬ。その日になりて午のときのすゑより俄にそらかきくもりて。木をおり家を破風いできぬ。人々あはてゝ家どもつころひさはげども。風いよく吹増りて。村里の家どもみな吹たをし。野山の竹木たをれおれぬ。この寺まことに未時はかりに吹たうされぬ。はしらおれ棟くづれてすぢなし。さるほどにうら板の中にとし比のあま水たまりけるに。大なる魚どもおほかり。そのわたりの物ども桶をさげてみなかきいれさげぐほどに。三尺ばかりなる鯨のふたゝとまて庭にけひ出たり。夢のごとく上覺が前にきぬるを。上かく思ひもあへず魚の大にたのしげなるにふけりて。かな杖の大なるをもちて頭につきたてゝ。我太郎童部をよびて。これといひければ。魚大にてうちとられねば。草かり鎌といふものをもちてあざとをかききりて。物につゝませて

つ、據一本補

家にもていりぬ。さてこと魚などまたためて桶に入て。女どもにいたしかせて我坊に歸りたれば。妻の女。この鯰は夢にみえける魚にこそあめれ。なにしにころし給へるぞと心うがれど。こと童部のころさましもあなじことあべなん。我はなどいひてこと人ませず。太郎次郎童など食たらんをぞ。故御房はうれしとおぼさむとて。つぶくときり入て煮て食て。あやしういかなるにか。こと鯰よりもあぢはひのよきは。故御房のまゝむらなればよきなめり。これが汁すゝれなどあひして食けるほどに。大なる骨喉にたてし。系うくといひけるほどに。とみに出ざりければ。くつうしてつゝるに死侍り。妻はゆゝしがりて鯰をばくはずなりにけりとなん。

念佛僧魔往生事。

むかし。美濃國伊吹山に久く行ひける聖ありけり。阿彌隨佛よりほかの事志らず。他事なく念佛申てぞ年へにける。夜深く佛の御前に念佛申てゐたるに。空に聲ありてつげていはく。なんぢねんごろにわれをたのめり。今は念佛のかずおほくつもりたれば。あすの未のときにかならずくきたりて迎へし。ゆめく念佛おこたるべからずといふ。その聲をきいてかぎりなくねんごろに念佛申て。水をあみ香をたき花をちらして。弟子どもに念佛もるともに申させて西にむかひてゐたり。やうくひらめく様にする物あり。手をすりて念佛申てみれば。佛の御身より金色の光をはな

き、恐當作く

ちてさし入たり。秋の月の雲まよりあらはれたるがごとし。さまぐのはなをふらし白毫の光聖の身をてらす。このとき聖尻をさかさまになしておがみ入。ザラのをもきれぬべし。観音蓮臺をさしあげて聖の前により給に。紫雲あつきたなびき。聖はひよりて蓮臺にのりぬ。さて西のかたへさり給ぬ。さて坊にのこれる弟子共なくなくたうとがりて。聖の後世をとぶらひけり。かくて七八日過て後坊の下す法師原念佛の僧に湯わかしてあむせ奉らんとて。木こりに奥山に入たりけるに。はるかなる瀧にさしおほひたる栢の木あり。その木の梢にさけぶ聲しけり。あやしみてみあげたれば。法師をはだかになして梢にしばらくついたり。木のぼりよくする法師のぼりてみれば。極樂へむかへられ給し我師の聖をかづらにてまばりつけてをきたり。この法しいかに我が師はかゝる目をば御覽するぞとて。よりに繩をときければ。いまむかへんずるぞ其程まばしかくてゐたれとて。佛のおはしましをば。なにしかくときゆるすぞといひけれども。よりにときければ。あみだ佛は「われをころす人ありをうくとぞさけびける。されども法師原あまたのぼりてときおろして。坊へぐして行たれば。弟子ども心うき事なりと歎まどひけり。聖は人心もなくて二日三日ばかりありてしにけり。智慧なき聖はかく天狗にあざむかれけるなり。

慈覺大師入三續續城事。

は、一本元、當行

むかし。慈覺大師佛法をならひ傳へむとて。もろこしへわたり給ておはしけるほどに。會昌年中に唐武宗佛法をほろぼして。堂塔をこぼち僧尼をとらへてうしなひ。あるひは還俗せしめ給亂にあひ給へり。大師をもとらへむとしけるほどに。にげてある堂のうちへ入給ぬ。その使堂へ入てさがしける間。大師すべきかたなくて佛の中ににげ入て不動を念給けるほどに。つかひもとめけるに。あたらしき不動尊佛の御中におはしける。それあやしがりていだきおろしてみるに。大師もとのすがたになり給ぬ。使おどろきて御門にこのよし奏す。御門仰られけるは。他國の聖也。すみやかに追はなつべしとおほせければはなちつ。大師喜て他國へ送給に。遙なる山へだてし人の家あり。つるぢたかくつきめぐらして一の門あり。そこに人たてり。悦をなしてとひ給に。これはひとり長者の家なり。わ僧は何人ぞとふ。こたへていはく。日本國より佛法ならひつたへむとてわたれる僧也。志かるにかくあさましきみだれにあひて。まばしかくれてあらんと思なりといふに。これはおぼるげに人のきたらぬところなり。まばらくこゝにおはして。世まづまりてのち出て佛法もならひ給へといへば。大師喜をなして内へ入ぬれば。門をさしかためておくのかたに入に。尻に立て行てみれば。さまぐのやどもつくりつゞけて人おほくさはがし。かたはらなる所にすへつ。さて佛法ならひつべき所やあるとみありき給に。佛經僧侶等す

べて見えず。うしろのかた山によりて一宅あり。よりてきけば人のうめくこゑあまたす。あやしめて垣のひまよりみ給へば。人をまばりて上よりつりさげて。下に盡共をすへて血をたらしいる。あさましくてゆへをとへ共いらへもせず。大にあやしくて又こと所をきけば。同じによ音す。のぞきてみれば。色あさましう青びれたるものどもの。やせげんじたるあまたふせり。一人をまねきよせて。これはいかなる事ぞ。かやうにたへがたげにはいかであるぞとへば。木のきれをもちてほそきかいなをさしいて。土に書を見れば。これは顯顯城也。これへ來たる人にはまづ物いはぬ薬をくはせて。次にこゆる薬をくはす。さてそのうち高き所につりさげて。所ぐをさし切て血をあやして。その血にてかうけつをそめて賣侍なり。これを去らずしてかゝる目をみるなり。食物の中に胡麻のやうにてくるばみたる物あり。それは物いはぬ薬なり。さる物まいらせたらば食まねをきて給へ。さて人の物申さば。うめきのみうめき給へ。さて後にいかにもして送べきまたくをしてにげ給へ。門はかたくさしてをぼるげにて送べきやうなしと。くはしくをしへければ。ありつる居所に歸居給ぬ。さるほどに人くひ物もちてきたり。をしへつるやうにけ色のある物中にあり。くふやうにしてふところにいれてのちにすてつ。人きたりて物をとへば。うめきて物ものたまはず。いまはしおほせたりと思て。肥べき薬をさまぐにしてく

はすれば。おなじくくふまねしてくはず。人のたちさりたるひまに良方にむかひて。我山の三寶たすけたまへと手をすりて祈請し給に。大なる犬一疋いできて。大師の御袖をくひてひく。やうありとおぼえて引かたに出給に思かけぬ水門のあるより引出しつ。外に出ぬれば犬はうせにけり。今はかうとおぼして足のむきたるかたへはしり給ふ。はるかに山をこえて人里あり。人あひてこれはいづかたよりはおはする人のかくはしり給ぞとひければ。かゝるところへ行たりつるが。逆てまかるなりとの給に。あはれあさましかりける事かな。それは續續城也。かしこへ行ぬる人のかへる事なし。おぼろげならぬ佛の御たすけならては出べきやうなし。あはれ貴くおはしける人かなとておがみてさりぬ。それよりいよくにげのきて又都へ入て忍ておはするに。會昌六年に武宗崩し給ぬ。翌年大中元年宣宗位につき給て。佛法ほろぼすことやみぬれば。おもひのごとく佛法ならひ給て。十年といふに日本へかへり給て。眞言をひろめ給ひけりとなん。

渡天僧入穴事。

今はむかし。唐にありける僧の天竺にわたりて。他事にあらずたゞ物のゆかしければ。物見にまありきければ所々みゆきけり。あるかた山に大なる穴あり。牛の在けるがこの穴に入けるをみてゆかしくおぼえければ。牛の行につきて僧も入けり。

ならぬ、原作の、
據一本改

はるかに行てあかき所へ出ぬ。見まはせばあらぬ世界とおぼえて。見も知らぬはなの色いみじきがさきみだれたり。牛此はなを食けり。心みにこの花を一ふさとりて食たりければ。うまきこと天の甘露もかくあらんとおぼえて。目出かりけるまゝにおほく食たりければ。たゞ肥にこへふとりけり。心えずおそろしく思て。ありつる穴のかたへかへり行に。はじめはやすくとをりつる穴。身のふとく成てせばくおぼえて。やうくとして穴の口までは出たれども。をいでずしてたへがたきことかざりなし。まへをとる人にこれたすけよとよばはりけれども。耳にきくいる人もあるし。たすくる人もなかりけり。人の目にもなにとみえけるやらんふしぎなり。日比かさなりて死ぬ。後は石になりて穴の口に頭をさし出したるやうにてなんありける。玄非三藏天竺にわたりたまひたりける日記に。此よしあるされたり。

寂照上人飛鉢事。

今はむかし。三河入道寂照といふ人もろこしにわたりてのち。唐の王やんごとなき聖どもをめしあつめて。堂をかざりて僧膳をまうけて經を講じ給けるに。王の給はく。今日の齋筵は手ながの役あるべからず。をのく我鉢を飛せやりて物はうくべしとの給。その心は日本僧を試んがためなり。さて諸僧一座より次第に鉢をとばせて物をうく。三河入道未座に着たり。その番にあたりて鉢をもちてたんとす。いか

やん事、原作心
事、據イ本改

て鉢をやりてこそうけめとて人々せいしとめけり。寂昭申けるは。鉢を飛する事は別の法をおこなひてする態なり。まかるに寂昭いまだこの法を傳行はず。日本國にをいてもこの法行ふ人ありけれど。末世にはおこなふ人なし。いかでか飛さんといひてゐたるに。日本の聖鉢をそしくとせめければ。日本の方に向て祈念して云。我國の三寶神祇たすけ給へ。はぢみせ給なと念じ入るるほどに。鉢こまつぶりのやうにくるめきて。唐の僧の鉢よりもはやくとびて物をうけてかへりぬ。そのとき上よりはじめて。やん事なき人なりとて拜けるとぞ中つたへたる。

清瀧川聖の事。

いまはむかし。清瀧川のおくに柴の庵をつくりておこなふ僧ありけり。水ほしき時は水瓶を飛して汲にやりてのみけり。年經にければかばかりの行者はあらじと時々慢心おこりけり。かへりけるほどに。我るたる上さまより水瓶來て水をくむ。いかなる物の又かくはするやらんとそねましくおぼえければ。見あらはさんとおもふほどに。例の水瓶飛來て水を汲て行。そのとき水瓶につきて行てみるに水上に五六十町のぼりて庵みゆ。行てみれば三間ばかりなる庵あり。持佛堂別にいみじく造たり。まことにいみじう貴とし。物きよくすまひたり。庭に楠の木あり。木の下に行通たるあり。闕伽棚のまたにはながらおほくつもれり。砌にこけむしたり。かみさび

の、據一本補

たることかぎりなし。まどのひまよりのぞけば。机に經おほくまきさしたるなどあり。不斷香のけぶりみちたり。よくみればとし七八十ばかりなる僧の貴げなる。五古をにぎり脇足をしかりて眠るたり。この聖を心みむと思て。やはらよりて火界咒をもちて加持す。火焰にはかにおこりて虚につく。聖眠ながら散杖をとりて香水にさしひたまで四方にそく。そのとき虚の火はきえて我衣に火をつけてたやけにやく。まもの聖大聲をはなちてまどふ時に。上の聖目をみあげて散杖を持て下の聖の頭にそく。そのとき火きえぬ。上の聖のいはく。何のれうにかゝる目をば見ぞととふ。こたへていはく。これは年比河のつらに虚をむすびて行候修行者にて候。このほど水瓶のきて水をくみ候つるときに。いかなる人のおはしますぞと思候て。みあらはしたてまつらんとてまいりたり。ちと心みたてまつらんとて加持しつるなり。御ゆるし候へ。けふよりは御弟子になりて仕侍らんといふに。聖人はなにぞといふぞともおもはぬげにてありけりとぞ。下の聖我ばかりたうとき物はあらじとけふまんの心のありければ。ほとけのにくみて。まさる聖をまうけてあはせられけるなりとぞかたりつたへたる。

優婆曇多弟子の事。

いまはむかし。天づくにほとけの御弟子優婆曇多といふ聖おはしき。如來滅後百年

ばかりありて。其聖に弟子ありき。いかなる心ばへをかみ給たりけん。女人にちかづくことなかれ。女人にちかづけば生死にめぐること車輪のごとしとつねにいさめ給ひければ。弟子の申さく。いかなる事を御らんじて。たゞかやうにうけたまはるぞ。我も證果の身に侍れば。努々女にちかづくことあるべからずと申。餘の弟子共も。この中にはことに貴き人を。いかなればかくの給らんとあやしく思けるほどに。この弟子の僧物へ行とて河をわたりけるとき。女人出来ておなじく渡りけるが。ただ流になかれて。あらかなしわれをたすけたまへあの御房といひければ。師のたまひしことあり。みくにきいれじとおもひけるが。たゞながれにうきしづみながれければ。いとあしくてよりて手をとりて引渡しつ。手のいとまろくふくやかにていとよかりければ。此手をはなしえず。女今手をはづし給へかし。物おそろしきものかなと思たるけしきにていひければ。僧のいはく。先世のちぎりふかきことやらん。きはめてこころざしふかくおもひきこゆ。わが申さんとき給へてんやといひければ。女こたふ。たゞいままぬべかりつるいのちをたすけたまひたれば。いかなることなりともなにしにかはいなみ申さんといひければ。うれしと思て裁すきのおひしげりたる所へ手をとりて。いざ給へとて引れつ。をしふせてたゞ犯におかさんとて。またにはさまりてあるあり。この女をみれば我師の尊者なり。あさましくおも

ひてひきのかんとすれば。優婆囉多またにつよくはさみて。なんのれうにこの老法師をばかくはせたむるぞや。是や汝女犯の心なき證果の聖者なるかとの給ければ。物覺ずはづかしく成て。はさまれたるをのがれんとすれども。すべてつよくはさみてはづさず。さてかくのゝまり給ければ。道行人集りてみる。あさましくはづかしき事かぎりなし。かやうに諸人に見せてのちおき給て。弟子をとらへて寺へおはして。鐘をつき衆會をなして。大衆にこのよしかたり給。人々わらふとかぎりなし。弟子の僧いきたるにもあらず死たるにもあらず覺けり。かくのごとく罪を懺悔してければ阿那含果をえつ。尊者方便をめぐらして弟子をたばかりて佛道に入しめ給けり。

宇治拾遺物語卷第十四

海雲比丘弟子童の事。

いまはむかし。海雲比丘道を行給に。十餘歳ばかりなる童子道に逢ぬ。比丘童に問ていはく。何のれうの童ぞとの給ふ。童こたへていはく。たゞ道まかるものにて候といふ。比丘云。汝は法花經はよみたりやとへば。童のいはく。法花經と申らん物こそいまだ名をだにもき候はねと申。比丘またいはく。さらば我房にぐして行て法花

海雲比丘、蓋文
殊別稱、猶以彌
陀稱寶花比丘

經をしへんとの給へば。童仰にまたがふべしと申て比丘の御供に行。五臺山の房に行つきて法花經をしへ給。經をならふほどに。小僧常にきたりて物がたりを申。誰人と去らず。比丘の給。つねにきたる小大徳をば童は去りたりやと。童去らずと申。比丘の云。これこそこの山にすみ給文珠よ。我にものがたりしに來給なりとかやうにをしへたまへども。童は文珠といふ事も去らず候也。さればなにも思奉らず。比丘童にの給。汝ゆめく女人に近づくことなかれ。あたりを拂てなることなかれと。童物へ行ほどに。あし毛なる馬にのりたる女人の。いみじくけまやうしてうつくしきが道にあひぬ。この女のいはく。われこの馬の口引てたべ。道のゆゑまゝくあしくて落ぬべくおぼゆるにといひけれども。童耳にもきいれずして行に。此馬あらだちて女さかさまにあちぬ。うらみていはく。われをたすけよ。すでに死ぬべくおぼゆるなりといひけれども。なをみよにき入らず。我師の女人のかたはらへよることなかれとの給しにともひて。五臺山へかへりて女のありつるやうを比丘にかたり申て。されどもみよにもき入らずして歸りぬと申ければ。いみじくもたたり。その女は文珠化して汝が心をみ給にこそあるなれとてほめ給けり。さる程に童は法花經を一部よみ終にけり。其時比丘の給はく。汝法花經をよみはてぬ。今は法師になりて受戒すべしとて法師になされぬ。受戒をばさづくべからず。東京の禪定寺にいまする倫

い、原作に、據
イ本改

法師と申人。この比おほやけの宣旨をかうぶりて受戒を行給人なり。その人のもとへ行て受べきなり。但今はなんぢをみるまじきことのあるなりとてなき給ことかぎりなし。童の受戒仕ては則歸まいり候べし。いかにおぼしめしてかくはおほせ候ぞと。又いかなればかくなかせ給ぞと申せば。たくなしきことの有なりとてなき給。さて童に戒師のもとに行たらんに。いづかたより來る人ぞととは。清冷山の海雲比丘のもとよりと申べきなりとをしへ給て。なくくみをくり給ぬ。童仰にまたがひて倫法師のもとに行て。受戒すべきよし申ければ。あんののごとくいづかたより來る人ぞと問ければ。をしへ給つるやう申ければ。倫法師おどろきて。たうときことなりとて禮拜していはく。五臺山には文珠のかぎり住給所なり。汝沙彌は海雲比丘の善知識にあひて。文珠をよくおがみたてまつりけるにこそありけれとて。たうとぶ事かぎりなし。さて受戒して五臺山へかへりて。日來るたりつる房の在所をみれば。すべて人の住たるけしきなし。なくくちと山をたづねありけども。つるに在所なし。かれは優婆塞多の弟子の僧かしかけれ共。心よはく女にちかづきけり。これはいとけなけれども。心つよくて女人にちかづかず。かるがゆへに文珠これをかしかし物なれば。教化して佛道に入しめ給なり。さればよの人戒をばやぶるべからず。

寛朝僧正勇力事。

今はむかし。遍照寺僧正寛朝といふ人仁和寺をも志りければ。仁和寺のやぶれたるところ修理せさすとして。番匠どもあまたつどひて作り。日くれて番匠どもをのいでゝのちに。けふの造作はいかほどあたるぞとはんと思て。僧正中ゆひうちして高足太はきて。たゞひとりあゆみ來て。あがるくいどもゆひたるもとにたちまはりて。なま夕暮にみられけるほどに。くろき装束したる男のまぼし引たれて。かほたしかにみえずして。僧正のまへに出來てつゝいゝて。刀をさかさまにぬきてひきかくしたるやうにもてなしてゐたりければ。僧正かれは何ものぞととひけり。おとこかたひざをつきて。わび人に侍り。さむさのたへがたく侍に。そのたてまつりたる御ぞ一二あらし申さんと思給なりといふまゝに。とびかゝらんと思たるけしきなりければ。ことにもあらぬことにこそあんなれ。かくおそろしげにぞとさすとも。たゞこはで。けしからぬゝしの心ざはかなといふまゝに。ちと立めぐりて尻をはたと蹴たれば。蹴らるゝまゝに男かきけちてみえずなりにければ。やはらあゆみかへりて。坊のもちかく行て。人やあるとたかやかによびければ。坊より小法師はしりきにけり。僧正行て火ともしてこよ。こゝにわがきぬはがんとしつる男の。にはかにうせぬるがあやしければみんなと思ふぞ。法師ばらよびぐしてことの給ひければ。小法師はしり歸て御房ひはぎにあはせ給たり。御房だちまゝり給へとよばゝりければ。坊

ち以下二十四字、據イ本補

と、原作も、今従一本、下同

房にありとある僧ども。火ともし太刀さげて七八人十人といてきにけり。いづくにぬす人はさぶらふぞととひければ。こゝにゐたりつるぬすびとの。我きぬをはがむとしつれば。はがれてはさむかりぬべくおぼえて。尻をほうとけたればうせぬるなり。火をたかくともしてかくれおるかともよとの給ひければ。法しばらおかしくも仰らるゝかなとて。火をうちふりつゝかみさまをみるほどに。あがるくいの中におちつまりて。えはたらかぬおとこあり。かしこにこそ人はみえ侍けれ。番匠にやあらんとおもへども。くろき装束したりといひてのぼりてみれば。あがるくいの中におちさまりて。みじろくべきやうもなく。うんしがほつくりてあり。さかてにぬきたりける刀はいまだ持たり。それをみつめて法しばらよりて刀と本どりとかいなとをとりて。ひきあげておろしていでまゝりたり。ぐして坊にかへりて。いまよりのち老法しとてなあなづりそ。いとびんなき事なりといひて。きたりけるきぬの中に綿あつかりけるをぬぎてとらせて。をひいだしてやりてけり。

經頼蛇に逢事。

むかし。經頼といひける相撲の家のかたはらにふる河のありけるが。ふかきふちなるところありけるに。夏その川ちかく木かげのありければ。かたびらばかりきて中ゆひてあしだはきて。またふり杖といふものつき。小葦ひとりともにくしてとかく

ありきけるが。すいまんとしてそのふちのかたはらの木かげにるにけり。淵をくお
 そろしげにてそこもみえず。蘆薦などいふものおひまげりたりけるをみて汀ぢか
 くだりけるに。あなたのきしは六七だんばかりはのきたるらんとみゆるに。水の
 みなぎりてこなたさまにきければ。なにのするにかあらんと思ふほどに。この方の
 汀ぢかくなりて。蛇の頭をさしいてたりければ。このくちなは大ならむかし。とさま
 此のぼらんとするにやとみたりけるほどに。蛇かしらをもたげてつく／＼とまも
 りけり。いかにおもふにかあらんともひて。汀一尺ばかりのきてはたぢかく立て
 見ければ。まばしばかりまもり／＼て頭を引入てけり。さてあなたのきしさまに水
 みなぎるとみけるほどに。またこなたさまに水浪たちてのち。くちなはの尾を汀よ
 りさしあげて。わがたてる方さまにさしよせければ。この蛇おもふやうのあるにこ
 そとて。まかせてみたりければ。なをさしよせて經頼が足を三四返ばかりまとい
 けり。いかにせんずるにかあらんと思てたてるほどに。まといえてきし／＼と引け
 れば。河に引いれんとするにこそありけれとそのおりにまりて。ふみつよりてたて
 りければ。いみじうつよくひくとおもふほどに。はきたるあしだのはをふみおろしつ。
 ひきたをされぬべきをかまへてふみなをりて立れば。つよく引ともあろかなり。引
 とられぬべくおぼゆるを。あしをつよくふみたてければ。かたづらに五六すんばか

くちなは引さし
 て、イ本作蛇の
 切れ引されて

りあしをふみいれてたてりけり。よく引なりともおもふほどに。なはなどのきる／＼や
 うにきる／＼まゝに。水中に血のさつとわきいづるやうにみえければ。きれぬるなり
 けりとして足を引ければ。くちなは引さしてのぼりけり。そのときあしにまとひたる
 尾をひきほどきて。足を水にあらひけれども。蛇のあとうせざりければ。酒にてぞあ
 らふと人のいひければ。酒とりによりてあらひなどしてのちに。従者どもよびて尾
 のかたを引あげさせたりければ。大きなりなどもあるか也。切くちの大さわたり一
 尺ばかり有らんとぞみえける。頭のかたのきれをみせにやりたりければ。あなたの
 きしに大なる木の根の有けるに。頭のかたをあまたかへりまとひて。尾をさしおこ
 して足をまとひて引なりけり。力のおとりて中よりきれにけるなめり。我身のきる
 るをもあらず引けんあさましき事なりかし。其後くちなはの力のほどいくたりばか
 りの力にかありしところみんとて。大なる繩を蛇のまきたる所につけて。人十人
 ばかりきてひかせけれども。猶たらず／＼といひて。六十人ばかりかゝりて引ける
 時にぞ。かばかりぞおぼえしといひける。それをおもふに。經頼が力はさは百人ばか
 りがちからをもたるにやとおぼゆるなり。

魚養の事。

いまはむかし。遣唐使のもろこしにあるあひだに。妻をまうけて子を生せつ。その子

いまだいとけなきほどに日本にかへる。つまにちぎりていはく。こと遣唐使いかに
につけて消息やるべし。またこの子乳母はなれんほどにはむかへとるべしとちぎり
て歸朝しぬ。母遣唐使のくるごとに消息やあるとたづぬれどあへてをともし。母
おほきに恨みてこの見をいだきて。日本へむきてちごのくびに遣唐使それがしが子
といふ簡をかきてゆひつけて。すぐせあらば親子の中は行達なんといひて海になげ
入てかへりぬ。父あるとき難波のうらのへんを行に。沖のかたに鳥のうかびたるや
うにてまろき物みゆ。ちかくなるまゝにみれば童にみなしつ。あやしければ馬をひ
かへてみれば。いとちかくよりくるに。四ばかりなるちごのまろくおかしげなる。
浪につきてよりきたり。馬をうちよせてみれば大なる魚のせなかにのれり。従者を
もちていだきとらせてみければくびに札あり。遣唐使それがしが子とかけり。さは
我子にこそありけれ。もろこしにていひ契し兒をとはずとて。母が腹だちて海にな
げ入てけるが。まかるべき縁ありてかく魚にのりてきたるなめりとあはれにおほえ
て。いみじうかなしくてやしなふ。遣唐使のいきけるにつけて此よしをかきやりた
りければ。母も今ははかなきものに思けるに。かくときゝてなん希有の事なりとよ
ろこびける。さてこの子おとなに成まゝに手をめてたくかきけり。魚にたすけられ
たりければ。名をば魚養とぞつけたりける。七大寺の額どもはこれがかきたるなり

けりと。

新羅國后金榻事。

これも今はむかし。新羅國に后おはしけり。その后志のひてみそかおとこをまうけ
てけり。御門このよしをき給て。后をとらへて髪になはをつけてうへにつりつけ
て足を二三尺引あげてをきたりければ。すべきやうもなくて心のうちに思給けるや
う。かゝるかなしき目をみれどもたすくる人もなし。つたへてきけばこの國より東
に日本といふ國あり。その國に長谷觀音と申佛現じ給なり。井の御慈悲この國ま
できこえてはかりなし。願をかけたまつらばなどかはたすけたまはざらんとして。
目をふさぎて念じ入給ほどに。金の榻あしの下にいできぬ。それをふまへてたてる
にすべてくるしみなし。人のみるにはこの榻みえず。日比ありてゆるされ給ぬ。のち
に后もちたまへる寶どもを。おほく使をさして長谷寺にたてまつり給。その中に大
なるずいかにみかねの籠今にありとぞ。かの觀音念じたてまつれば。佗國の人もま
るしを禁らずといふことなしとなむ。

珠の價无量事。

これもいまはむかし。つくしに太夫さだまげと申物ありけり。この比ある箱崎の太
夫のりまげが祖父之。其さだまげ京上しけるに。故宇治殿(願)にまいらせ。又わたく

願、原作願、今
從イ本

さ、原作が、今從
一本

など、原作をと、
據一本改、
イ本作
これを

しの志りたる人々にも心ざしんとて唐人に物を六七千疋がほど借とて。太刀を十腰
ぞ質にをきける。さて京にのぼりて宇治殿にまいらせ。おもひのまゝにわたくしの
人々、にやりなどしてかへりくだりけるに。淀にて船にのりけるほどに。人まうけ
志たりければ。これ御れうくひなど志てゐたりけるほどに。はし舟にてあきなひする物
どもよりきて。その物やかふかのものやかふなど尋とひける中に。玉をやかふとい
ひけるを聞入る人もなかりけるに。さだまげが舍人に仕けるをのこ舟のへにたてり
けるが。こゝへもておはせみんといひければ。袴のこしよりあこやの玉の大なる豆
計ありけるをとり出してとらせたりければ。きたりける水干をぬぎてこれにかへて
んやといひければ。玉のぬしの男せうとく志たりとおもひけるに。まどひとりて船
さしはなちていにければ。舍人もたかくかひたるにやと思けれど。まどひいにけ
ればくやしとおもふ。袴のこしにつゝみてこと水干きかへてぞ有ける。かゝる
ほどに口かずつもりて博多といふところに行着にけり。定まげ舟よりあるまゝ
に。物かしたりし唐人のもとに質はすくなくしぞ。物はおほくありしなどいはん
とて行たりければ。唐人も待よろこびて酒のませなどしてものがたりしける。この
玉もちのをのこ下す唐人にあひて。玉やかふといひてはかまの腰より玉をとり出
とらせければ。唐人玉をうけ取て。手のうへにをきてうちふりてみるまゝに。あこ

しとおもひたるかほけしきにて。これはいくらほどとひければ。ほしとおもひた
るかほけしきをみて十貫といひければ。まどひて十貫にかはんといひけり。まこと
は甘貫といひければ。それをもまどひかはんといひけり。さてはあたひたかきもの
にやあらんとおもひて。たべまづとこひけるを。あしみけれどもいたくこひければ。
我にもあらでとらせたりければ。いまよくさだめてうらんとて袴のこしにつゝみて
のきにければ。唐人すべきやうもなくさだまげとむかひたる船頭がもとにきて。
その事共なくさへづりければ。この船頭うちうなづきてさだまげにいふやう。御
ずん御ごの中に玉もちたるものあり。其玉取て給はらんといひければ。さだまげ人を
よびてこのとも成ものゝ中に玉もちたるものやある。それたづねてよべといひけれ
ば。このさへづる唐人はしりいて。やがてそのをのこの袖をひかへて。くはこれ
ぞこれぞとて引いてたりければ。さだまげまことに玉やもちたるとひければ。ま
ぶまぶにさぶらふよしをいひければ。いでくれよとこはれて袴のこしより取出たり
けるを。さだまげ郎等してとらせけり。それをとりにむかひるたる唐人手にいれう
けとりて。うちふりてみてたちはしり内にいりぬ。何ごとにかあらんとみるほどに。
さだまげが七拾貫が志ちにをきし太刀どもを十ながらとらせたりければ。さだまげ
はあきれたるやうにてぞありける。古水干一にかへたる物をそこばくのものにかへ

てやみにけん。げにあきれぬべきとぞかし。玉のあたいはかぎりなき物といふ事は
今はじめたることにはあらず。つくしにたうしせうずといふものあり。それがかた
りけるは。物へ行ける道におのこの玉やかふといひて。反古のはしにつゝみたる玉
を。懐よりひき出てとらせたりけるをみれば。もくれんじよりもちいさき玉にてぞ
ありける。これはいくらととひければ。きぬ廿疋といひければ。あさましと思て物へ
いきけるをとめて。玉もちのをのこぐして。家にかへりてきぬのありけるまゝに。
六十疋ぞとらせたりける。これは廿疋のみはすまじき物を。すくなくいふがいとあ
しさに六十疋をとらすなりといひければ。をのこよるこびていにけり。その玉を
もちて唐にわたりてけるに。道のほどおそろしかりけれども。身をもはなたずまも
りなどのやうにくびにかけてぞありける。悪き風のふきければ。唐人はあしき浪風
に逢ぬれば。船のうちの一の寶とおもふ物を海に入るゝに。このせうずが玉をうみ
にいれむといひければ。せうずがいひけるやうは。此玉をうみに入てはいきてもか
ひあるまじ。たゞ我身ながら入ばいれよとてかへてゐたり。さすがに人を入べき
やうもなかりければ。とかくいひけるほどに玉うしなふまじきほうやありけん。風
なをりにければよろこびて入すなりにけり。その舟の一のせんどうといふものも大
なる玉もちたりけれども。其はすこしひらにてこの玉にはおとりてぞありける。か

くて唐に行つきて玉かはんといひける人のもとに。船頭が玉をこのせうずがもたせ
てやりけるほどに。道におとしてけり。あきれさはぎて歸るとめけれども。いづくに
かあらんずるとおもひわびて。わが玉をぐしてそこの玉をとしつればすべきかたな
し。それがかはりにこれをみよととらせれば。わが玉はこれにはおとりたりつ
るなり。その玉のかはりにこの玉をえたらばつみふかゝりなんとてかへしけるぞ。
さすがにこの人にはたがひたりける。此國の人ならばとらざらんやは。かくてこ
のうしなひつる玉のことをなげくほどに。あそびのもとにいにけり。ふたり物がた
りしけるつゝめてに。むねをさぐりて。などむねはさはぐぞととひければ。まかゝの
人の玉をおとしてければ。大事なることをおもへばむねさはぐぞといひければ。こ
とはりなりとぞいひける。さて歸てのち二日ばかりありて。このあそびのもとより
さしたることなんいはんと思ふ。いまのほど時かはさずこといひければ。何事かあ
らんといそぎ行たりけるを。例の入方よりは入らずしてかくれの方よりよび入れ
ば。いかなる事にかあらんと思ふ。いりたりければ。これはもしそれをとしたり
けん玉かとして取出たるをみれば。たがはずその玉なり。こはいかにとあさましく
てとへば。こゝに玉うらんとて過つるを。さることいひしぞかしと思て。よびいれて
見るに玉の大なりつれば。もしさもやとおもひて。いひとめてよびにやりつるな

一に、原作ひ、今従
一本

りといふに。こともをろかなり。いづくぞその玉もちたりつらんものとはといへば。か
しこにのたりといふをよびとりてやりて。玉のぬしのもとにりて行て。これはまか
じかきてそのほどにあたりし玉なりといへば。えあらがはて其ほどにみつけた
る玉なりけりとぞいひける。いさかなる物とらせてぞやりける。さてその玉をか
へしてのち。唐綾一をば唐には美濃五疋がほどにぞもちひるなる。せうずが玉をば
から綾五千段にぞかへたりける。そのあたいのほどをもちふに。こゝにてはきぬ六
十疋にかへたる玉を。五万貫にうりたるにこそあんなれ。それをもちへばさだまけ
が七拾貫がまろを返したりけんも。あどろくべくもなきことにて有けりと人のかた
りしなり。

北面女雜使六事。

これもいまはむかし。白河院の御とき北もてのさうじにうるせき女ありけり。名
をば六とぞいひける。殿上人どももてなしけうじけるに。雨うちそほふりてつれづ
れなりける日。ある人六よびてつれづれなぐさめんとて。使をやりて六よびてこと
いひければ。ほどもなく六めしてまいりて候といひければ。あなたより内山の山の
かたへぐしてこといひければ。さぶらひらてきてこなたへまいり給へといへば。び
んなく候などいへば。侍歸きて。めし候へばびんなくさぶらふと中て恐申候なりと

録、原作誤、據
イ本改

いへば。つきみていふにこそとちもひて。なかくはいふぞたれこといへども。ひが
事にてこそ候らめ。さきくも内御やのいなどへまいること候はぬにといひけれ
ば。このおほくあるたる人々たゞまいり給へ。やうぞあるらんとせめければ。すぢなき
恐に候へども。めしにて候へばとてまいり。このあるじみやりたれば。刑部録といふ
ふ廳官びんひげに白髪まじりたるが。とくさのかりぎぬに物を袴きたるが。いとと
うるはしくさや〜となりて。あふぎを笏にとりて。すこしうつぶしてうづくまり
るたり。大かたいかにいふべしともおぼえず。物もいはねばこの廳官のよ〜恐か
しこまりてうつぶしたり。あるじさてあるべきならねば。や〜廳にはまだなにも
か候といへば。それがしかれがしといふ。いとげに〜しくもおぼえずして。廳官う
しろさまへすべり行。このあるじかうみやづかへするこそ神妙なれ。見參にはかな
らずいれんぞ。とうまかりねとこそやりけれ。この六のちにき〜てわらひける
とか。

仲胤僧都連歌事。

これも今はむかし。青蓮院の座主のもとへ七宮聖徳太子渡らせ給たりければ。御つれづ
れなぐさめまいらせんとて。わかき僧綱有職など庚申してあそびけるに。うへわら
はのいとくさげなるが瓶子とりなどしありきけるを。ある僧まのびやかに。うへ

わらは大童子にもちとりたりと。連歌にしたりけるを。人々もまばし案ずるほどに。仲胤僧都その座にありけるが。や、胤はやうつけたりといひければ。わかき僧だちいかにとかほをまもりあひ侍けるに。仲胤祇園の御會を待ばかりなりと付たりけり。これををのくこの連歌はいかにつけたるぞと志のびやかにいひあひけるを。仲胤きいて。や、わたう連哥だにかぬとつけたるぞかしといひたりければ。これを聞つたへたる物ども。一度にはつとどよみわらひけりとか。

大將慎事。

これもいまはむかし。月の大將星を犯といふ勘文をたてまつれり。よりて近衛大將をもくつししみ給べしとて。小野宮右大將(經)はさまぐの御いのりどもありて。春日山階寺などにも御所あまたせらる。其ときの左大將は。枇杷左大將仲平と申人にてぞおはしける。東大寺の法藏僧都は此左大將の御所の師なり。さだめて御所のことありなんと待に。をともし給はねば覺束なさに。京に上りて枇杷殿にまいりぬ。殿あひ給て何事にてのぼられたるぞとの給へば。僧都申けるやう。奈良にてうけ給れば。左右大將つししみ給べしと天文博士勘申たりとて。右大將殿は春日社山階寺などに御いのりさまぐに候へば。殿よりもさだめて候なんと思給て案内つかうまつるに。さることもうけ給はらずと。皆々申候へばおぼつかなく思給てまいり候つる。

さ、原作き、據一本改

皆々申候へば、原作昔人は、據一本改補

之。なを御所候はんこそよく候はめと申ければ。左大將の給やう。尤まかるべきとなり。されどをのがおもふやうは。大將のつしむべしと申なるに。をのれもつしまば右大將のためにあしうもこそあれ。かの大將は才もかしこくいますかり。年もわかし。ながく大やけにつかうまつるべき人なり。をのれにをきてはさせることもなし。年も老たり。いかにもなれ何條ことかあらんとおもへばいのらぬなりとの給ければ。僧都いろくとうちなきて。百千の御所にまざるらん。この御心の定にては事のそり更に候はじといひてまかぬ。されば實にことなくて大臣になりて七十餘までなんおはしける。

御堂關白御犬晴明等きどくの事。

今はむかし。御堂關白殿法成寺を建立し給てのちは。日ごとに御堂へまいらせ給けるに。まろき犬を愛してなん飼せ給ければ。いつも御身をはなれず御ともしけり。ある日例のごとく御ともしけるが。門をいらんとし給へばこのいぬ御さきにふたがるやうに吠まはりて。内へ入れたてまつらじとしければ。何條とて車よりありていらんとし給へば。御衣のすそをくひて引とめ申さんとしければ。いかさまやうあることならんとて。榻をめしよせて御尻をかけて。晴明にきとまいれとめしにつかはしたりければ。晴明則まいりたり。かゝることのあるはいかゝとたづね給ければ。晴

此條宜考東齊隨筆鳥獸之部

明まばしうらなひて申けるは。これは君を咒咀し奉りて候物を道にうづみて候。御越あらしかばあしく候べき。犬は通力のものにてつけ申て候なりと申せば。さてそれはいづくにかうづみたる。あらはせとの給へば。やすく候と申てまばしうらなひて。こゝにて候と申所をほらせてみ給に。土五尺ばかりほりたりければ。おんのごとく物有けり。土器を二うちあはせて。黄なる紙捻にて十文字にからげたり。ひらひてみれば中にはものもなし。朱砂にて一文字をかはらけの底にかきたるばかりなり。晴明がほかにほりたるもの候はず。もし道摩法師やつかまつりたるらん。報じてみ候はんとて。懐より昏をとり出し鳥のすがたに引むすびて。咒を誦しかけて空へなげあげたれば。たちまちにまらさぎになりて南をさしてとび行けり。この鳥のおちつかん所をみてまいれとて下部をはしらすに。六條坊門萬里小路邊に。ふりたる家のもろあり戸の中へ落入にけり。則家主老法師にてありける。からめとりてまいりたり。咒咀のゆへを問るゝに。堀川左大臣顯光公の語ひをえて仕たりとぞ申ける。このうへは流罪すべけれども。道摩がとがにはあらずとて。向後かゝるわざすべからずとて本國はりまへをひ下されにけり。この顯光公は死後に怨霊と成て。御堂殿邊へはたゝりをなされけり。悪靈左府となづく云々。犬はいよゝ不便にせさせ給ひけるとなん。

報、イ本作糺

高階俊平が弟入道筆術事。

これもいまはむかし。丹後前司高階俊平といふものありけり。のちには法しになりて丹後入道とてぞありける。それがとゝにて司もなくあるもの有けり。其が主のものにくだりてつくしにありけるほどに。あたらしくわたりたりける唐人の筆いみじくをくありけり。それにあひて筆をくとならはんといひければ。はじめは心にも入でをしへざりけるを。すこしをかせてみて。いみじく筆をきつべかりけり。日本にありてはなにゝかはせん。日本はさんく道いとしもかしこからぬところなり。われにぐして唐にわたらんといはれしをしへんといひければ。よくだにをしへて。その道にかしこくだにもなりなばいはんにこそまたがはめ。唐にわたりても用られてだにありぬべくば。いはんにまたがひて唐にもぐせられていかむなどことよくいひければ。それになんひかれて心にいれてをしへける。をしふるにまたがひて一事をきいては十事もまるやうになりければ。唐人もいみじくめでし。わが國にさんかくものはおほかれど。なんぢばかりこの道にこゝろえたるものはなきなり。かならずわれにぐして唐へわたれといひければ。さらなりいはむにまたがはんといひけり。このさんの道には病する人ををきやむる術もあり。また病せねどもにくしねたしとちもふものをたちどころにおきこす術などあるも。さらにおしみかくさじ君

は、原作に、據一本改

につたへんとす。たしかに我にぐせんといふちかごとたてよといひければ。まほにはたてずすこしはたてなとしければ。なを人ころす術をば唐へわたらん舟の中にてつたへむとて。ことごとくどもをばよくをしへたりけれども。その一事をばひかへてをしへざりけり。かゝるほどによくならひつたへてけり。それにはかに主のことありてのぼりければ。そのともはのぼりけるを唐人きしてといめけれども。いかでとしごろの君のかゝることありてにはかにのぼり給はんをくりせてはあらん。おもひまり給へ。やくそくをばたがふまじきなどすかしければ。げにと唐人おもひて。さはかならずかへりてこよ。けふあすにても唐へかへらんとおもふに。君のきたらんをまちつけてわたらんとといひければ。そのちざりをふかくして京にのぼりにけり。世中のすさまじきまゝには。やをら唐にやわたりなましとおもひけれども。京にのぼりにければ。またまき人々にいひとめられて。俊平入道などきしてせいしといめければ。つくしへだにえいかず成にけり。この唐人はまばしは待けるにをもせざりければ。わざと使おこせて文をかきてうらみおこせけれども。年老たるおやのあるがけふあすともまらねば。それがならんやうみはていかなとおもふなりといひやりていかずなりにければ。まばしこそ待けれども。はかりけるなりけりとおもへば。唐人は唐にかへりわたりてよくのろひて行にけり。はじめはいみじくか

しこかりけるもの。唐人にのろはれてのちには。いみじくほうけてものもおぼえぬやうにてありければ。まわびて法師になりてけり。入道の君とてほうけくとして。させることなきものにて。としひら入道がもと。山寺などにかよひてぞ有ける。あるときわかき女房どものあつまりて庚申まける夜。この入道の君かたすみにほうけたるていにてるたりけるを。夜ふけるまゝにねぶたがりて。中にわかくほこりたる女ばうのいひけるやう。入道の君こそかゝる人けをかしきものがたりなどもするぞかし。人々わらひぬべからんものがたりし給へ。わらひてめをさまさんといひければ。入道をのれは口てづゝにて。人のわらひ給計のものがたりはえし侍らじ。さはありともわらはんとだにあらば。わらはかしたてまつりてんといひければ。物がたりはせじたいわらはかさんとあるはさるがくをし給ふか。それは物がたりよりはまさることにてこそあらめとまだしきにわらひければ。さも侍らずたいわらはかしたてまつらんとおもふなりといひければ。こはなに事ぞ。とくわらはかし給へ。いづらぐとせめられて。なにかあらん物もちて火のあかきところへいできたりにて。なにごとせんずるぞとみれば。竿のふくろをひきときて。さんをさらくといだしければ。これを見て女房ども。これおかしき事にてあるかくと。いざぐわらはんなどあざけるを。いらへもせて竿をさらくとをきるたりけり。をきはてしひろ

さ七八分ばかりの竿のありけるをひとりいで、手にさし、けて。御せんだちさはいたくわらひ給ておび給なよ。いざわらはかしたてまつらんといひければ。その竿さし、げ給へるこそおこがましくておかしけれ。なにごとにてわぶばかりはわらはんぞなどいひあひたりけるに。その八ぶんばかりの竿をきくはふるとみれば。ある人みなながらすゝるに。おつぼに入にけり。いたくわらひてとまらんとすれどもかなはず。はらのわたきる、心ちまてまぬべくおぼえければ。なみだをこぼしすべきかたなくて。おつぼに入たるものども物をだにえいはで。入道にむかひて手をすりければ。さればこそ申つれ。わらひあき給ぬやといひければ。うなづきさはぎてふしかへりわらふく、手をすりければ。よくわびしめてのちに。をきたる竿をさらく、とおしこぼちたりければ。わらひさめにけり。いままばしあらししかば死なまし。またか計たへがたきことこそなかりつれとぞいひあひける。わらひこうじてあつまりふしてやむやうにぞしける。かゝれば人ををきころし。をきいくる術ありといひけるをもつたへたらましかば。いみじからましとぞ人もいひける。竿の道はおそろしきこととにぞありけるとなん。

宇治拾遺物語卷第十五

清見原天皇與大友皇子合戦の事。

今はむかし。天智天皇の御子に大友皇子といふ人ありけり。太政大臣になりて世のまつりとをおこなひてなんありける。心の中に御門うせ給なば次の御門には我ならんとおもひ給けり。清見ばらの天皇(暎)そのときは春宮にておはしましけるが。このけしきをまらせ給ければ。大ともの皇子はときのまつりごとをし。世のおぼえもいせいもまうなり。われは春宮にてあれば勢も及べからず。あやまたれなんとおそりおぼして。御門病つき給則。吉野山のおくに入て法師に成ぬといひてこもり給ぬ。そのとき大ともの皇子に人申けるは。春宮をよし野山にこめつるは。虎に羽をつけて野にはなつものなり。同宮にすへてこそ心のまゝにせめと申ければ。げにもとおぼして軍をととのへて迎たてまつるやうにまて。ころしたてまつらんとはかり給ふ。この大とものわうじの妻にては春宮の御女ましかれば。父のころされたまはんとをかなしみ給て。いかでこの事つげ申さむと覺しけれど。すべきやうなかりけるに。おもひわび給て鮎のつゝみやきのありけるはらに。ちいさくふみをかきておし入てたてまつり給へり。春宮これを御らんじて。さらでだにおそれおぼしけるとなれば。さればこそとていろぞ下種の狩衣袴を着給て。藁沓をはきて宮の人にもまられず。た

だ一人山を越てきたまはしけるほどに。山城國田原はらといふところへ。道も
まり給はねば五六日にぞたどる。おはし着にける。其里人あやしくけはひのけだ
かくおぼえければ。高つきに粟をやき。またゆでなど煮てまいらせたり。ろの二色の
ぬ。里人これを見てあやしがりてゑるしをさしてをきつ。そこをいで給て志摩國さ
まへ山にそひて出給ぬ。その國の人あやしがりてとひたてまつれば。道にまよひた
る人なり。のどかはきたり水のませよと仰られければ。大なるつるべに水をくみて
まいらせたりければ。喜て仰られけるは。汝がぞうをこの國のかみとはなさんとて
美濃國へおはしぬ。この國のすのまたのわたりに舟もなく立給ひたりけるに。女
の大なるふねに布入てあらひけるに。このわたりなにもしてわたしてんやとの給
ければ。女申けるは。一昨日大ともの大臣の御使といふものきたりて。渡の船どもみ
なとりかくさせていにしかば。これをわたし奉りたりともおほくのわたりえ過させ
給まじ。かくはかりぬるとなれば。いま軍責來らんずらん。いかゞ志てのがれ給べき
といふ。さてはいかゞすべきとの給ひければ。女申けるは。見奉るやうたゞにはいま
せぬ人にこそ。さらばかくし奉んといひて。湯舟をうつぶしになしてその下にふせ
たてまつりて。上に布をおほくをきて。水くみかけてあらひるたり。志ばしばかりあ

を原作に、今従一本

りて兵四五百人ばかりきたり。女に問ていはく。これより人やわたりつるといへば。
女のいふやう。やごとなき人の軍千人ばかりぐしておはしつる。いまは志なの國
には入給ぬらん。いみじき龍のやうなる馬にのりてとぶがごとくしておはしき。こ
の少勢にては追付給たりともみなころされ給なん。これより歸て軍をおほくと、の
へてこそ追給はめといひければ。まことに思て大ともの皇子の兵引返しにけり。其
後女に仰られけるは。この邊に軍もよをさんに出きなんやと問給ければ。女はしり
まどひて。その國のむねとあるものどもを催しかたらふに。則二三千人兵出來にけ
り。其を引ぐして大伴皇子を追給に。近江國大津といふところに追付てたかふに。
皇子の軍やぶれてちりぐに逃けるほどに。大伴皇子つるに山崎にてうたれ給て頭
をとられぬ。それより春宮大和國に歸おはしてなん位につき給けり。田原にうづみ
給しやきぐりゆでぐりは形もかはらず生出けり。いまにたはらの御くりとてたてま
つるなり。志摩の國にて水めさせたる者は高塔氏のものなり。さればそれが子孫國
守にてはあるなり。その水めしたりしつるべはいまに薬師寺にあり。すのまたの女
は不破の明神にてましくけりとなん。

よりときが胡人見たる事。

今はむかし。胡國といふは唐よりもはるかに北ときくを。奥州の地につきたるに

やあらんとて。宗任法師とてつくしにありしがかたり侍けるなり。この宗任が父は頼時とて。みちのくのまびすにて。おほやけにまたがひ奉らずとてせめんとせられけるほどに。いにしへよりいまにいたるまで。おほやけにかちたてまつるものなし。われは過たずとおもへども責をのみかうぶれば。はるべきかたなきを。おく地より北に見わたさるゝ地あんなり。そこにわたりてありさまをみて。さてもありぬべき所ならば。われにまたがふ人のかぎりをみないてわたしてすまんといひて。まづふね一をととのへてそれにて行たりける人々。頼時。厨川の次郎。鳥海の三郎。さてはまたむつまじき郎等ども二十人ばかり。食物酒などおほくいれて舟をいだしてければ。いくばくもはしらぬほどにみわたしなりければ渡りけり。左右ははるかなるあし原にぞありける。大なる川の湊を見つけて其湊にさし入にけり。人やみゆると見けれども人げもなし。陸にのぼりぬべき所やあるとみけれども。あし原にて道ふみたる方もなかりければ。もし人げする所やあると川をのぼりさまに七日迄のぼりにけり。それがたゞおなじやうなりければ。あさましきわざかなとて。猶廿日ばかりのぼりけれども。人のけはひもせざりけり。三十日ばかりのぼりけるに地のひくやうにしければ。いかなるとのあるにかとおそろしくて。あしはらにさしかくれてひくやうにするかたをのぞきて見ければ。胡人とて繪にかきたる姿し

過たず、原作す
改むさず、據イ本

渡り、イ本此下
有若きに三字
に、據イ本補

に、イ本元、當衍

たるものゝ。あかき物にて頭ゆひたるが馬に乗つれて打出たり。これはいかなるものぞとみるほど。うちつゝきかずしらず出きにけり。河原のはたにあつまりたちて。きしも知らぬことをさへづりあひて河にはらゝとうち入て渡けるほどに。千騎計やあらんとぞみえわたる。これがあしをとのひくきにてはるかにきこえけるなりけり。かちの物をば馬にのりたるものゝそばに引付くまて渡りけるをば。たゞかちわたりするところなめりとみけり。卅日ばかりのぼりつるに一ところも瀬なかりし「に」川なれば。かれこそわたる瀬なりけれと見て。人過てのちにさしよせてみれば。おなじやうにそこるも知らぬふちにてなんありける。馬筏をつくりてをよがせけるに。かち人はそれにとりつきてわたりけるなるべし。なをのぼるともはかりもなくおぼえければ。おそろしくてそれより歸にけり。さていくばくもなくぞ頼時は失にける。されば胡國と日本のひがしのちくの地とはさしあひてぞあんなると申ける。

賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事。

これもいまはむかし。賀茂祭のとも下野武正兼行つかはしたりけり。そのかへさ法性寺殿紫野にて御覽じけるに。武正兼行殿下御覽すとまりてことに引つくるひてわたりけり。武正ことに氣色してわたる。次に兼行又わたる。をのくとりくりに

いひまらず。殿御覽じて今一度北へわたれと仰ありければまた北へわたりぬ。さてあるべきならねばまた南へかへりわたるに。このたびは兼行さきに南へわたりぬ。次に武正わたらんずらんと人々まつほどに。武正や久しくみえず。こはいかにとおもふほどに。むかひに引たる幔より東をわたるなりけり。いかにくとまぢけるに幔より冠のこしばかりみえて南へわたりけるを。人々をすぢなきものし心ぎはなりとほめけりとか。

門部府生海賊射返す事。

これもいまはむかし。かとの府生といふ舍人ありけり。わか身はまづしくてぞありけるに。まゝ正巻きをこのみて射けり。よるもいければわづかなる家のふき板をぬきてともしていけり。妻もこのことをうけず。近邊の人もあはれよしなきことし給ものかなといへども。我家もなくてまといんはたれも何かくるしかるべきとて。なをふき板をともしている。これをそまらぬものひとりもなし。かくするほどにふき板みなうせぬ。はてにはたるきこまいをわりたきつ。また後には棟うつぱり焼つ。後にはけた柱みなわりたく。これあさましきものさまかなといひあひたるほどに。板をきまたげたまでもみなわり焼て。となりの人の家にとりけるを。家主この人のやうだを見るに。この家もこぼちたきなんぞとおもひていとへども。さのみこ

く、原作き、今従一本

と、イ本元

そあれまぢ給へなどいひてすぐるほどに。よく射よしきこえありてめし出されて賭弓つかうまつるに。めでたくいければ感激ありて。はてには相撲の使にくたりぬ。よき相撲どもちほく催し出ぬ。またかざしらず物まうけてのぼりけるに。かばね島といふ所は海賊のあつまる所なり。過行ほどにぐしたるものいふやう。あれ御覽候へ。あの舟共は海賊の舟どもにこそ候めれ。こはいかにせさせ給べきといへば。此かどの府生いふやう。をのこなさはぎそ。千万のかいぞくありともいまみよといひて。皮子より賭弓の時きたりける装束とりいでうるはしくまやうぞきて。冠老懸などあるべき定にしければ。従者どもこは物にくるはせ給か。叶はぬまでも楯つきなどし給へかしといりめきあひたり。うるはしくとりつけてかたぬぎてめてうしろみまはして屋形のうへに立て。いまは四十六ぶによりきにたるかといへば。従者ども大かたとかく申に及ばすとて黄水をつきあひたり。いかにかくよりきにたるかといへば。四十六ぶにちかづきさぶらひぬらんといふときに。うはやかたへいで、あるべきやうにゆだちして。弓をさしかざしてまばしありてうちあげたれば。海賊が宗とのものくろばみたる物きてあかきあぶぎをひらきつかひて。とくくとぎよせて乗うつりてうつしとれといへども。この府生さはがずして引かためてとろくとはなちて。弓たをして見やれば。この矢目にもみえずして宗とのかいぞくがゐた

るところへ入ぬ。はやく左の目にいたづきたちにけり。海ぞくやといひてあふぎを
なげすて、のけさまにたをれぬ。矢をぬきてみるにうるはしく戦などするときのや
うにもあらず。ちりばかりの物なり。これをこの海賊どもみて。や、これはうちある
矢にもあざりけり。神箭なりけりといひて。とくくをのくくこぎもどりねとて
にげにけり。そのとき門部府生うすわらひて。なにがしらがまへにはあぶなくたつ
やつばちかなといひて。袖うちあろしてこつばきはきてるたりけり。海賊さげぎに
げけるほどに。ふくろひとつなど少々物どもおとしける海にうかびたりければ。こ
の府生とりてわらひてるたりけるとか。

土佐判官代通清人違して關白殿に奉合事。

これも今はむかし。土佐判官代通清といふ者ありけり。哥をよみ源氏狹衣などをう
かべ。花の下月の前とすぎありきけり。かゝるすき物なれば。後徳大寺左大臣(源)大内
の花みんずるにかならずといさなはれければ。通清めてたき事にあひたりと思て。
やがて破車にのりてゆくほどに。あとより車二三ばかりして人のくれば。うたがひ
なきこの左大臣のおはすると思て。尻のすだれをかきあげてあなうたてくくと
くおはせくあふぎをひらきてまねきけり。はやう關白殿(源)の物へおはします。ま
ねくを見て御ともの隨身馬をはしらせてかけよせて。車の尻のすだれをかりおと

兼通公、原在
政大臣上、據一
本改○世、一本
此下有に字

してけり。その時ぞ通清おはてさげぎて。前よりまろびおちける程にふぼしおちに
けり。いとくふびんなりけりとか。すきぬるものはすこしおこにもありけるにや。

極樂寺僧施仁王經驗事。

これもいまはむかし。堀川太政大臣兼通公と中人世・心ち大事にわづらひ給ふ。御祈
どもさまくくにせらる。世にある僧どものまいらぬはなし。まいりつどひて御いの
りどもをす。殿中さはぐことかぎりなし。爰に極樂寺は殿の造給へる寺なり。その寺
にすみける僧共。御いのりせよといふ仰もなかりければ人もめさず。このときにあ
る僧の思けるは。御寺にやすく住ことは殿の御とくにこそあれ。殿うせ給なば世
にあるべきやうなし。めさずともまいらんとて。仁王經をもちたてまつりて殿にま
いりて。物さはがしかりければ。中門の北の廊のすみにかゝまりゐて。つゆめもみか
くる人もなきに。仁王經を他念なくよみ奉る。二時ばかりありて殿仰らるやう。極
樂寺の僧なにかしの大とこやこれにあるとたづね給に。ある人中門の脇の廊に候と
申ければ。それ此方へよべと仰らるゝに。人々あやしとおもひ。ろこばくいやんごと
なき僧をばめさずして。かく參たるをだによしなしとみるたるをしめしおれば。
心もえず思へども。行てめすよしをいへばまいる。高僧どものつきならびたるうし
ろのゑんにかゝまりありたり。さてまいりたるかとはせ給へば。南のすの子に候よ

し申せば。内へよび入よとて臥給へる所へめし入らる。むげに物もおほせられずおもくおほしつるに。この僧めすほどの御氣色こよなくよろしくみえければ。人々あやしく思けるにの給やう。ねたりつる夢におそろしげなる鬼どもの我身をとりに打れうしつるに。びんづらゆひたる童子のずはえもちたるが。中門のかたより入きて。ずはえしてこの鬼共をうちはらへば鬼どもみな逃ちりぬ。何ぞの童のかくはするぞととひしかば。極樂寺のそれがしがかくわづらはせ給こといみじう歎申て。年來よみ奉る仁王經を。今朝より中門のわきにさぶらひて。他念なくよみ奉て祈申侍る。その經の護法のかくやませたてまつる惡鬼どもを追拂侍るなりと申とみて。夢さめてより心ちのかいのごふやうによければ。その悦いはんとてよびつるなりとて。手をすりておがませ給て。掉にかゝりたる御衣をめてしてかつけ給。寺に歸て猶々御祈よく申せと仰らるれば。よろこびてまかりいづるほどに。僧俗の見思へるけしきやんごとなし。中門の腋に日めもすにかゝみるたりつるおぼえなかりしに。ことのほかびしくして罷出にける。されば人の祈は僧の淨不淨にはよらぬことなり。たゞ心に入たるが驗ある物なり。母の尼していのりをばすべしと。むかしよりいひつたへたるもこの心なり。

伊良縁の世恒毗沙門御下文の事。

に、據一本補

縁、一本作儀

いまはむかし。越前の國に伊良縁の世恒といふものありけり。とりわきてつかふまつる毗沙門に。物もくはて物のほしかりければたすけ給へと申ける程に。門にいとあかしげなる女の家あるじにもいはんと給といひければ。たれにかあらんとて出あひたれば。かはらけに物をひともしこれくひ給へ。物ほしとありつるにととせられたれば。よろこびてとり入てたゞすこし食たれば。やがてあきみちたる心ちして。二三日は物もほしからねば。これをいきて物のほしきありごとにしづひてありけるほどに。月比過てこのものもうせにけり。いかゞせんずるとてまた念じたてまつりければ。またありしやうに人のつげれば。はじめにならひてまどひ出てみれば。ありし女房の給やう。これくだしぶみ奉らん。これより北の谷峯百町をこえて中にたかき嶺あり。それにたちてなりたとよばいものいできなん。それにこのふみをみせてたてまつらん物をうけよといひていぬ。このくだし文をみれば。米二斗わたすべしとあり。やがてそのまゝゆきてみれば。實にたかき峯あり。それにてなりたとよべば。おそろしげなるこゑにていらへて出きたるものあり。見れば額に角ちひて目一ある物。あかきたうさきしたる物出來てひさまづきてゐたり。これ御下文なり。此米えさせよといへば。さる事候とて下文をみて。これは二斗と候へども一斗をたてまつれとなん候つるなりとて。一斗をぞとらせたりける。そのまゝにう

けとりてかへりて。その入たる袋の米をつかふに一斗つきせざりけり。千万石とれども只同やうにて一斗けうせざりけり。これを國守きしてこのよつねをめて。その袋われにえさせよといひければ。國のうちにある身なればえいなびずして。米百石のぶん奉るといひてとらせたり。一斗とれば又いできくしてければ。いみじきものまうけたりと思てもたりける程に。百石とりはてれば米うせにけり。袋ばかりになりぬれば。ほいなくてかへしとらせたり。世恒がもとにてきた米一斗出來にけり。かくてえもいはぬ長者にてぞありける。

相應和尚上都率天事。付染殿后奉祈事。

いまはむかし。叡山無動寺に相應和尚といふ人おはしけり。比良山の西に葛川の三瀧といふ所にも通て行給けり。其瀧にて不動尊に申給はく。われを負て都率の内院彌勒井の御許にて行給へとあながちに申ければ。極てかたきことなれどしめて申ことなればいてゆくべし。其尻をあらへと仰ければ。瀧の尻にて水あみ尻よくあらひて。明王の頭にのりて都率天にのぼり給ふ。こゝに内院の門の額に妙法蓮花とかゝれたり。明王の給はく。これへ参入の者は此經を誦して入。誦せざればいらすと給へば。はるかみ上て相應の給はく。我この經讀はよみ奉る。誦することいまだかなはずと。明王さては口惜事なり。其義ならば参入叶べからず。歸て法花經を誦し

てのち參給へとて。搔負給て葛川へかへり給ければ。泣悲しみ給事かぎりなし。さて本尊の御前にて經を誦し給てのち。本意を遂給けりとなん。其不動尊はいまに無動寺におはします。等身の像にてぞましくける。その和尚かやうに寄特の効驗おはしければ。染殿の后(理)物氣になやみ給けるを。或人申けるは。慈覺大師の御弟子に無動寺の相應和尚と申こそいみじき行者にて侍れと申ければめしにつかはす。則御使につれてまいりて中門にたてり。人々みれば長高き僧の鬼のごとくなるが。信濃布を衣にき楯の平足駄をはきて大木櫛子の念珠を持ち。其体御前にめしあぐべき物にあらず。無下の下種法師にこそとて。たゞすのこの邊にたちながら加持申べしとをのく申て。御階の高欄のもとにてたちながら候へと仰下しければ。御階の東のわき高欄に立ながら。押かゝりていのりたてまつる。宮は寢殿の母屋に伏給。いとくるしげなる御こゑ時々御簾の外にきこゆ。和尚繼にその聲をきよて高聲に加持し奉る。そのこゑ明王も現じ給ぬと。御前に候人く身の毛よだちておぼゆ。まばしあれば宮紅の御衣二計にをしつゝまれて。鞠のごとく簾中よりころび出させたまふて。和尚の前のすのこに投置たてまつる。人々さはぎていと見ぐるし。内へ入たてまつりて和尚も御まへに候へといへども。和尚かゝるかたいの身にて候へば。いかてかまかりのぼるべきとて更にのぼらず。はじめめしあげられざりしをやすからずい

きどをり思て。たゞすのこにて宮を四五尺あけて打たてまつる。人々、まわびて御几帳共をさし出してたてかくし。中門をさして人をはらへどもきはめて顯露なり。四五度計うちたてまつりて投入く祈ければ。もとのごとく内へ投入つ。そのうち和尙まかり出。しばし候へととむれども。久く立て腰いたく候とてみにもきく入ずして出ぬ。宮は投入られてのち。御物けさめて御心ちさはやかに給ぬ。驗徳あらたなりとて僧都に任ずべきよし宣下せらるれども。かやうのかたいは何條僧綱に成べきとて返し奉る。その後もめされけれど。京は人を賤うする所なりとて。さらにまいらざりけるとぞ。

仁戒上人往生の事。

これもいまはむかし。南京に仁戒上人といふ人ありけり。山階寺の僧なり。才學寺中にならぶ輩なし。然に俄に道心をおこして寺を出んとしけるに。そのときの別當與正僧都いみじう惜みて。制しとめて出し給はず。まわびて西の里なる人の女を妻にして通ければ。人々、やうくさくやきたちけり。人におまねくまらせんとて。家の門にこの女の頭にいだきつきてうしろにたちそひたり。行とをる人みてあさましがり心うがることかぎりなし。いたづら物になりぬと人にまらせむためなり。さりながらこの妻と相具しながら更にちかづくことなし。堂に入てよもすがら眠らず

是郷、イ本作郡、恐

して。なみだをおとして行ひけり。このことを別當僧都きいて。彌たうとみてよびよせければ。まわびてにげて葛下郷の郡司が聲になりけり。念珠なども態持ずして。只心中の道心は彌堅固に行けり。こゝに添下郡の郡司此上人にめをとめて。ふかくたうとみ思ければ。あともさだめずありきける尻に立て。衣食沐浴等をいとなみけり。上人思やう。いかに思てこの郡司夫妻はねんごろに我を訪らんとてその心をたづぬれば。郡司答るやう。なに事か侍らん。たゞ貴く思侍ればかやうに仕也。ただし一事申さんと思ことありといふ。何ごとぞととへば。御臨終のときいかにしてか値申べきといひければ。上人心にまかせたる事のやうに。いとやすきことにありなんとこたふれば。郡司手をすりてよろこびけり。さて年比過て或冬雪ふりける日。暮がたに上人郡司が家に來ぬ。郡司よろこびて例のことなれば。食物下人どもにもいとなませず。夫婦手づからみづからしてめさせけり。湯などもあみて伏ぬ。あかつきはまた郡司夫婦とくをきてくいもの種々にいとなむに。上人のふし給へるかたかうばしきことかぎりなし。にほひ一家に充滿り。これは名香など焼給なめりとおもふ。あかつきはとく出んとの給つれども。夜あくるまでおき給はず。郡司御粥いできたり。此由申せと御弟子にいへば。腹あしくおはする上人なり。あしく申て打れ申さん。いまおき給なんといひてゐたり。さるほどに日もいでぬれば。れいはかやうに久

しくはね給はぬに。あやしと思てよりてをとなひけれどをとなし。ひきあけてみれば西に向端坐合掌まてはや死給へり。あさましきことかぎりなし。郡司夫婦御弟子どもなどかなしみなきみかつはたうとみおがみけり。あかつきかうばしかりつるは極らくの迎なりけりと思あはす。おはりにあひ申さんと申志かば。こゝにきたり給てけるにこそと。郡司なくく葬送のこともとりさたしけるとなん。

秦始皇自天竺來僧禁獄事。

いまはむかし。もろこしの秦始皇の代に天竺より僧わたれり。御門あやしみ給て。これはいかなるものぞ。なにごとによりてきたれるぞ。僧申ていはく。尺迦牟尼佛の御弟子なり。佛法をつたへんためにはるかに西天よりきたりわたれるなりと申ければ。御門はらだち給て。ろの姿きはめてあやし。頭の髪かぶるなり。衣のてい人にたがへり。ほとけの御弟子となれる佛とは何ものぞ。これはあやしきものなり。ただに返すべからず人やにこめよ。いまよりのちかくのごとくあやしきこといはんものをころさしむべきものなりといひて人やにすへられぬ。ふかくとごこめてをもくいましめてをけし宣言をくだされぬ。人やのつかさのもの宣言のまゝにをもくつみある物をくところにてめてをきて。戸にあまたじやうさしつ。此僧惡王にあふてかくかなしき目をみる。わが本師釋迦牟尼如來滅後なりともあらたにみ給らん。

我をたすけ給へとねんじ入たるに。釋迦佛丈六の御姿にて。紫磨黄金の光をはなちて空よりとびきたり給てこの獄門をふみやぶりてこの僧をとりてさりたまひぬ。そのつるでにおほくのぬす人どもみなにげさりぬ。獄の司空にもいなりければいてみるに。金の色したる僧の光をはなちたるが大さ丈六なる。そらよりとびきたりて獄の門をふみやぶりて。こめられたるてんぢくの僧を取て行をとなりければ。このよしを中に。御門いみじくおぢおそり給けりとなん。そのときにわたらんとしける佛法。世くだりて後漢にはわたりけるなり。

後の千金の事。

いまはむかし。もろこしに莊子といふ人ありけり。家いみじうまづしくてけふの食物たえぬ。となりにかんか河原かうといふ人ありけり。それがもとへけふくふべき料の粟をこふ。かこうがいはいく。今五日ありておはせよ。千兩の金をえんとす。それを奉らぬいかでかやんごとなき人につまいるばかりの粟をたてまつらん。返々をのがはざるべしといへば。莊子のいはく。昨日みちをまかりしにあとによばふこゑあり。かへりみれば人なし。たゞ車の輪あとのくぼみたる所にたまりたる少水に鮒一ふためく。なにぞのふなにかあらんと思てよりてみれば。すこしばかりの水にいみじう大なる鮒有。なにぞの鮒ぞとへば。ふなのいはく。われは河伯神の使に江湖へ行

かんかこう、原作かんあとう、原據イ本改、下同

なり。それがとびそこなひてこの溝におちりたるなり。のどかはきまなんす。われをたすけよと思てよびつるなりといふ。こたへていはいく。われ今二三日ありて江湖といふところにあそびしにいかんとす。そこにもて行てはなさんといふに。魚のいはいく。さらにそれまでまづまじ。たけふ一提ばかりの水をもてのどをうるへよといひしかば。さてなしたすけし。鮒のいひしこと我身にきりぬ。さらにけふのいのちものはすばいくべからず。のちの千のこがねさらば益なしとぞいひける。それよりのちのせんきんといふ事名譽せり。

盜跖與孔子問答事。

これもいまはむかし。もろこしにりうかく柳下といふ人ありき。世のかしこき物にして人におもくせらる。そのおとに盜跖といふものあり。一の山ふところにすみて。もろくのあしきものをまねきあつめて。そのが伴侶として人の物をば我物とす。ありくときは此あしきものどもをぐすと二三千人。道にあふ人をほろぼしはぢを見せ。よからぬことのかざりをこのみてすすに。りうかくといふ道を行ときに孔子にあひぬ。いつくへおはするぞ。みづから對面きてきこえんとおもふことのあるに。かしこく逢給へりといふ。りうかくといふかなることと。教訓しきこえんと思ことは。その舍弟もろくのあしきことのかざりをこのみて。おほくの

といふ、原作も
といふ、據イ本改

人をなげかする。などせいし給はぬぞ。りうかくといふこたへていはいく。それが申さんことをあへて用べきにあらず。さればなげきながら年月をふるなりといふ。孔子の云。そこをし給はずば我行てをしへん。いかあるべき。りうかくといふ。さらにおはすべからず。いみじきとばをつくしてをしへたまふともなびくべきものにあらず。歸てあしきと出来なん。あるべきことにあらず。孔子云。あしけれど人の身をえたる物は。そのづからよきことをいふにつくこともあるなり。それにあしかりなんよもきかじといふことはひがごとなり。よし見給へをしへてみせ申さんと。ことばをはなちて盜跖がもとへおはしぬ。馬よりをり門にたちてみれば。ありとある物まゝ鳥をころしもろくのあしきとをつどへたり。人をまねきて魯の孔子といふものなんまいりたるといひいるに。すなはちつかひかへりていはいく。おとにきく人なり。なにごとによりてきたれるぞ。人をしふる人とときく。われをしへにきたれるか。我心にかなはしむちひん。かなはずば肝なますにつくらんといふ。そのときに孔子す。みいで。庭に立てまづ盜せきをおがみてのぼりて坐につく。盜跖をみれば頭のかみは上さまにしてみだれたる事遂のごとし。目大にしてみくるべかず。はなをふきいからかし。牙をかみひげをそらしてゐたり。盜せきがいはいく。汝きたれるゆへはいかにぞ。たしかに申せと。いかれるこゑのたかくおそろしげなるをもち

を、原作に、據一本改

ていふ。孔子思給。かねてもきしことなれど。かくばかりおそろしきものとはおもはざりき。かたちありさまこそなまて人とはおぼえず。きも心もくだけてふるはるれど。おもひねんじていはいく。人の世にある様は道理をもちて身のかざりとし。心のきてとする物なり。天をいたゞき地をふみて四方をかためとし。大やけをうやまひたてまつり。下をわはれみ人になさけをいたすこととするものなり。志かるにうけたまはれば。心のほしきまゝにあしきことをのみこととするは。當時は心にかなふやうなれども終わしきものなり。さればなを人はよきに志たがふをよしとす。志かれば中に志たがひていますかるべきなり。そのこと申さんとおもひてまいりつるなりといふ。ときに盜跖いかづちのやうなる聲をしてわらひていはいく。汝がいふことども一もあたらず。そのゆへは。むかし堯舜と申二人の御門世にたうとまれたまひき。志かれどもその子孫世に針さすばかりのところを志らず。又世にかしこき人は伯夷叔齊なり。首陽山にふせりうえ死き。またその弟子に顔回といふものありき。かしこくをしへ奉志かども不幸に志て命みじかし。又おなじき弟子にて志るといふものありき。志いの門にしてころされき。志かあればかしこき輩はつるにかしこきこともなし。われ又あしきことをこのめどわざはひ身にきたらず。ほめらるゝもの四五百に過す。そしらるゝ物又四五百にすぎず。あしきこともよきこともながくほ

奉、イ本作給

い、原作れい、據イ本改

に、據一本イ本

められながくせしられず。志かれば我このみに志たがひふるまふべき也。汝また木をおりて冠にし皮をもちて衣とし。世をおそり大やけにおちたてまつるも。二たび魯にうつされあをを志いにけづらる。などかしこからぬ。汝がいふ所まことにをろか也。すみやかにけしりかへりね。一も用るべからずといふ。時に孔子またいふべきこともおぼえずして。座をたちていそぎいで、馬に乗たまふに。よくおくしけるにや。轡を二たびとりはづし鐙をまきりにふみはずす。これを世の人孔子たうれずといふなり。

水鏡上

帝王御次第。

神世十二代。天神七代。地神五代。

天神七代。

國常立尊第一。男。國狹槌尊第二。男。豐斟淳尊第三。

已上三代。あめつちをはじめてひらけて。うらの中に物あり。かたちあしかひのと

し。則神となれり。これ世の始なり。

泥土瓊尊第四。男。沙土瓊尊第五。女。大戸之道尊第六。男。大戸間邊尊第七。女。而足尊第八。男。

惶根尊第九。女。

已上三代。はじめておとこ女のかたちありといへども。そのふるまひなし。又かく

れたまへる所をしらず。

伊弉諾尊第十。男。伊弉册尊第十一。女。

以上一代。二神むかしあめのうき橋のうへにして。ともにはかりていはく。このし

たにわに國なからんやとて。あめのにほこをさしをろしさぐり給に。あをうなばらあり。うのほこのしたりのうしほ。こりかたまりて一の島となれり。二神その

島にくだりて夫婦となり給。まづおほやそじまの國をつくり給。次に山島海川をつくりたまふ。又草木をつくり給ふ。さて又世中のあるじたるべき物なからんやとて一女三男をうみたまふ。いはゆる日神。月神。蛭子。素盞鳥尊これなり。そのうちあはぢの國に宮づくりしてかくれ給ぬ。

地神五代。一説にはく。いざなぎいざなみのみ

天照太神。

いざなぎいざなみのみとの御子也。日神といへるすなはちこれなり。いまの伊勢

太神宮にをはします。

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊。

天照太神と。おとろさのをのみとともにして化生し給へる也。已上二神なを

あめの宮にをはしまして此國へくだり給はず。

天津彦々火瓊々杵尊。

あまのをしほみゝのみとの太子也。母耜幡千々姫とゆふ。高皇産靈尊のむすめ也。

世をしらせ給事卅一万八千五百四十二年。

彦火々出見尊。

ひこほのにゝぎのみとの第二子。母を木花開耶姫といふ。大山祇神のむすめなり。

六十三万八千九十年たもたせ給ふ。

彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。

ほでみのみとの太子也。はゝ豊玉姫。海童の第二女。八十三万六千四十二年たもたせ給ふ。

已上三代地神となれり。つくしの日向の國にをはします。釋迦佛の世に出たまふ事此御時の末にあたり。百王をはしますべしとぞ。

水鏡上

神武天皇
懿德天皇
孝靈天皇
崇神天皇
成務天皇
應神天皇
反正天皇

緩靖天皇
孝昭天皇
孝元天皇
垂仁天皇
仲哀天皇
仁德天皇
允恭天皇

安寧天皇
孝安天皇
開化天皇
景行天皇
神功皇后女帝
履中天皇
安康天皇

- | | | |
|------|------|------|
| 雄略天皇 | 清寧天皇 | 飯豐天皇 |
| 顯宗天皇 | 仁賢天皇 | 武烈天皇 |
| 繼體天皇 | 安閑天皇 | 宣化天皇 |
| 欽明天皇 | | |
| 敏達天皇 | 用明天皇 | 崇峻天皇 |
| 推古天皇 | 舒明天皇 | 皇極天皇 |
| 孝德天皇 | 齊明天皇 | 天智天皇 |
| 天武天皇 | 持統天皇 | 文武天皇 |
| 元明天皇 | 元正天皇 | 聖武天皇 |
| 孝謙天皇 | | |
| 廢帝 | 稱徳天皇 | 光仁天皇 |
| 桓武天皇 | 平城天皇 | 嵯峨天皇 |
| 淳和天皇 | 仁明天皇 | |
- 以上上卷分
- 以上中卷分
- 以上下卷分

慎ムベキ年ニテ。過ニシキサラギノハツ午ノ日。龍蓋寺ヘマウデ侍テ。ヤガテソレヨ

ガハ、集覽本作
マカ

リ。泊瀬ニタツガレノ程ニマイリツキタリシニ。年ノ積リニハイタククルシフ覺テ。師ノモトニシバシヤスミ侍シ程ニウチマドロマレニケリ。初夜ノカ子ノ聲ニオドロカレテ。御マヘニマイリテ通夜シ侍シニ。世ノナカウチシヅマル程ニ。修行者ノ卅四五ナンドニヤ成ラント見エシガ。經テイトタウトクヨムアリ。カタワラヂカク非タレバ。イカナル人ノイヅコヨリ參リ給ヘルゾ。御經ナンドノウケタマハラマホシカラニハ。タヅ子タテマツラントイフニ。此修行者イフヤウ。イヅクトサダメタル所モ侍ラズ。スコシ物ノコ、ロヅキテノチ。コノ十餘年世ノナリカハルサマノ。心トマムベクモミエ侍ラチベ。人マテニモシ後世ヤタスカルトテ。カヤウニ迷ヒアリキ侍也トイヘバ。マコトニカシコクオボシトリタル事ニコソ。タレモサスガニ此コトハリハオモヘドモ。マコトシクハ思立ヌコソ愚ニ侍ルメレ。コノアマイマ、デ世ニ侍ル希有ノ哀ナリ。クフアストモシラズ。コトシ七十三ニナンナリ侍。卅三チスギガタク相人ナンドモ申アヒタリシカバ。岡寺ハ厄ヲテシ給フト承テマウデンメシヨリ。ツ、シミノトシゴトニキサラギノハツ午ノ日マイリツルシルシニコソ。今マデ世ニ侍ルチカシク。今ハ何ノ命カハ惜カルベキト思ナガラ。年頃參リナラヒテ侍ニアハセテ。ヤガテコノ御寺ヘモマイラムト思タチテナン。今コノ御寺ニハヒトヘニ後世タスカリ侍ラン善知識ニ合セサセ給ヘト申シニコソマイレルニ。カクイサギ

ヨク後世オボス人ニアヒ奉リヌルハシカルベキニコソ。世チンムク人モチノゾカラ自然ノ用ヲモ云觸レ給ヌベキ人ノ無ランハ。タヨリナカルベキ御事ナリ。此尼モヒトヘニ子トモ思奉ラム。又カナラズ善知識トナリ給ヘトイヘバ。修行者イト嬉キ御事ナリ今日ヨリハサコソタノミ申侍メトテ。又經ナンドヨミテ所作シ終シ程ニ。後夜打過テワレモ人モチムラレシカバ。修行者アリキ給クム物語シタマヘ。メテ醒シ侍ラム。大峰葛木ナンドニハ。貴キコトニモマタソロシキ事ニモアヒ侍ルナルチ。イカナル事カ侍シト、ヘバ。年比ハベチニサルコトモナカリシニ。オトマシノ秋葛木ニテコソアサマシキ事ニアヒ侍リタリシカ。常ヨリモ心スミテ。アハレニオボエテ經ヲ誦シタテマツリシニ。谷ノ方ヨリ人ノ氣色ノシテマウデシカバ。イト物チソロシクオボエナガラ。經ヲ誦シタテマツリシニ。九月ナカツキカミノ十日ゴロノコニテ。月ノイリガタニナリ侍シ程ニ。ホノカニソノカタチチミレバ。翁ノ姿シタルモノ、アサマシゲニヤセ神サビタルガ。藤ノ皮チアミテ衣トシ。竹ノ杖チツキタルガキタルナリケリ。様々ヤク側ヘ來テ云様。御經ノイト貴ク聞ヘ侍リツレバマウデタルトイフ。モノチソロシクオボエ侍シカドモ。鬼魅キミチドノスガタニモアラザリシカバ。仙人トイフモノゾヤト思テカク申程ニ。八ノ卷末ツカタニナリシカバ。又一部ヲ誦シテキカセ侍シカバ。此仙人ヨロコビテ。修行シ給人多クチハセドモ。マコトシク佛道チ心

1、原作中、據
集覽本改

卷、原作員、今
從集覽本

ニカケ給ヤラント見タテマツリ。貴ク覺ヘ侍ナリ。如何ナル事ニテ心チ發シソメ給ヘリシゾトイヒシカバ。サキニ申ツルヤウニ申シテ仙人キ、テ。イトカシコキ御事ナリ。大方ハ今ノ世ヲ墓無ウトミ給テ。イニシヘハカクシモアラザリケントアサクオボスマシキ事ナリ。スベテ三界ハイトフベキ事ナリトゾオボスベキ。此メノ前ノアリサマハ。チリニ随テトモカクモナリマカル也。古ヘチホメ今チソシルベキニアラズ。神代ヨリ此葛木山吉野山ナンドチスミカトシテ。時々ハ形チ隠シテ都ノ有様ヲモ諸國ニイタルマデモ見キ、テスキ侍キ。ヨシナキ事ドモニモ侍ルベケレドモ。御經チウケタマハリヌル悦ニ。ヒトヘニ目ノ前ノ夏バカリチノミゾシル心チハシテ。古ハカクシモナカリケンナンドオボス。一筋ナル心ノオハスルカタチモ申キカセバ。一分ノ執心チモ失ヒ給ナラバ。佛道ニス、ミ給カタチナドカナラザラン。神ノ世ヨリ見侍シ夏チロ、申侍ラントイヘバ。イミシクウレシク侍ルベキ事ナリ。生年廿ナンドマデハ男ノマヘカタニテ世ニタチマツラヒ侍シカドモ。ハカ、シク昔ノ事カウガヘ見ル事モナカリキ。タマアソビタハアレニテ夜チアカシ日チクラシテノミ過侍シニ。近比ノ事ナンドチ人ノ語傳申事チキクニ。此世ノ中ハイカニカクハナリマカルヤラント。事ニフレテ哀ニノミ覺ヘテカ、ルミチニイリニタレバ。一カダニナベテノ世チソシル心アル。罪モサザメテ侍ルラン。イデノタマハセヨ承ラム

似、集覽本作、
似是

ト云ニ。仙人ノ云ク。扱ハ此世ノ有様ノミナラス。内典ノカタナンドモウトクコソハ
 思スラメ。ハシクテ申サン。生死ハ車ノ輪ノゴトクニテ。始リテハ終リ畢リテハ始
 リ。イツチ始イツチ畢トモイフ事アル劫ノ次第有テベカラス。マツ劫ノ有様ヲ申テ。世ノナリユク
 サマモカクツカシトシラセタテマツラン。人ノ命ノ八万歳アリシガ。百年トイフニ
 一年ノ命ノツママリシテ十歳ニナルチ。一ノ小劫トハ申也。サテ又十歳ヨリ百
 年ニ一年ノ命ヲソヘテ八万歳ニナリヌ。コレヲモ一ノ小劫ト申ス。コノ二ノ小劫ヲ
 合テ一ノ中劫トハ申スナリ。サテ世ノ始ル時チハ成劫ト申テ。此中劫ト申ツル程チ
 廿過スナリ。ソノ始ノ一切ノ始ヌ程ハ。ツヤクトヨノ中ナクテ空ノ如クニテアリ
 シニ。此始ノ一切ノ始ルヨリ。山河ナンド出来テカク世間ノ出来ルナリ。今十九劫ニ
 ハ極光淨トイフ天ヨリ。ヒトリノ天人ムマレテ大梵王トナル。ソノ、チ次第ニヤウ
 ヤウシモザマニムマレテ。ツギニ人ニムマレ。餓鬼畜生出キテ。ハテニ地獄ハ出来ナ
 リ。カクテ成劫廿劫ハ極リヌ。世間モ有情モナリサダマルニヨリテ成劫トハ申ナリ。
 ツギニ住劫ト申テ又廿ノ中劫ノホドヲ過スナリ。但始ノ一切ハ命次第ニ劣リノミシ
 テマサル事ナシ。サレバ住劫ノ始ノ人ノ命ハ八万歳ニハアラズシテ無量歳ニテ。ソ
 レヨリ十歳マデナル也。サレドモ程ノフルコトハ中劫ノホドナリ。サテ第二ノ劫ヨ
 リ十九ノ劫マデハ前ニ申ツルヤウニ。八万歳ヨリ十歳ニナリ。十歳ヨリ八万歳ニナ

リ。劫ゴトニカク侍ナリ。サテ第廿ノ劫ハ。十歳ヨリ八万歳マデマサルコトノミアリ
 テチトロナル事ナシ。コレモ過ルホドハ一ノ中劫ナリ。コレハ天ヨリ地獄マデ成劫
 ニイデキト、ノホリテ有情ノ住シテアルホドナリ。サテ住劫トハ申ナリ。ツギニ壞
 劫ト申テコノホドモマタ廿ノ中劫ノホドナリ。始ノ十九劫ニハ地獄ヨリ初テ有情ミ
 ナウセヌ。コノウスルト申スハ。イツクトモナク失セヌルニハアラズ。シカルベクシ
 テ天上ヘ生ル、ナリ。但地獄ノ業尙盡ヌ衆生ヲバ殊三千界ノ地獄ヘシバシ移シヤ
 ルナリ。カクテ第廿ノ劫ニ火イデキテ。下モ風輪トテ風吹ハリタル所ノウヘヨリ梵
 天マデ。山川モ何モカモ焼失ヌ。カク破レヌレバ壞劫トハ申也。次ニ空劫ト申テ。又
 廿ノ中劫ノホドチ。世中ニ何モナクテ大空ノ如クニテスグルナリ。ムナシケレバ空
 劫トハ申ナリ。コノ成住壞空ノ四劫ヲフルホドハ八十ノ中劫ヲスグシツルゾカシ。
 コレチ一ノ大劫トハ申ナリ。カクテ終テハ又始リ。又始リシテハイツチカギリトイ
 フ事ナシ。如レ此シテ地獄水火風空五大ニハ。今マデノ分ハ地大ノ分ナリ。水火風ナ
 ンド云事此上ニ有ベシ。夏ナガケレバ申サズ。コノ住劫ト申ツルニ。佛ハ世ニイデ給
 フ也。ソノナカニ人ノ命ノマサリザマニナルナリハ。タノシミヲゴレル心ノミアリ
 テ。チシヘニ叶マツケレバ出給ハズ。命ヤウクテチツカタニ。物ノ衰ヲモシリ教事
 ニモ叶ヌベキ程ヲ見ハカラヒテ出給ナリ。コノ住劫ニ取テハ始ノ劫ヨリ第八ノ劫マ

デハ佛イテ給ハズ。第九ノ滅劫ニ七佛ノ出給シナリ。釋迦ノ出給シハ人命百歳ノ時ナレバ。第九劫ノムゲニスエニナリニシタルニコソ。第十ノ滅劫ノハシメニ彌勒ハ出給ハンズルナリ。第十五ノ滅劫ニ九百九十四佛イテ給ベシ。如此世ニ随テ。人命モ果報モナリマカル。大カタハサル事ニテ。コノ日本國ニトリテモ又中ノ世上リテハ夏サダマラズ。返テ此頃ニ相似タル事モ侍キ。佛法ワタリ因業ワキマヘナンドシテヨリ。ヤウノシヅマリマカリシナゴリノ又スヘニナリテ。佛法モウセ世ノ有様モワロクナリマカルニコソ。アルベキコトハリナレバ。ヨシアシチサダムベカラズ。ヒトヘニアラヌ世ニナルニヤナドアザムキ思フベカラズ。萬壽ノ比チ非世繼ト申シ、サカシキ翁侍リキ。文德天皇ヨリノチツカタノトハクラカラズ申チキタルヨシウケタマハル。ソノ前ハイトキ、ミ、トチケレバト申サザリケレドモ。世ノ中チ極メ知ヌハ。カタオモムキニ今ノ世チソシル心ノ出クルモカツハツミニモ侍ラフ。メノマヘノ事チ昔ニ似ズトハ世チシラヌ人ノ申コトナルベシ。カノ嘉祥三年ヨリ前ノコチチロノ中ベシ。先ヅ天神ノ代七代。ソノ、チ伊勢太神宮ノ御代ヨリソノハフキ吹合セズノ尊マテ五代。合テ十二代ノ事ハ。詞ニ顯シ申サンニ付テ憚多侍ルベシ。神武天皇ヨリ申侍ベキ也。其御門位ニ付給シ辛酉ノトシヨリ。嘉祥三年庚午ノ年マデ。千五百二十二年ニヤナリヌラン。其程御門五十五代ゾチハシマシケン。マ

薛、原作劫、據集覽本改

ツ神武天皇ヨリトテイヒツマケ侍リシ。

ハヤ、恐有誤、或

一 一代 神武天皇。七十六年三月甲辰日崩。年百廿七。
 神武天皇ト申シ御門ハ。ウノハヤカヤ葺不合ノ尊ノ第四ノ御子ナリ。御母ハ海神ノ女玉依姫也。又マノノ御母ハ海ニイリ給テ。玉依姫ハ養ヒ奉リ給ヘリケルトモ申キ。ソノ實ノ母ハ此玉依姫ノ姉。御名字ハ豐玉姫也。此父御前ト申スハ春日大明神ノ御悲母ヒイノハヤヒノ尊ノサシツギノ御弟ニテ御座。其名字ワタヅミノ尊ノ御事ナリ。是ハ海神ニテ御座也。其御世ニ此翁モ侍リシカドモ。コマカニモ知侍ザリキ。此御門。父ノ御門ノ御代庚午ノ年ニ生給ヌ。甲申ノ歲東宮ニ立給フ。御年十五。辛酉ノ年正月一日位ニ付給フ。其御トシ五十二。サテ世チ治給フ事七十六年。神世ヨリ傳リテ劍三アリ。一ハ熱田ノ社ニ座マス。是アマノムラクモ又ハクサナギト申ス。此劍ノ寫ノ劍内裏ニ居住事。人王八十代高倉院ノ御代マデハ恙ナカリシニ。其次ノ御門安徳天皇ノ御時。平家ニ具セラレ座シテ都チ御出デアリテ。遂ニ西海ノ浪底ニ其御門御身ト共ニ。此寫ノ劍ヲ海底ニ沈メ給ニキ。サテ二ハ出雲國キヅキノ大社ニ座。其劍ノ名字ハアマノハエキリノ劍ト號ス。三ハ磯上布留ノ社ニ座。此三ノ劍ハ源ヲ尋バ。天照太神ノ父ノ御神イザナギノ尊。此日本國ノ始テ國ト成給シ時。彼第六天ノ魔王我管領ト思。大海チ神

ク、恐當作イ

國ト成サレタル事ヲ安カラズ思テ。彼后ノイザナミノ尊ノ一女三男ノ四神ノ御子ノ
 ウツリ。第五ノ御子其名字火神ツカグ。ミカドトハラマレ。サテ生シ時其母并其類火ノ燒
 失ニ。先開白ノ日本國ヲ悉皆燒拂テ本ノ大海ニ成シタリキ。是ヲ後ニ彼父ノ御神ク
 サナキサトリ座シテイカリテ成シテ。トツカノ劍ヲ拔持。雲ノ上切利天ノタカマノ
 原。天ノヤソカワノ浮橋ノ上ニテ。此第五ノ皇子第六天ノ魔王ノ變作ヲ。父ノ王直ニ
 キリ殺給シ時。御イカリノ御チカラヲツヨク出シ給シ故ニ。彼ノトツカノ御劍ヨリ
 三ノ劍分散シキ。此三ノ劍傳リテ今代マデ日本ニアレバ。神世ヨリ傳リタル劍三ア
 リトハ申也。其三ノ劍ノ第三ノ劍ノ分散ノ時。同時ニトツカノ劍ノ中ヨリ六躰ノ神
 化生シ給キ。其内第一ハ女神。其名字ヒイノハヤヒノ尊。是今ノ春日大明神ノ御母儀
 ニテ御座ナリ。第六ハ又是女神。今ノ三輪ノヒハラノ女神是ナリ。サテ中四神ハ皆男
 神ナリ。其男神ノ第一是海神ノワタヅミノ尊是ナリ。然間春日大明神ハ是彼イザナ
 キノ尊ノ御子ノ一女三男ノウツリニ。トツカノ劍ノツルギ腹ノ六躰ノ化生ノ御神
 ノ。第一ノ女神ノ御子ニテ化成シ給ケレバ。イザナキノ尊ノ御孫ハ春日大明神ニテ
 御座ケル間ニ。此因縁ニテ春日ノ大明神ノ御管領ノ大明神。大和國ノ布留神躰。是第
 三ノ御劍ナリケリ。是ハ孫讓ノ御劍ニテ。春日ノ御神發ノ御時必御タテツキトシテ。
 彼布留ノ御神ノ御伴申サセ給ハ。此イワレナリケリト知ルベキナリ。然間ニ春日大

明神ハ父ハ座サズ。母バカリニテ化生ノ御神ニテ座。是深秘ナリ。輒ク披露アルベカ
 ラズ。又鏡三アリ。一ハ伊勢太神宮ニ御座ス。是ハ内宮ノ社壇ノ内ノ神躰トシテ。天
 照大神ノ御躰是ナリ。此神鏡ヲ内侍所ト申ナリ。是ヲ寫シテ内裏ノ三種ノ神祇ノ第
 三ノ内侍所ト今ニ號スル也。靈驗新ニ御座テ本ノ内侍所ニ劣リ給ズト申傳タル也。
 二ハ紀伊國日前ニ御座スナリ。三ハ鏡ノ出來様ノ御時三ニ破給タリケル。其破ノ鏡
 二ハ今ニ伊勢國濱ノマナコノ上ニ。數千年ヲフレ共汚ズサビスシテ御座。是ヲ伊勢
 ノ鏡ノ明神ト號シ奉ル。其破鏡ノ數三ノ内。第三ノ破鏡ハ本ノ草ナキノ劍ノサヤク
 チニ火ウチ袋ノ中ノ。伊勢ノ内宮ノ女神御身ヲ赤地ノニシキノ火打袋ニ縫フクメ入
 給タリケルニ。其朝敵追罰ノ駿河國浮島ガ原ノ草ナキノ劍ノ高名ノ。御同ク彼火打
 ノ鏡高名ノ。其朝敵ヲ此火打袋ヨリ火ヲ出シテ燒亡シ。今ニ彼所ニ燒ツメト云名ヲ
 殘セル高名ノ火打ノ。破鏡火打袋ト共ニ尾張熱田ノ社壇ノ内ニ。熱田ノ大明神ノ號
 チ得給タル其神躰ノ内ニテ御座ナリ。
 抑此日本ヲ秋津島ト名付ラレシ事ハ此御代ノ御時ナリケリ。事遙ニシテタマサカニ
 申難シ。此四位ニ付七御座時ハ。彼天竺ノ尺迦如來ハ。其昔ノ二月十五ノ夜半トゾ承
 シト申云々。尺迦御入定ノ年ヲ數フレバ。歲霜二百九十年ニ成申侍キ。サレバ世アガ
 リタリト思ヘドモ。此神武天皇ノ御代ハ佛ノ在世ニダニモ當ラザリケレバ。ヤウ

世ヲ、集覽本作
四とせ、今從舊

ヤウ世ノ末ニテコソハ侍リケレ。

一 二代 綏靖天皇。卅三年五月崩。年八十四。十月葬大和國桃花山岳陵。御名ハ五十鈴姫ナリ。神武天皇ノ第三ノ御子也。御母ハ事代主神ノ御女。辰ノトシ正月八日己卯ニ位ニツキ給フ。御年五十二。世ヲ治給事卅三年。父ノミカドウセ給テ諒闇ノ程。世ノ事ヲ御アニノミコトニ申ツケタマヘリシヲ。コノ御アニノミコノ。弟違ヲ失奉ラントハカリ給ヘリシヲ。コノ弟ノミコ心エ給テ。御ハテナンドスギテ。御門今一人ノ御兄ノミコト御心ヲアハセテ。カノア、ニノミコチイサセタテマツラセ給ニ。コノアニノミコ手ヲワナ、カシテ。エイタマハズナリヌ。ミカドソノ弓ヲトリテイコロシ給。コノエイズナリヌ兄ノ御子ノ宣フ様。ソレアニナリトイヘドモ。心ヨハクシテ其身タヘズ。ナンヂハアシキコ、ロモチタルアニチスデニウシナヘリ。スミヤカニ位ニツキ給ベシト申給シニ。カタミニ位ヲユヅリテタレモツキタマハデ世ヲスゴシ給ヘリシカドモ。遂ニ此御門兄ノ御勸ニテ位ニツキ給ヘリシナリ

一 三代 安寧天皇。卅八年十二月崩。年五十七。明年八月葬大和國御陰井上陵。次ノ御門ヲ安寧天皇ト申キ。綏靖天皇ノ御子。御母ハ是皇太后宮五十鈴依姫ナリ。綏

靖天皇ノ御世廿五年正月戊子日春宮ニ立給フ。御年十一。父ノ御門失セ給テアクル先帝崩後明年即位申年十月廿一日ニツ位ニツキ給シ。御年廿。世ヲタモチ給夏卅八年也。

一 四代 懿德天皇。卅四年九月八日崩。年七十七。葬大和國磯砂溪上陵。次ノ御門ヲ懿德天皇ト申キ。安寧天皇ノ第三ノ皇子。御母ハ皇后淳名底中媛ナリ。安寧天皇ノ御世十一年正月壬戌日東宮ニ立給フ。御トシ十六。辛卯年二月四日壬子ニ位ニツカセ給シナリ。世ヲシラセ給夏卅四年ナリ。卅二年ト申シ、ニゾ孔子ハウセタマヒニケルト承リキ。

一 五代 孝昭天皇。八十二年崩。年百十四。葬大和國掖上郡多山上陵。次ノ御門ヲ孝昭天皇ト申キ。懿德天皇ノ御子。御母ハ皇太后宮天豐津姫也。懿德天皇廿二年三月戊午日春宮ニ立給フ。御トシ十八。丙寅歲正月九日位ニ付給フ。御年卅二。世ヲ治セ給事八十二年ナリ。

一 六代 孝安天皇。百二年崩。年百卅七。葬大和國玉手岳上陵。次ノ御門ヲ孝安天皇ト申キ。孝昭天皇ノ第二ノ皇子。御母ハ是世襲足姫也。孝昭天皇ノ御世。六十八年正月ニ春宮ニ立給キ。御年廿。己丑ノ年正月十三日辛卯ニ位ニ付給フ。御年卅六。世ヲ治チ給事百二年也。

一 七代 孝靈天皇。七十六年崩。年百三十四。葬大和國片岳馬坂陵。

水鏡上 懿德 孝昭 孝安 孝靈

百、續集覽本及
祇園注序(原
本所引)補

次ノ御門ヲ孝靈天皇ト申キ。孝安天皇ノ第一ノ御子。御母ハ皇太后姊押姫ナリ。孝安天皇ノ御世七十六年正月ニ春宮ニ立給フ。御年廿六。父ノ御門失セ給テ。次ノトシ正月二日ニソ位ニ付給シ。御年五十三。位ヲ治チ給事七十六年也。此御世トソ覺ヘ侍ル。天竺ノ祇園精舎ノヤケテノチ。旃育迦王ノツクリ給トウケタマハリ侍シハ。須達長者ツクリテ佛ニタテマツリテ。二百年ト申シニ焼ニケルヲ。祇陀太子マタモトノヤウニツクリ給ヘリケル。後五百年ニテヤケタルヲ。今旃育迦王ハツクリ給フト聞エシ。

一 八代 孝元天皇。五十七年崩。年百十七。
葬大和國輕劍池島上陵。

次ノ御門ヲ孝元天皇ト申キ。孝靈天皇ノ御子。御母ハ皇后宮細媛也。孝靈天皇ノ御世卅六年丙午正月ニ春宮ニ立給フ。御年十九。丁亥ノ年正月十四日ニ位ニツキ給フ。御年六十。世ヲシラセ給事五十七年ナリ。三十九年乙丑六月ニ。ユ、シキ大雪ノフリタリシコソ淺増シク侍リシカ。

一 九代 開化天皇。六十年崩。年百十五。
葬大和國春日率川坂本陵。

次ノ御門ヲ開化天皇ト申キ。孝元天皇ノ第二ノ御子。御母ハ皇太后鬱色謎命ナリ。孝元天皇ノ御世廿二年ノ正月ニ東宮ニ立給。御年十六。癸未年十一月十二日ニ位ニ付給フ。御年五十一。世ヲ知り給事六十年。此御世ノ程トソ覺ヘ侍ル。南天竺ニ大真言

ノ祖師ノ龍猛并ト申シ、僧イマスナリト承シニ。真言ヲ始テヒロメ侍リト云事ハ此非也ト申シ、也。又祇園精舎ハフク、ヒマデヤケシヲ。旃育迦王ノ造給ヘリケルヲ。百年ト申シ、ニ盜人ヤキ侍リニキ。イゾコモノ心ウキハ人ノ心ナリ。ソノ、チ十三年アリテ。六師迦王又造リ給ヘリト承シハ。此御時ニ位ニ付セ給テ十年ナド申シ、程トソ覺ヘ侍ル。

一 十代 崇神天皇。六十八年崩。年百十五。
葬大和國山邊道上陵。

次ノ御門ヲ崇神天皇ト申キ。開化天皇ニ第二ノ御子。御母ノ皇后ハ伊香色繼命也。甲申歲正月十三日ニ位ニツキ給。御年五十二。世ヲ知り給事六十八年也。六年ト申シニ。齋宮ハシメテ立給ヘリシナリ。又國ノミツギ物。カチヨリ持テマイル事。タミモクルシミ日數モフル事。アシキ事也トテ。諸國ニ舟ヲツクラセ給キ。六十二年ト申シコロチヒ。天竺ニ惡王御座シテ。祇園精舎ヲコボチテ人ヲコロス所トサダメ給シカバ。四天王沙竭龍王イカリヲ成シテ。コバチケル人ヲ大ナル石ヲ持テ押殺給ケルト承リ侍リキ。六十五年ト申シニ。熊野ノ本宮ハ出テ御座シナリ。凡此皇御心メデタク。事ニオキテクラカラズチハシマシキ。

一 十一代 垂仁天皇。九十九年崩。年五十一。
葬大和國添上郡伏見東陵。并原伏見東陵。

次ノ御門ヲ垂仁天皇ト申キ。崇神天皇ニ第三ノ御子。御母ノ皇后ハ御間城姫ナリ。

ト、恐行

崇和天皇四十八年四月ニ御夢ノ告アリテ。東宮ニ立奉給キ。御年廿。壬辰ノ年正月三日位ニ付給フ。御トシ四十三。世ヲ知セ給フ事九十九年ナリ。四年ト申シニ。后ノ兄コノカミ吉隙ヲウカマヒテ后ニ申給ヤウ。コノカミトテフト、タレテカ志深ク思給ト申給ニ。后何トモオボサデ。兄ヲコソハ思増奉ト宣テ聞テ。コノ御兄ノ宣ク。シカラベテウト、「ハ若ク色衰ヘズサカリナル程也。世中ニカタチヨクワレモ人トオモフ人コソ多カル事ニテ侍レ。我位ニツキナバ。此世ニテハセシ程ハ世ノ中ヲ御心ニマカセタテマツルベシ。ミカドヲ失ヒ奉給ヘトテ。劔ヲトリテ后ニ奉リ給ヒツ。后アサマシクテソロシクヲボセド。カクイヒカケラレナン。ノガルベキカタモナクテ。ツチニ御袖ノウチニ劔ヲカクシテヒマヲウカマヒ給ニ。アクルトシノ十月ニ。御門后ノ御膝ヲ枕ニシテ。ヒル御トノゴモリタリシニ。此事只今ニコソト思シ、ニ。チノヅカラ涙クダリテ。ミカドノ御カタニカ、リシカベ。ミカドオドロキ給テノタマフヤウ。ワレ夢ニニシキノ色ノコクチナハ。ワガクビチマツフト見ツ。又大ナル雨后ノカタヨリフリキテ。我顔ニソ、グトミツ。イカナルコトニカトオホセラレシニ。后エカクシハテタマハデ。フルヒチチ恐レ給テ。涙ニムセビテ。アリノマ、ノ事ヲ申給テミカドキコシメシテ。コノ事后ノ御トガニアラズト。オホセラレナガラ。コノカミノ王又后ヲモウシナハセ給ニキ。ユ、シクアサマシカリシ事ニ侍キ。七年ト申シ、ニゾ相撲ハハ

ツマリ侍シ。十五年ト申シニ。丹波國ニスミタマヒシミコノ御ムスメ。五人オハシキ。ミカドコレヲミナマイラスベキヨシオホセ事アリシカバ。タテマツリタマヘリシニチノノトキメカセ給シ。其中ニチカノヲト、ノ座セシガ。カタチミニク、ナムチハシケレバ。モトノクニヘカヘシツカハシ、程ニ。カツラ川ヲ渡ルトテ心ウシトヤオボシケン。クルマヨリオチテヤガテハカナクナリ給キ。アハレニ侍シ事ナリ。サテソレヨリカシコチオチクニト申シテ。此ゴロハチトクニトゾ人ハ申ナル。ソノ年ノ八月ニ。ホシノ雨ノゴトクニテ降シトコソ見侍シカ。アサマシカリシ事ニ侍リ。廿五年ト申シニ。太神宮ハハツメテ伊勢ノ國ニチハシマシ、ナリ。コレヨリサキニアマクダリチハシマシタリシカドモ。處々ニチハシマシテ。伊勢ニ宮造チハシマスコトハ。アマテル明神ノ御チシヘニテコソトシアリシ御事ナリ。廿八年ト申シニ。ミカドノ御ヲト、ノ御子ウセ給ニキ。ソノ程ノ世ノナラヒニテ。チカクツカマツル人々チイキナガラ御ハカニコメラレニケリ。コノ人々ノヒサシクシナズシテアサタニナキカナシムチ。ミカドキコシメシテ仰ラル、ヤウ。イキタル人ヲモチテシヌルニシタガヘム事ハ。イニシヘヨリツタハレルコトナレドモ。ワレ此事ヲ見キクニ。カナシキ事カギリナシ。イマヨリコノ事都テナク留ムベシトテ。ソノ後土師ノ氏ノ人。土ニテ人カタケモノノカタナンドヲ造リテナム人ノカハリニコメ侍シ。オホヤ

ナ以下廿四字、鏡本補

クコレヲヨロコビテ。土師トイフ姓ヲタマハセシナリ。コノ比大江ト申姓ハ。ソノ土師ノ氏ノ末ナルベシ。八十二年コノホドトゾウケタマハリシ。祇園精舎ハアレハテ、人モナクテ九十年バカリスギニケルチ。切利天ノ王ノ第二ノ御子ヲクダシテ人王トナシテ。又ツクリミガ、ルトウケタマハリシ。佛ナンドノオハシマシ、ニモマサリテ。目出ダクゾツクラレニケル。九十三年ト申シニゾ。後漢ノ明帝御夢ニ。コガチノ人キタルト御覽シテ。アクル年天竺ヨリ。ハシメテ佛法モロコシヘツタハリニシ。

一 十二代 景行天皇。六十年崩。年百四十三。葬大和國山邊道上陵。

次ノミカドヲ景行天皇ト申キ。垂仁天皇ニ第三ノ御子。御母ノ皇后ハ日葉酢媛命也。

垂仁天皇ノ御世。卅年正月甲子日東宮ニ立給。父ノミカド二人ノ御子ニ申給ヤウ。チノノ心ニナニチカエムト思フトノタマフニ。アノミコハ。ワレハ弓ヤナノホシク侍ト申給。テト、ノミコハ。ワレハ皇位ヲナンエント思ト申給フ。コノ事ニシタガヒテ。兄ノ御子ニハ弓矢ヲタテマツリ。弟ノミコトチベ東宮ニタテ奉リ給ヘリシ也。辛未ノトシ。七月十一日ニ位ニツキ給フ。御年八十四。世ヲ治チ給事六十年也。五十二年ト申シニ。内宴ヲコナヒ給シニ。成務天皇ノイマダミコト申シニ。武内ト其座ニマイリ給ハザリシカバ。ミカドタヅチサセ給シニ。武内申給ハク。人ノミナ御アツビノアヒダ。心ヲユルウスベキチリナリ。コノ時モシヒマニウカヅフ心アルモノモ

ヤ、據集賢木和

武内、集賢木元

侍ランニト思ヒテ。門ヲカタメテナン侍ト申タマヒシカバ。ミカドイヨクナラビナク寵シ給キ。武内ハ孝元天皇ノ御ムマゴナリ。コノ後代々ノミカドノ御後見トシテ世ニヒサシクオハシキ。イマニヤハダノ御カタハラニチカクイハ、レタマヘルハ此人ニイマス。五十八年ノ二月ニ近江ノ穴穗宮ニウツリニキ。クマノ、新宮ハコノ御時ニゾハシマリタマヘリシ。

一 十三代 成務天皇。六十一年崩。年百九。葬大和國狹城橘列池後陵。

次ノミカドヲ成務天皇ト申キ。景行天皇ニ第四ノ御子。御母ノ皇后ハ八坂入姫也。景行天皇ノ御世五十一年八月壬子日東宮ニ立給。辛未ノトシ正月五日戊子ニ位ニツキ給。御トシ四十九。世ヲ治チ給事六十一年。御カタチ殊ニスグレ。御タケ一丈ゾオハシマシ。武内コノ御時三年ト申シニゾ。大臣ニナリ給ヘリニシ。大臣ト申事ハコレヨリハシマレリ。モトハ棟梁ノ臣ト申キ。コレモタマ大臣オナヲコトナリ。ツカサノ名ヲカヘ給ヘリシカバリナリ。此ミカド御子オハセザリシゾクチオシクハ侍シ。サテ御チイノ御子ヲ位ニ付給ヘリシ。

一 十四代 仲哀天皇。九十年崩。年五十二。葬河内國惠我長野四陵。

次ノミカドヲ仲哀天皇ト申キ。景行天皇ノ御子ニ日本武尊ト申シ。其第二ノ御子ニナハシマス。御母ハ垂仁天皇ノ御女ナリ。成務天皇卅八年三月ニ東宮ニタチ給。壬申

ノトシ正月十一日ニ位ニツキ給。御年四十四。世ヲ治チ給コト九年。ツクシニテウセ給ニシカバ。武内御骨ヲバトリテ京へ歸リタマヘリシナリ。

一 十五代 神功皇后。六十九年崩。年百。葬大和國狹城楯列池上陵。

ツギノミカドヲ神功皇后ト申キ。開化天皇ノ御ヒイゴ也。中哀天皇ノ后ニテオハセシナリ。御母ハ葛木高額媛。辛巳ノトシ十月二日位ニツキ給。女帝ハコノ御時ハツマリシナリ。世ヲ治給事六十九年。御心バヘ目出御カタチ世ニスグレ給ヘリキ。仲哀天皇ノ御時八年ト申シニ。ツクシニテ彼天皇ハ后并ニ臣家等ニ和議シテ宜ク。我長安ノ都ヲ立テ。此ツクシ筑前國ノハカタマデ來レルハ。異國ノ四ヶ國一議シテ。日本ヲ傾ベキ由聞食ニヨリテ。勸テ日本ヨリ上手ヲ打テ。異國ヲ隨テ我日本ノ神國ヲ助ケント思志ナリ。然バ彼四ヶ國ノ中ニハ高麗殊ニ大國ナリ。先高麗ヲ責ベキ歎如何アルベキト。御門異見伺給。日本ノカタウドノ神御座テ。然ニ彼新羅ノ大臣等ハ。我國ヲ先責ラレンズル事聞サトリテ。神ニ祈テ日本ノ大將軍ノ仲哀天皇ヲノロヒ調伏スルヲヒタマシカリケレバ。伊勢スヰカノ宮ノ神彼新羅ノ大王等ニ教テ。日本天皇ノ命ヲツマムベシト神託シ給キ。サテ既ニ御門ハ彼ノロヒヲ請テ。ツクシノ舟ノ内ニテ今ハ限ノ御病ニ伏給ニキ。其時御門后ニ寂後ノ勅定アリキ。朕ハ彼國ノ咒咀ヲウケテ。命ハヤク空ク成ル共。願ハ后朕ガ寂後ノ遺言ヲ忘給ズシテ。彼國ヘ向給ヘト敕

スヰカ、當作イ
スヰ、下同

キ、或當作テ

シ給キ。神コノ皇后ニツキ給テ宜ク。様々ノ寶多カル國アリ。新羅ト云。先彼國ユキムカヒ給ハマテノヅカラシタガヒナントノ給キ。然バ其事ナクテヤミニキ。彼皇后ハ今天皇ノ御□ニ宜ク。ミカドハ神ノ調伏ノ教ニシタガヒ給ハデ。世ヲタモチ給事ヒサシカラズナリヌ。イトカナシキ事ナリ。イヅレノ神ノタ、リヲナシ給ヘルゾト。七日イノリ給シニ。日本ノカタウドノ神託宣シテ宜ク。伊勢ノ國スヰカノ宮ニ侍神ナリトアラハレ給シニ。サチハ御門ハ死給ベシ。我ハ向ベシト。此事カナフベキナラバ。ワガカミワカレテニナレトノ給シニニナリニキ。則ミヅラニユヒ給テ臣家ニノタマハク。軍ヲ發ス事ハ國ノ大事ナリ。イマ此事ヲオモヒタツ。ヒトヘニ汝等ニ任ス。ワレ女ノ身ニシテ男ノスガタチカリテイクサチオコス。ウヘニハ神ノメグミヲ蒙リ。下ニハ汝等ノタスケヲタノムトテ。マツラトイフ河ニ御座テイノリテノ給ハク。モシ西ノ國ヲ打ベキナラバ。ツリニカナラズ魚ヲエムトテツリ給シニ。アユヲツリアゲ給ニキ。ソノ、チ諸國ニ船ヲ召。ツハ物ヲアツメテ。海ヲワタリ給ハントテ。マヅ人テイダシテ國ノ有様ヲ見セサセ給フニ。ミヘヌヨシヲ申。又人ヲツカハシテ見セシメ給ニ。日カズオホクツモリテカヘリマイリテ。イヌ非ノカタニ山アリ。雲カカリテカスカニミエ侍ト申シカバ。皇后ソノクニヘ向ハントテ。石ヲトリテ御コシニサシハサミ給テ。事ヲハリテカヘラン日。コノツクシノクニ、シテウミ奉ラント

イノリチカヒ給ニキ。コノホド八幡ヲハラミ奉ラセ給シナリ。仲哀天皇ウセサセオ
 ハシマス事ハ二月也。ハラミ始メ給シハ正月也。此事ハ十月ナレバ。タマナラズ成セ
 オハシマストモ。ミカドハシラセ給ハヌ程ニモヤ侍リケム。扱十月辛丑ノ日ソ新羅
 ヘワタリ給ヘリシニ。海ノ中ノサマノ大ナル魚ドモ舟ドモノ左右ニソヒテ。大
 ナル風吹テスミヤカニイタル。舟ニシタガヒテ。浪アラク立テ忽ニ新羅國ノウチヘ
 タマイリニ入ケル時。カノ國ノ王ヲチ恐テ臣家ヲアツメテ。昔ヨリイマダカ、ル事
 ナシ。海ノ水スデニ國ノウチニミチナントス。運ノツキチハリテ。國ノ海ニ成ラント
 スルカト。ナゲキカナシムホドニ。軍ノ船海ニミチテ。ツバミノコエ山ヲウゴカス。
 新羅ノ王コレヲ見テオモハク。コレヨリ東ニ神國アリ。日本トイフナリ。ソノ國ノツ
 ハ物ナルベシ。ワレ立合ベカラスト思テ。カノ王ス、ミテ皇后ノ御船ノ前ニ參テ。
 今ヨリナガク隨奉テトシ、ニミツギ物ヲタテマツルベシト申キ。皇后則其國ヘ入タ
 マヒテサマノ寶ノ倉ヲ封シ。國ノ指圖并ニ文書ヲトリタマヒキ。王サマノ
 寶ヲ舟八十艘ニツミテ奉シニ。此時皇后以下多ノ寶ヲ得給テ。既ニ今ハ彌ヨ御分限
 ノ御勢力ヲビタマシク成セ給テ。サテ聽テ其ウツリニ極テ。チビタマシキ大國ノ高
 麗ヘ向セ給シニ。皇后ノ身方ヘ與力ノ大神達影向シ給テ。神軍ツヨク御座キ。其中ニ
 モ春日大明神ハ常陸國鹿島ヨリ。スハ住吉ノ兩神ヲ左右ニメシクシ給。其御船三艘

ニテ皇后ヲ見ツギ奉給。皇后ノ御船ニハ。伊勢天照太神ノ御眷屬ノ兩神。皇后ノ御舟
 ノ内ニテ。遙ノ伊勢神明ヘ御祈念アリシ故ニ。兩神ヲ皇后ノ御舟ヘ與力ノ爲ニ進シ
 奉リ給キ。其兩神ト申ハ。一ハ筑前國香椎ノ大明神。二ハ肥前國河上ノ大明神是ナ
 リ。此兩神ハ皇后ノ御船ノトモトヘトニ立給キ。ヘサキニハ香椎。トモニハ河上。此
 兩神ハ春日ノ御影向ヨリ先ニ。マツ伊勢ノミツギノ御モヨウシニヨリテ。皇后ノ御
 舟ヘ兩神共ニ甲冑ヲヨロヒテ見繼マイラセ給ケル。其兩神ノ内河上ノ大明神皇后ヘ
 御申アリケル様。古ヘ日本國ヲ第六天魔王ト天照太神ト爭論シ給シ時。海ノ上ノ舟
 軍ノ與力ニハ。根本トシテ春日大明神コソ御身ヅカラ甲冑ヲメサレ。アマノフルノ
 劔ヲ拔持チ給。魔王ノ軍兵ヲ多ク亡シ給時。魔王遂ニ隨ヒ奉テ。日本國ノ去狀名判ヲ
 居テ奉キ。其ヲ今ニ至マデ。日本ノ寶ノ三種ノ神祇ノ第一ノ神靈ト申御寶是也。然バ
 古ヘテ例トシテ。今モ皇后ノ御船ハ。尤春日大明神ヲ勸請シ奉御座スベク候ト申サ
 セ給タリケル時。皇后ウシテ水ヲ御手水ニメサレ。遙ニ其ヨリ常陸ノ鹿島ヘ向給。
 春日ヘ御祈念御座ケルニヨリテ。春日ハ左ニ住吉。本地聖。右ニスワノ大明神。本地虛。三
 所共ニ甲冑ヲヨロヒ座テ。皇后ノ御船ヘ參セ御座シ。春日ノ御計トシテ河上ノ大明
 神ヲ御使者トシテ。海底ノ龍宮城ノ大龍王沙竭羅龍王ニ。千珠滿珠ノ二ノ玉ヲメシ
 取給。此軍陣ノ海中ヘ先千珠ヲ投ゲシメ給シニ。海水忽ニカワキヒテ。クガノ如ニ成

シ時。彼濱ギハハフキ出タリシ高麗ノ大王大臣。并ニ數万騎ノ軍兵ノワヅカニ唐船六十餘艘ノ分限ノ小勢ト見成タルヲ。海中ノ水上ノ軍勢ナリツル程コソ思ナガラニテ。力無手取ブ取ニ亡セザリツレ。今ハ軍陣ノ大海カラキテ。カクノ如ニ成リシタリ。早クカツニノリテ水濁タル海中へ責入テ。皇后ノ六十餘艘ノ小勢ノ敵ヲ亡サン事イト安スカルベシトテ。皆悉ク海中へ責入シ時。春日ノ御計ヒニテ。此時又河上ノ大明神ニ仰テ。滿珠ノ玉ヲ投入シメ給シニ。忽ニ大水涌キ出テ海中ニ滿テルノミナラズ。海上ニアマリテ高麗ノ國中悉ク大海ノ如ニ大水ニ沈没セシ時。彼高麗ノ大王大臣數百騎ノ軍兵等。皆仰天シテ掌ヲ合降ヲ乞。願ハ此大水ヲ留メ給テ。再ヒ我等ガ命ヲ助給ヘト。手ヲアゲテ祈リ乞奉シニコソ。此時又彼干珠ヲ投給テ大水ヲカラカシメテ。カレラガ命ヲ助給リ。春日ノ御誓ハ慈悲滿行ノ御事ニテ座ス故ニ。千戰百戰ノ戰ヒニ及ズ。只ニ果ノ玉計ノ御計ニテ。數万騎ノ敵ノ命ヲバ。一人モ害シ給ズシテ。然モ御目出ク皇后ノ御軍ハ勝給ヌ。高麗ノ大王命ヲ助ラレ進ゼタル事ヲタウトミ喜テ。ミツギ物ヲ船卅艘ニ積ミテ。多ノ寶ヲ皇后へ奉リニタリ。其時彼皇后ノ御船ノヘサキニ甲冑皆具シ給ヘリシ與力ノ大神香椎大明神。御ミヅカラ重トウノ御弓ノユハズニテ。軍陣ノ磯ニ見ヘタリシ岩ノ面ニ彫リ入タル文字ハ。未來際ニテ亡消失スベカラザル間。證文ノ爲ニアソバシ置レタル。其文字今ニアリ。彼文字ノ御詞ニ。

高麗國ノ大王大臣。并ニ其國中ノ一々男女。上下數百騎ノ軍兵等ハ盡未來際日本國ノ奴ノ進退タル事。譬バ犬ヲ隨タルガ如クナルベシト也。誠ニ目出日本國ノ神國タル御威光。如何デカ肩並國アルベキトゾ覺シ。此御威ノ御ヨソヲヒニチテ恐レ奉テ。未責サセ給ヌ前ニ勸テ。殘ノ國ノ百濟仁那ハクサイニナニケ國ハ。各ノ頭ヲ傾テ日本ノ奴ノ國トナリ奉ルベシト申。遂ニ新羅高麗百濟仁那ノ四ケ國。皆日本ノ進退管領ノ國ト成シ御事コソ。殊ニ目出御事ナリシカ。此高麗ノ軍ノ海中ニテ。御方ノ軍兵ノヨリハノ時。皇后ノ御胎内ノ八幡ノ胎内ニシテ。軍ヨベヒノ時聲ヲ胎内ヨリ。虚空モヒマク計ニ高ク上給シ時ニコソ。御大將ノ皇后モ。六十餘艘ノ兵舟ノ身方ノ軍兵モ。皆々奇特ノ思ヲ成テ名ノ武クイサメル武藝ノ勢力。今ハ彌ヨ強クゾナリニケル。軍陣ニシテ日數ノ間ニ。皇后ノ御夢ニハ。此腹ノ内ヨリ或時ハ火威ノ鎧甲ノ皆具ノ武者出デ。此軍ハ定テ勝ベシト告給。又時々目出吉夢共多ク皇后ニ見セ進サセ給シモ。此御胎内ノ八幡ノ皇子ノ御メグミノ御頼シカリシ御事ナリ。サテ皇后ハ此胎内ノ皇子ノ御瑞相ノ御頼シキ上ニ。重テ海ノウシチノ水ヲ御手水トシ給テ。遙ノ東國ノ伊勢國へ打向キ給。此度ノ合戰ハ日本安否ニテ候。願ハ天照太神加護シ給ヘト御祈念アリテ。サテ先御大將ノ皇后先陣ニス、ミ。敵ニ對シテ牒ノ御詞ヲ出給シ。其御詞ニハ。日本ハ元ヨリ天照太神ノ始女神トシテ國主タリシヨリ。女人國主タル有爲ノ國也。然間

我女牀タリト云ヘドモ先皇ノ御遺言ニ任テ大將軍トシテ向フ處ナリ。高麗ハ三カ
 ノ隨一ト號ストハ云ヘ共。王民共ニ皆愚戇蚊虻ノ邊國也。速ニ日本奴婢タルベシ。不
 レ然バ悉ク可ニ治罰。定後悔スベシト宣シニ。高麗ノ敵此詞ヲ聞。大ニアザラヒテ。
 日本ノ賢キ國トコソ聞ニ。女牀ノ國王トシテ此大戦ニ趣ク先以安平ナリ。如何高麗
 ノ大國ニ對陽スベキトテ。箭ヲ射ル事雨ノ如ク。防キ戰フ夏ヲヒタマシ。此ノ軍ノ強
 クナリシ時。皇后重テ伊勢天照太神ヘ御見ツギアルベキト御祈念ノ時。彼伊勢ノ御
 眷屬ノ兩神ハ。皇后ノ御舟ヘ參ッ給シ御事也。サテ此御合戦ノ日數ノ間ニ。御大將ノ
 皇后ノ御胎ハ既ニ十月月ニ及タリケレバ。今モ昔モ人ノ口ハフタギ難キ事ナレバ。
 六十余艘ノ舟ノ内ノ身方ノ軍兵内々ニ。アタラ大將ノ腹ノ大キナルヲ見ヨヤナンド
 ヲヒサシテワラヒ奉ケルヲ。皇后内々聞サトリ給テ。其御腹ヲ隠トテコソ。鎧ノワキ
 立ト云事ハ始テ。今ノ世マデモ鎧ニワキ立ト云事ハ其ヨリ始タリシナリ。サテ此軍
 ハテ、御喜ニテ引給シ時。ツクシ九國ノ内ノ大隅國ノ宮ニテ。大盤石ノ影ヲ便トシ
 テ。彼八幡ヲ産ミ進セ給シ時ニテ。御約束ノ御誓ノクレナ非ノ御袴ノモノコソノ
 石ヲ取給ニケル。其御誕生ノ時大盤石ノ岩ノ上ノ虚空ニ。赤幡八流紫ノ雲ノ上ニ
 靡キ懸テ七日七夜アリケルヲ。是コソ此皇子ノ御枕上トテ皇后取テロサセ給テ。皇
 子ノ御一期ノ御守ト定メ給。皇后ハ六十九年ノ御治世座^テシテ。此皇子ヘ御位ヲ讓リ

ヤウ、據集覽本

ノ、或當作ナ

マイラセ。應神天皇ト號シ給キ。其在位四十一年。御年百十一ニテ崩御シ時。此赤幡八
 流ヲ戒定惠ノ金ノ箱ニ納入。彼筑前國宮崎ニ納テ。纏テ此金ノ箱ヲ神牀トシテ八ノ
 幡ノ神ト號奉テ。忝モ今ノ男山岩清水ニ崇奉ルマデモ。其號ヲ八幡大菩薩ト申ハ此ノ
 謂レ也。此古キ内證ノ御事ハ。阿彌陀如來ノ佛子ノ八聖支ノ其垂跡ノ八流ノ幡也。
 彼皇子ノ御生レハ十二月ノ御事ナリシニ。此大盤石ノウミノ宮ノ御産之時。岩ノ上
 ニ五言ノ四句ノ文字。忽ニ自然トシテ顯レタリシゾ殊ニ不思議ノ御事ナリシ。其文
 ニ云ク。昔於靈鷲山。說妙法華經。爲度衆生故。示現大菩薩トナリ。今ニ此文
 ハ其岩ノ面ニ現在シテ有トソ承ハル。サテ皇后ハツクシノ大隅國ウミノ宮ニテ御産
 ノ後。御年ヲ取セ御座テ。其次ノ年ノ春長門國ノ元都ヘ歸リ給シテ。御マ、子ノ御子
 ダチ思ヒ給フヤウ。父ノ御門ウセ給ニケリ。皇后スデニ皇子ヲウミ奉リ給テケリ。
 是テ位ニツケントコソハカリ給ハンズランメ。ワレラ兄コノカミニテ。イカダカ弟
 ニハ隨ベキトテ。ハリマノアカシニテ。皇后ヲ待請タテマツリテ。カタアケタテマツ
 ラントハカリ給シテ。皇后キ、給テ。ミヅカラ皇子ヲイダキタテマツリタマヒテ。武
 内大臣ニ仰合セラレテ南海道ヘ御舟ヲイダシ給シカバ。チノヅカラ紀伊國ニイタリ
 給ニキ。ソノ、チ御マ、子ノ御子ダチムホンノオコシテ。皇后ヲカタアケタテマツ
 ラントシ給シ程ニ。アカキ非ノシ、イデキタリテ。兄コノカミ達ノ内第一ノ兄ノ御

子ヲクヒコロシテニキ。其後ツギノ兄コノカミ武内ノ大臣トタ、カヒ給シモ。ウシ
 ナハレ給ニキ。サテモアサマシカリシ。コノタ、カヒノ間ニ。ヒルモヨルノクニク
 ラクシテ日カズノスギシテ。皇后オホキニアヤシミ給テトシオヒタルモノドモニト
 ヒ給シカバ。二人ヲヒト所ニハフリタルユヘナリト申シカバ。タヅネサセ給ニ。小竹
 祝ト天野祝トイフ二人ハイミツキ天下ノ寶ノ陰陽ノ守ノ伴違ニテ年比ヲ經ル程ニ。
 小竹祝ウセニケルヲ。天野祝ナキカナシミテ。ウレイキテ何かハセムトテ。カタハラ
 ニフシテ同ク空クナリニケルヲ。ヒトツツカニコメニケリト申シカバ。ソノツカチ
 コボチテ見サセ給ニ。誠ニ申ガゴトクナリシカバ。ホカトノトニ別々ニウヅマセ
 サセ給テ後。スナハチ天下ノ光ハアラハレニシ事ナリ。其年ノ冬十月ニ臣家ダチ長
 門國ノ内裏ニシテ。此皇后ヲ皇太后ニ上ケ奉リヌ。此程トゾオボユル。祇園精舎ヲ天
 魔ノヤキ侍ニケルトキ、侍シナリ。

一 十六代 應神天皇。四十一年崩。御年百十一。
 次ノミカドヲ應神天皇ト申キ。イマノヤハタノ宮ハ此御事ナリ。仲哀天皇ニ第四ノ
 御子。御母神宮皇后ニオハシマス。神宮皇后ノ御世三年ニ東宮ニ立給。御年四歳也。
 庚寅ノトシ正月丁亥日位ニ付給。御年七十一。世ヲ知食夏四十一年也。八年ト申シ四
 月ニ。武内ノ大臣ヲツクシヘツカハシテコトヲサダメ政ヲタテマツラセ給シニ。コ

御、據集覽本補

カミド以下十三
字、據集覽本補

ノ武内ノヲト、ニテヲハセシ人ノ。ミカドニ申給ハク。武内大臣ツ子ニ王位ヲ心ニ
 カケタリ。ツクシニテ新羅高麗百濟。コノ三ノ國ヲカタラヒテ。大ヤケヲカタアケタ
 テマツラントストナキ事ヲ讒シ申シカバ。ミガト人ヲツカハシテ。コノ武内ヲウダ
 シメ給ニ。武内ナゲキテ。ワレ君ノ御タメフタ心ナシ。イマ罪無テ身ヲ失テントス。
 心ウキ事ナリトノ給フ。其時ニ壹岐直祖眞根子トイフモノアリキ。カタチ武内大
 臣ニタガハズ相似タリキ。コノ人大臣ニ申テイハク。カマヘテノガレテ都ヘマイリ
 テ。ツミナキヨシテ申給ヘ。ワレ大臣ニカハリタテマツラントテ。ス、ミイデ、ミヅ
 カラ死ヌ。武内ヒソカニ都ニカヘリテコトノアリサマヲ申給ニ。大臣ダチ二人ヲ召
 テカサ子テトハセ給ニ。武内ツミヲワセヌヨシヲノヅカラアラハレニキ。ソノ、チ
 ミカド此武内ノ大臣ヲ寵シタマヒシ也。

一 十七代 仁德天皇。八十七年崩。御年百十。
 次ノミカド仁德天皇ト申キ。應神天皇ニ第四ノ御子。御母ノ皇后ハ仲姫ナリ。癸酉ノ
 トシ正月己卯日位ニツキ給。御年廿四。世ヲ知給事八十七季也。此ミカドノ御ヲト、
 ヲ東宮ト申シカバ。スベカラク位ヲツギ給ベカリシニ。兄ニユヅリ申給ヒシカドモ。
 互ニツギ給ハズシテムナシクニトセテサセ給シカバ。東宮ミヅカラ命ヲウシナ
 ヒ給ヒニキ。ミカドコノ事ヲキコシメシテ。カノ東宮ヘイソギオハシマシテナキカ

水鏡上 仁德

ナシヒ給シカド、モカヒナクテ。其後位ニツカセ給ヒシナリ。四年ト申シ二月ニ。高
 キ樓閣ニ御ノボリアリテヨモノタミノスミカヲ見給テ。煙タエサヒシカリシカバ。
 イマヨツノチ三年。タミチヤスメコ、ノヘノウチノスリヲトドメサセ給キ。サテ七
 年ト申シ四月ニ。又ロウニノボリテ御ランゼシニ。タミノスミカニギハヒテ御ラン
 ゼラレケレバ。ミカドヨマセタマヒシ。

タカキヤニノボリテミレバ煙タツタミノカマドハニギハヒニケリ

四十二年ト申シ九月ニゾ。タカノ鳥ヲトルトイフコトハシリソメテカリハツメ給シ
 也。五十五年ト申シニ。武内ノ大臣ウセ給ニキ。二百八十歳トゾナリタマヒシ。六代
 ノミカドノ御ウシロミチシテ。大臣ノ位ニテ二百四十四年ゾオハセシ。御在位六十
 二年ト申シニ。氷スフルコトハ出ハツメテ。イマニイタルマデ供御ニソナフルナリ。
 此ミカド御カタチ世ニスグレテ御心バヘ目出御座シキ。

一 十八代 履中天皇。六年崩。年六十七。孝和皇國百舌鳥原南陵。

次ノミカドヲ履中天皇ト申キ。仁德天皇ノ御子。御母ノ皇后ハ是磐之姫ナリ。仁德天
 皇卅一年ニ東宮ニ立給フ。御年五歳。庚子年二月一日位ニツキ給。御トシ六十二。世
 ヲ治チ給事六十年。父ミカドウセ御座シテイマダ位ニツキタマハザリシ程ニ。葦田
 ノ宿禰女黒媛トイヒシ人ヲ后トセントオボシテ。御弟住吉仲皇子ヲツカハシテ。ソ

二、原作七、據集
 覽本及上文改

ノ日オハスベキヨシオホセラレシニ。コノ皇子ワガ名ヲカクシテ東宮ノオハスルサ
 マニモテナシテ。コノ姫君ニシタシキサマニナムナリニケル。サテ持給タリケル鈴
 ナラスレテ歸リニケリ。ソノツギノ夜。東宮ヒメ君ノ御モトヘオハシタルニ。居給ヘ
 ル側ニ鈴ノアリケレバ。アヤシクオボヘテヒメ君ニトヒタテマツリ給ケレバ。コレ
 コソハヨベモテチハシタリシ鈴ヨトノタマフニ。東宮ワレト名ノリテ皇子ノチカツ
 キ給ニケルニコソトオボヘテカヘリ給ニケリ。皇子此事ヲ東宮キ、給ヌラン。ワガ
 身平ナランコトカカカルベシトオモラシテ。東宮ヲ傾奉トハカリテ。ツハ物ヲチコ
 シテ宮ヲカコミシナリ。大臣ダチ東宮ニカ、ル事侍ト告タテマツリシニ。東宮ハ云カ
 ヒナク醉給テオドロキ給ハザリシカバ。大臣ダチ此東宮ヲ馬ニカキノセタテマツリ
 テニケ侍リニキ。皇子コノ事ヲシラズシテ宮ニ火ヲツケテヤキテンキ。コレハ攝津
 ノ國難波ノ宮也。東宮大和ノ國ニチハシテエヒサメ給テ。コレハ何所ゾト、ヒ給シ
 カバ。大臣ダチ事ノ有様有ツルサマヲ申給キ。サテ磯ノ神ノ宮ニチハシツキタリシ
 ニ。又ノ御ヲト、瑞齒皇子ト申シ人。インギマイリ給ヘリシチ。ウダガヒ給テアヒ給
 ザリシカバ。コノ皇子ワレニツキテハサラニオナマ心ニ侍ラズト申給シカバ。然バ
 彼住吉ノ仲皇子ヲ殺シテ後ニキタルベキナリト宣ケレバ。此ミヅハノ皇子。スナハ
 チ難波ニカヘリ給テ。住吉仲皇子ノチカクツカヒ給シ人ヲカタラヒ給テ。ワガイハ

補タテ、據集覽本

ム事ニシタガヒタラバ。ワレ位ヲタモタン時汝ヲ大臣ニ成サムト宣シカバ。イカニモ仰ニシクガフベシト申シカバ。オホク物ドモヲ給テ。シカラバ汝ガ主ヲ殺シテ我ニ得サスベシト宣ニ。其事ニシタガヒテ。主ノ皇子ノカハヤニハスルヲ。銚ヲモチテサシコロシ奉テんキ。ミツバノ皇子ソノ人ヲアヒグシテ。東宮ヘマイリ此ヨシヲ申給ニ。東宮宣ク。ワガクメニ忠アレドモ。ヲノレガ主ヲコロシツ。ウルワシキ心ニアラズ。サレドモ大臣ノ位ニ昇セサセ給テ。今日大臣トサカモリセント宣テ。カホカクル、ホドノ大キナル盃ニテ東宮マヅノミ給。次ニミヅハノ皇子ノミ給。次ニ大臣ノ飲ヲリニ東宮クチヲヌキテ。彼大臣ノ頸ヲキリ給テんキ。リテ次ノトシ位ニツキ給テノチ。ソノ黒姫ヲバ后ニタテ奉セ給シナリ。御在位五年ノ九月ニ。ミカド淡路國ニチハシテカリシ給シニ。ソラニ風ノ音ニテ聲スル物アリシホドニ。ニハカニ人ハシリマイリテ。后ウセ給ヌルヨシチ申シコソ。イトアヘナク侍シカ。

一 十九代 反正天皇。六年ニ崩御。御年六十。葬和泉國百舌鳥耳原北陵。次ノミカドヲ反正天皇ト申キ。仁徳天皇ニ第四ノ御子。履中天皇ノ御弟也。御母ノ皇后磐之姫ナリ。履中天皇ノ御世二年正月ニ東宮ニ立給。御年五十。履中天皇御子ヲハ正月三日即位セシカドモ。コノミカドヲ東宮ニハタテマツラセ給テ。丙午歳正月二日位ニツキ給。御トシ五十五。世チシラセ給事六年。御カタチ目出ヲハシマシキ。御タケ九尺

二寸五分。御ハノナガサ一寸二分。カミシモト、ノホリテ玉ヲツラヌキタルヤウニチハシキ。ムマレ給シトキ。ヤガテ御齒三骨ノ如クニテチヒタマヘリキ。サテミヅハノ皇子トゾ申侍リシ。コノ御世ニハ雨風モ時ニシタガヒ。世ヤスラカニタミユタカ也聖德太子御事。位ニツキ給テツギノ年十月ニ。都ハ河内國柴垣宮ニウツリニキ。

一 廿代 允恭天皇。四十二年ニ崩。年八十。葬河内國惠我長野北原陵。次ノミカドヲ允恭天皇ト申キ。仁徳天皇ニ第五ノ皇子。御母ノ皇后ハ磐之姫ナリ。壬子ノトシ十二月ニ位ニツキ給。御年卅九。世チシリ給事四十二年ナリ。兄ノ御門失給テノチ。大臣ヲ始テ位ニハコノ君コソ臈テ立給ベクレトテ。シルシノハコヲ奉リシカドモウケトリ給ハズシテ。我身久ク病ニシヅメリ。チ、ヤケノ位ハ慈ナル身ニテタモツベキ事ナラズト宣テ。大臣以下ナラス、メタテマツリテ。帝王ノ御位ノ空テ久カルベキニアラズト。タビク申シカドモ。ナシキコシメサズシテ。正月ニ兄ノ御門ウセチハシマシテ。明年ノ十二月マデ。ミカドヲハシマサズアリシヲ。御メノトニチハシマシ、人ノ。水ヲトリテ御ウガイヲ奉リ給シツイデニ。皇子ハナド位ニツキタマハデトシ月ヲバ過サセ給ニカハバル。大臣ヨリハツメテ世ノ中ノナグキニ侍ルメリ。人々ノ中ニシタガヒテ位ニツカセ給ヘカシト申給テ。ナホキコシメサテ。ウチウシロムキ給テ物モ宣ハザリシカバ。コノ御ウガイヲモチテ。サリトモトカクオホ

セラル、御事モヤトマチ給シホドニ。シハスノ事ニテイトサムカリシニ。久クナリニシカバ御ウガイモコナリテ。モチ給ヘル手モヒヘ通りテ。ステニシニイリ給ヘリシヲ。皇子見オドロキ給テイダキタスケテ。位ヲツク事ハキハマリナキ大事ナレバ。イマ、デウケトラヌ事ニテ侍レドモ。カクノタマヒアヒタル事ナレバ。アナガチニノガレ侍ベキコトニアラズトオホセラレシカバ。一天下ノ人ヨロコビヲナシキ。カクテ位ニハツキ給シナリ。三年ト申シ正月ニ。新羅へ藥師ヲ召ニ遣シタリシカバ。八月ニマイリタリキ。ミカドノ御病ヲツクロヒ給ジニ。ソノシルシアリテ御病愈サセヲハセシカバ。サマノノ祿ドモナンド給セテカヘシツカハシテソノキ。七年ト申シ十二月ニ御遊ノアリシニ。ミカド琴ヲヒキ給テ^后キ、ソメタテマツリテ。マヒテ打居給シナリ。アハレヒメ子ヲマイラセバヤト申タマヒシヲ。ミカドヒメ子トハタレガ事ニカト、ヒ申サセ給シテ。御コトノ目出ニヨリテ。我ニモアラズ申給ヘリケルニヤ侍リケン。サリナガラモ申出給ヌル御事ナレバカクシ給ベキナラズ。アガ弟ニ侍ルヲトヒメトナン申。イロカタチナン世ニ又ナラアタクヒ侍ラズ。衣ノウヘヒカリトナリ輝侍ルヲ。世ノ人ハサレバソトナリ姫トゾ申ト何トナク申サセ給タリケルヲ。御門コレヲキコシメシテ。ソレタテマツリ給ヘトセメ申サセ給シカドモ。トモカクモ御カヘリ事モ申給ハザリシカバ。直ニ御使ヲツカハシテ七度マデメシシカドモ

后、據集覽本補

御トシ、據集覽本補

マイリ給ハザリシカバ。又使ヲカヘテ遣シタリシニ。ソノ御使庭ニヒレフシテ。七日マデツヤノト物ヲクハザリシヲ。御使ノ云ガイ無ク死事ノアサマシサニ。乙姫内ヘマイリ給ニキ。ミカド悦給事カキリナクテ。トキメキ給サマナラフベキ人ナカリキ。此事ヲ姉ノ后安カラヌ事ニシ給シカバ。宮ヲベチニツクリテスヘタテマツリ給ヘリシ。御位ニテ四十二年ヲハシマシ、ニ。ミカドウセ給ヒニシヲ。新羅ヨリ年毎事ナレバニヤ。船地ナレバ船八十二サマザマノ物ヲツミ。樂人八十人相添テ奉リシニ。ミカドウセ給ニケリト聞テ。ナキ悲ミ給事コト限ナシ。難波津ヨリ京マデ。此ミツギ物ヲ持ツマケ奉置テカヘリニキ。コノ後ハワヅカニ舟二艘ナンド奉ツリシ。又懈タル年々モ侍リキ。

一 廿一代 安康天皇。^{三年ニ崩。年五十六。葬大和國管原伏見西陵。}第二ノ御子。御母ノ皇后ハ忍坂大中姫ナリ^{癸止イ}甲午ノトシ十月ニ御兄ノ東宮ヲ失奉リテ。十二月十四日ニ位ニツキ給シナリ。御トシ^{五十六}。世ヲシリ給事三年ナリ。明年ノ二月ニ。御弟ノ雄略天皇ノ未皇子ニテ御名ヲ大泊瀬ノ御子ト申テハセシニ。其御メニナシタテマツラントテ。御ヲヂノ大草香ノ御子ト申シ人ノ御妹ヲ奉リ給ヘト此御門仰事アリテ。御使ヲ遣タリシニ。コノ御子ヨロコビテ。身ニ病ヲウケテ久罷リ成ヌ。世ニ侍ラン事ケフアストイフ事ヲ

シラズ。此人ハ身無子ニテ侍ヲミナキガタクテ。ヨミヂモヤスクマカラレザルベキニ。ソノカタチノ見ニクキヲモキラヒ給ズ。カ、ル仰ヲモ蒙ル忝キ事ナリ。此我志ヲアラハシ奉ラントテ。御使ニツケテ目出寶ヲ奉レルヲ。此御使コレヲミテ。フケル心出キテコノ寶ヲカスメカクシツ。サテ歸リ參テミカドニ申ヤウ。更ニ奉ルベカラズ。オナツミコダチトイヘドモ。我等ガ妹ニテイカデカアハセ奉ベキト申ト云由ヲイツハリ申シカバ。御門大ニイカリ給テ軍兵ヲツカハシテ彼ノ草香ノ御子ハ母方ノ御ヲチニテ御座ルヲ忽ニ殺給テ。其御メヲトリテ此安康天皇ハ我妻トシ給テ。其草香ノ御子ノ御妹ヲメシテ御本意ノ如ク我御弟ノ大泊瀬ノ御子ト合セ給ツ。サテ此御門御即位三年ト申シ、八月ニ。御門樓ニ登リ給テ三寸ナンドス、メテアソヒ給シニ。后ノ宮ニナニ事カオボス事ハアルト申給ヒシカバ。后ノ宮ミカドノ御イトウシミヲ蒙レリ。何事ヲカ思ヒ侍ベキト申給。ミカド仰ラレテ云ク。我身ニハ恐ル、事アリ。コノマ、子ノ眉輪ノ皇子ヲトナシクナリテ。我彼父ヲ殺シタリケリトシリナバ。サダメテ此マ、子アシキ心ヲオコシテント宣ヲ。コノマユワノ皇子樓ノ下ニ遊アリキテキ、給テンケリ。サテミカドノエヒテ彼ノ后ノ御ヒザヲ枕ニシテヒル御トノゴモリタルヲ。カタハラナル太刀ヲ取テ。マユワノ皇子ハマ、父ノ御門ヲアヤマチ奉テ。ニゲテ大臣ノ家ニヲハシニキ。ミカドノ御弟ノ大泊瀬ノミコ此事ヲ聞テ。軍兵ヲ發

ニ以下十九字、據集覽本補

シテカノ大臣ノ家ヲカコミテタ、カヒ給キ。マユワノ皇子ハモトヨリ我位ニツカントノ心ナシ。タマ父ノ敵ヲムクフルバカリナリトイヒテ。ミヅカラ頸ヲキリテ死給ヌ。此マユワノ皇子ハ七歳ニナンナリ給シナリ。

一 廿二代 雄略天皇。二十三年二月。年九十三。葬河内國高麗原陵。

次ノミカドヲ雄略天皇ト申キ。允恭天皇ニ第五ノミコ。御母ノ皇后ハ忍坂大中姫ナリ。丙申ノトシ十一月三日位ニツキ給。御年七十。世ヲシリ給事廿三年ナリ。コノミカドムマレ給シ時。宮ノ内ナンヒカリタリシ。ヲトナニナリ給テ後心武クシテ多人ヲコロシ給キ。此多ノ殺害ノ内ニ我爲御イトコニテ御座セシ押羽皇子ヲ殺シ給キ。世ノ人大惡天皇ト申シ、ハ此御門ノ御事ナリ。御在位二年ト申シ、七月。ミカド愛セサセ給シ女御男ニアヒニシ。ミカドイカリ給ヒ。男女二人ナガラメシヨセテ。四ノ枝ヲ木ノ上ニハリ付テ火ヲツケテ燒殺給テンキ。同四年二月ト申シ、ニ。御門此葛木山ニテカリヲシ給シニ。ミカドノ御形ニ聊モダガハヌ人イデキタレリキ。ミカド是ハタレノ人ゾト宣ワセシニ。其人マヅ王ノ名ヲナノリ給ヘソノチ申サント申シカバ。ミカドナノリ給キ。其後ワレハ一言主ノ神ニ侍リト宣テ。アヒトモニ狩ヲシテ日クレテカヘリ給シニ。コノヒトコトヌシノ神ヲクリタテマツリシカバ。世ノ中ノ人タマハテハセヌカトゾ申アヒタリシ。廿二年ト申シ、七月ニ。浦島ノ子

テ以下二十五字、據集覽本補

寶來へ罷ニケリトイフ事侍シナリ。ミナ人ノシリタル事ナレベコマカニハ申ベカラズ。

一 廿三代 清寧天皇。五年ニ崩。年四十一。葬河内國坂門原陵。

次ノミカドヲ清寧天皇ト申キ。雄略天皇ノ第三ノ御子。御母ハ皇太夫人葛城韓姬也。雄略天皇ノ御世廿二年ノ正月東宮ニ立給。御トシ廿五。世ヲシリ給フ事五年。ミカドムマレ給テ御クシ黒ク無リキ。サテ白髮皇子トハ申シ、ナリ。民ヲ愛シ給御心アリシテ。父ノ御門御子ダチノ中ニ此皇子ヲ寵シ給テ。東宮ニタテ奉給シ也。庚申年正月四日位ニツキ給。御年卅七。世ヲシリ給事五年ナリ。此ミカド位ニツクベキ人ノ無事ヲナゲキテ。諸ノ國々ニ使ヲツカハシテ王孫ヲ求メ給ヒシニ。履仲天皇ノ御孫トイフ人二人ヲ播磨國ヨリ求メ出テ。兄ヲバ東宮ニ立テ、弟ヲバ皇子トシ給キ。此二人ハ御門ノイヤイトコニテ御座セシ御事ナリ。

一 廿四代 飯豐天皇。即位ノ年ニ崩。年四十五。葬大和國垣内岡陵。

次ノ御門ヲ飯豐天皇ト申キ。是ハ女帝ニ御座ス。履中天皇御子ニ押羽ノ皇子ト申テ黒姫ノ御腹ニ皇子御座シキ。其御女メ也。御母ハ菟媛ナリ。甲子年二月ニ位ニ付給。御年四十五。此御門ノ兄コノカミ二人。カタミニ位ヲ讓テサモニ位ニ付給ザリシ故ニ。此妹ヲ位ニ付奉給シ也。サテ程ナク其年ノ内十一月ニ失給ニシカバ。此御門ヲバ

兄コノカミ、或
當作御弟二字

系圖ナンドニモ入奉ヌトカヤ承ル也。サレ共日本紀ニ入奉テ侍ルナレバ。次第ニ申侍ル也。

一 廿五代 顯宗天皇。三年ニ崩。年卅八。葬大和國磐坂陵。

次ノミカドヲ顯宗天皇ト申キ。飯豐天皇ノ同腹ノ弟ニテ御座ス。乙丑歲正月一日位ニツキ給。御年卅六。世ヲシリ給事三年。父押羽ノ皇子ハ。安康天皇ノ御世三年ト申シ、ニ。安康ノ御弟雄略天皇ト申シ、ミカドノイマダ皇子ニテヲハシマシ、ニ。ウシナハレ給シカバ。ソノ御子ヲタリ丹波國ヘニゲテヲハシタリシニ。ナチ世ノ中ヲソリ給テ。御弟ノ君御兄ノ君ヲ勸メ奉テ。播磨國ヘ御座シテ。御名ドモヲカヘテ。郡司ニツカヘ給ヒキ。サテ年月ヲ過シ給シ程ニ。弟君兄君ニ申給ハシ。我ヲ命ヲノカレテ此所ニテ年ヲヘニタリ。今ハ名ヲ顯シナント宣シニ。兄ノ君シカラバ命ヲタモタンコトイトカタカルベシト宣シカバ。又弟君ワレラハ履中天皇ノ御孫ナリ。身ヲクルシメテ人ニ仕ヘテ馬牛ヲカフ。生タルカヒナシ。只名ヲ顯シテ命ヲ失テ。イトヨキ事ナリト宣テ。兄ノ君弟君カタミニイダキツキテナキ給コト限ナシ。兄ノ君サラバトク我等ガ名ヲ顯給テヨト宣シカバ。二人リ相具シテ郡司ノ家ニヲハシテ。アマダリノモトニ居給ヘリシカバ。ヨビ入奉テカマドノ前ニスヘテ。酒飲遊ナンドシテ各立テマフニ。此弟ノ君ヲガ御身ノアリサマタイヒツマケテ舞給テ。郡ノ司聞

補_レ、據集覽本

驚テ下リ騒。拜シ奉テ郡ノ内ノ民共テ發シテ。假ニ宮ヲツクリシテ。假染ニ居奉テ。ミカドニ此フタリノ皇子ヲ迎ヘ奉給ヘト申シカバ。清寧天皇悅テスナハチムカヘトリ給ツ。フ_レ子ナシ。位ヲツギ給ベキトテ。兄ノ皇子ヲ東宮ニ立給キ。サテ清寧天皇ウセ給ヒシカバ。東宮位ニツギ給ベカリシテ。御弟ニユヅリ給シカドモアルベキ事ニ非ズト申給ヘリキ。カクテカタミニ位ニツギ給ハザリシカバ。御妹ノ飯豐天皇ヲ位ニツケタテマツリ給シ程ニ。其年ノ内ニ飯豐モ失給ニシカバ。ナチ其御弟ノ皇子東宮ノ御勸ニ隨テ位ニツギ給キ。今此顯宗天皇是ニテ御座スナリ。ソノトシノ三月上ノ巳日ゾ始メテ曲水宴ヲ行セ給シ也。御在位二年ノ八月ト申シ、ニ。ミカド御兄ノ東宮ニ申給ハク。ワガ父ノ御子押羽ノ皇子罪ナクシテ雄略天皇ニ失レ給ヘリキ。浦見ノ心今ニ休ム事ナシ。我カノミカドノ御陵ヲコボチテ。其骨ヲクダギテステントノタマヒシテ。東宮宣ク。雄略天皇ハミカドニオハシマス。我父ノ皇子ハミカドノ御子ナリトイヘドモ位ニハ昇給ザリキ。マタミカドハ清寧天皇ノ御メクミチカウアリ給ヘリ。雄略天皇ハ是清寧天皇ノ御父ニチハセズヤ。イマ又君既ニ位ニノボリ給フ。イカデカソノ古キ恩德ノ清寧天皇ノ御志ヲ忘レ給ベキノ。陵ヲ壞リ候ハン事努々アルベカラズト申給シカバ。ソノ事ニシタガヒ給キ。コノ御門ノ御時世治リ民安ラカニ侍リキ。

一 廿六代 仁賢天皇。十一年二崩。年五十。葬河内國地生坂本陵。
 次ノミカドヲ仁賢天皇ト申キ。顯宗天皇ニヒトツ御腹ノ御兄也。清寧天皇ノ御世三年ノ四月ニ此御子ハ東宮ニ立給シ也。今戊辰ノ年正月五日位ニツカセ給。御年四十。世ヲシリ給事十一年ナリ。此ミカドノ御アリサマハ。顯宗天皇ノ御事ノ中ニ既ニコマカニ申侍ニキ。心ザマ目出ク御座キ。

一 廿七代 武烈天皇。八年崩。年十八。葬大和國傍丘磐塚丘陵。
 次ノミカドヲ武烈天皇ト申キ。仁賢天皇ノ御子。御母ノ皇后ハ春日大娘ナリ。仁賢天皇七年正月ニ東宮ニ立給フ。御年六歲。戊寅ノ年ノ十二月ニ位ニツギ給。御年十歲。世ヲシリ給コト八年。ソノ程人ヲコロス事ヲ朝夕ノワザトシ給。ハラメル人ノ腹ヲサキ破リテソノ子ヲ見給。人ノ爪ヲ援テ芋ヲ堀セ。人ヲ木ニノボセテ落シ殺シ。アル時ハ人ヲ水ニイレテ鉞ニテ指殺シ。アル時ハ女ヲハダカニナシテ板ノ上ニスヘテ。馬ノユ、シキワザスルヲ見セサセ給ニ。ソノカタニ入タル女ハ板ヲウルチヌテ。ミカド是ヲニクミ給テヤガテ殺給。サナキテベメシテ宮ヅカヘスベキ仰アリキ。カヤウノアサマシク心ウキ事オホカリシ御世ナリキ。御年十八ニテウセ給ニキ。御子モチハセザリシナリ。

一 廿八代 繼體天皇。二十五年崩。年八十二。葬攝津國三島盛野陵。